



Title	研究ノート：旧大阪外国語学校・第4回卒業記念帖「あけぼの」(1928), 故・奥平正二撮影編「昭和8年度中華及満洲修學旅行：1933年7月19日神戸港發～8月13日満洲國政府・新京解散」寫眞帖(1933), 第10回卒業記念帖「鵬翼」(支那語部, 1933)を手掛かりに同調主義を考察する
Author(s)	林田, 雅至
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103696
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

稲富進

思いを

紡ぐ



はじめに

友であり、活動の理論的先導者であり、教育運動の同行者でもあった東京都立大の小沢有作さんが急逝されてもう十余年の歳月が流れました。生前、ともに歩んだ「民族的マイノリティの人権保障運動」の実践史と自らの自分史を書き著わすことを彼と確かめ合い、約束していました。前著「島人二世教師と在日鮮人教育」シンヂュに自分史を重ねて書いたつもりでしたが、納得のいく「ありのままの私」を伝え切れていないことがずっと気がかりでした。照れや、気負い、気恥ずかしさやプライバシーの問題などが壁となり「ありのままの姿」を映し出していないことに気づいたのです。単なる回顧録にはしたくない、また、「めざした志の実現」の自慢話にしたくない。——そのように筆を走らせたけれども、自分史にかかる部分は納得できていないのです。退職後二十余年経ってようやく自身が教師として歩んだ途を冷静にそして、総括的にみることができるようになったように思います。最近、「再度、筆をとってみたい」との思いが強くなりました。

人生にはそれぞれに人間模様・人生模様があります。新任教師として難波中学に赴任したころの私は、教頭・校長や、指導主事など管理職を目指す、いわゆる教師の「立身出世」をめざす生き方をよしとして、ただひたすら走る日々でした。教師としての生き方に転機が訪れたのは、勤務する学校で出会ったマイノリティの生徒——とりわけ、夜間中学で出会ったオモニ・ハルモニたち民族的マイノリティに向き合うなかで、日本の社会が内包する不条理に気づいたのです。オモニ・ハルモニに寄り添ううちに教師の生き方に転機が訪れました。その間の人間模様を「ありのままに」描きたい。おおざっぱに言えば、志としてはマイノリティの側に立って生きる。その人びとともに生きる。人間として、教師として、マイノリティの生活と想いをくぐらせて社会と教育を見る、そういう点で、生きることと学ぶことを一つにするこ

とに努めてきたように思います。これからも生き方の基軸として大切に続けていきたい。そういう私の生き方はどのようなにつくられてきたのか。「わたしをわたしらしめたもの」を明らかにしたいのです。しかし歳月はどんどん流れていきます。高齢になって身体機能の衰えを自覚しながらも、気がせかれるだけです。もう後がないーそんな新たな気持ちで机に向かっています。「そのときどきに、どう考えたか、どう行動したかなどをありのままに書けばいい」と自分に言い聞かせながら机に向かっているのですが…。これまでにシンポジウムや講演で語ったことも多いのですが私自身の生き方の集大成です。ご容赦願います。なお、生徒の名前はすべて仮名で著しています。

— 目 次 —

1	学ぶこと生きること――	1
2	新任教師のころの私――	1
	・ 組合活動に冷ややかだったわたし――	4
3	島 ^{シマンチュ} 人の父・母のことそして私――	7
4	私に刻まれた「島」――	16
	・ 消えたアイスキヤンデ――	16
	・ 一時の寄留地　く先達シマンチュの支え――	17
	・ 変わりゆく島の姿――	17
	・ 島のくらし――	18
	・ 奄美島唄「かんつめ節」の哀調――	20
	・ 「迎え」の宴、旅立ちの「杯」――	21
5	私の戦時体験――	24

・大阪大空襲と卒業式――

25

6

戦後の体験――

27

・経済の混乱――飢えをしのぐ――島は遠い――

27

・屋台を曳いて――バイトに明け暮れた青春――

28

・初恋――住吉さんの祭り――

29

・引きこもりに悩んだ――

31

・戦後七十一年――いま思うこと――戦後民主教育の変質――

32

・戦後民主教育の歩みだし――

33

・教育の国家管理の動き――

34

・新たな国家主義の台頭――

36

・教え子を再び戦場に送らない――反戦・平和への思い――

38

・歴史教科書検定にみる史実の歪曲――

39

7

出会いと学び――

41

・教師としての生き方の葛藤――

41

・オモニ・ハルモニに向き合った夜間中学十五年――歴史認識の覚醒――

42

・夜間中学に学ぶオモニたち――出会いとまなび――

45

・ 衝撃の連続	くオモニたちの学びと私	45
・ 高仁道(コイント)さんのこと	――	47
・ 「て」と「で」、「ち」と「じ」	―― 日本語はややこしい	49
・ 座席をめぐる争い	――	50
・ 卒業したくない	くもつともつと勉強したい	51
・ 立ちはだかる「法」の壁	――	53
・ 何を学ぶか、何を教えるか？	く「読本日本語」の作成へ	53
8	人権教育運動の胎動と私	56
(1) 差別越境ほかおかりして…それが民主教育か？	く解放運動の問いかけ	56
(2) 実践が運動へ、運動がさらなる実践へ	――	58
・ 教室実践が進路保障の教育運動へ	――	58
・ 学校長のリーダーシップ	――	59
・ 興味深い職員会議録	――	60
・ 一人ひとりの潜在能力とどう引き出すか	――	61
9	脳裏に刻まれた子どもたちとの出会い	63
(1) 難波中学で	―― 自分に重ねた杉本一郎への向き合い	63

半生こだわった教育運動はなにをもたらしただか

89

- ・土師先生のことか頭をよぎった―― 65
- ・学校徴集金を巡って　く貧困の背景―― 66
- ・「子どもに寄り添う」ということ―― 67
- ・現実認識を阻んだ私の内なるもの―― 68
- (2) 金信子(キムシンジヤ)の訴え――進路保障を目指した運動へ―― 68
- (3) 天王寺夜間中学校で――私の本名実践―― 73
- ・本名をめぐる金菊子(キムクツジャ)とのバトル―― 73
- ・金稔万さんの「本名」裁判く司法の現実く司法の現実
――キムインマン―― 創氏改名は今も生きている―― 78
- ・日本人教員の立ち位置を明確にしよう！―― 79
- ・「開かれた」社会・学校の実像はどうなのか？―― 80
- 市立長橋小民族学級の開設運動とひろがり―― 82
- ・なぜ日本の学校に民族学級か―― 82
- ・朴正恵(パクチョンヘ)さんの述懐―― 84
- ・行政指導の名の地教委に対する国の圧力―― 86

・在日朝鮮人教育がもたらしたもの	〜日本社会・学校は変わったか〜	89
12	多様な民族の子どもも輝く学校を！〜在日朝鮮人教育の経験と成果の継承を！	91
・ニューカマー（新渡日）の子どもの民族的アイデンティティ	〜	91
13	忘れ得ぬ架橋の人	92
(1)	組織の運営を担った仲間	92
(2)	各地の仲間をつないだ小沢有作さん	95
(3)	決して旗は降ろさない	96
	——曹基亨・李殷直さんとの堅い絆	
14	学生に語ったこと	99
・「教育実習」講義で語ったこと——私の「教師論」	〜	99
・自分を読む	〜子どもたちとの出会いを通して	100
・教師になるということ	——講義のまとめ	103
(1)	教師の人間的条件	105
(2)	教師の教育的条件	107
(3)	「教師」からの解放	108
(4)	学びの新しい道へ	108

いま、わたしは ― 様々な支えのなかで ―

・ 絶望の崖つぷちに立つ ―

・ 妻のこと ―

・ 「よみかき茶屋」とわたし ―

・ 憩いの場、充電の場 ―

(1) ぬくもりの同窓会 ― 感謝の再会 ―

(2) 卒業から三十有余年 ―

(3) 楽しみの場で生まれたつながり ―

・ リハビリを兼ねた散歩く癒しの日課 ―

・ 私のこれから ―

註

あとがき ―

著者プロフィール

1 学ぶことと生きること

中学校の教員をリタイアした後、大阪教育大・関西大・近畿大学で教職科目を担当することになりました。講義のテーマとして「学ぶことと生きること」を軸に内容を組み立てました。四十余年の教師生活の中で様々な、育ちの環境のなかで生きる生徒たちとの出会い、出来事が私自身の生き方に大きな影響をもたらしたように思うのです。「わたしをわたしたらしめたもの」に深く関わっていることに気づいたのです。別の言い方で言うなら「人間に学ぶ」^{ひと} 生き方を探してきたともいえるのではないのでしょうか。

大阪市立難波中学校・城陽中学校・天王寺夜間中学校での教員生活では、貧困にあえぐ子ども、差別・抑圧の壁に阻まれて悩む生徒たちに出会って驚愕し、自らの育ちに重ねて、これらマイノリティの生徒たちに向き合ってきたように思います。自らの「目の前のこども」の置かれた状況を「確かな眼」で見、「寄り添って」生きる——これが私の教師としての生き方になりました。新任教師のころ目指した途からは一八〇度異なる生き方になったように思います。

2 新任教師のころの私

一九五六(昭和三二)年の年度途中に大阪市立中学校に教諭として採用され、十一月に市立難波中学校に赴任しました。教員としての第一歩です。大学に入って間もなく、一年間に及ぶひきこもり(三十一ページ参照)という精神的な病いをやつとの思いで抜け出した後だっただけにことのほか嬉しく、家族の期待もずつしりと感じていました。

「進、がんばるんやで！ 大和人に負けんようにな。偉くなつたらな、人はバカにせんようになる」。何度となく耳にした父母の言葉です。親はだれでもみんな、子どもに期待してそう言いますね。日本に学制が施行された明治期から、教育は「立身出世」の方法として親は子どもに期待を賭けてそう言うのです。社会的地位を得る手段として教育は存在したのです。明治以降の長い歳月、市民の意識に支えられて学歴社会はつくられてきました。現在、能力主義に変わってきているとはいえ、一般市民の意識は依然として学歴信仰が根強いようです。まして、シマンチュのわたしたちにとっては「ヤマトンチュ」に肩を並べて、生活基盤を

築いて市民権を得る大事な鍵だったんです。親の思いが刷り込まれていたのか、私はなんの疑いもなく、「立身出世」——つまり、校長・教頭、指導主事など管理職をめざしていました。

わたしが管理職への道を意識し始めたのは大阪市教委の制度としてあった、長期研修（内地留学）に京都大学に派遣された一九六四年ごろだったように思います。

サークルでの社会科の授業研究に精を出していたわたしに、「道徳教育の全体計画」の作成に加わってほしいと大阪府教育委員会、大阪市教育委員会から要請があり、引き受けることになりました。この事も管理職への期待を強めたように思います。

民主主義をめざしてすすめられた戦後民主主義教育は一九五二年国家主権を回復して以後、「教育の国家統制」を目指す政府文部省によって変革が急速にすすみました。一九五六年、教育委員の公選制を改め、首長による任命制を導入し、教育現場に教員の「勤務評定」制度を持ちこみました。教育内容でも、それまでは拘束性のない「試案」

だった学習指導要領を遵守することを義務づけるなどの改革を教職員組合の反対闘争を押し切って強行しました。一九五八年、学習指導要領を改め、学校行事で「日の丸掲揚」「君が代斉唱」が望ましいとされたのです。また、道徳の時間が「特設」されることになりました。日教組（日本教職員組合）は「道徳教育は全教育活動の領域で行うべきだ、教科と同じく道徳の時間を位置づけることは戦前の『修身の復活』につながる」と反対し、文部省主催の伝達講習会を阻止するなど次第に対立が尖鋭化していきました。私に、「道徳教育の全体計画」策定への大阪府教育委員会、大阪市教委の依頼があったのは一九五八年、文部省が小中学校の「道徳」の実施を通達した数年後のことでした。

「道徳教育の全体計画」は指針のようなもので学校の道徳教育の方向性を決める指針でした。市立難波中学校に新任として赴任した私は日々の授業、クラブ活動に、また校務分掌に励み、数年で学校内外の活動で頭角を現したように思います。難波中の当時の安橋貞雄学校長のもと校務運営の中心的役割をまかされるようになっていました。休日

には社会科の授業研究をすすめるサークルに参加したり、学閥が主催する研修会にも積極的に参加し、ここでも活躍していたように思います。当時、大阪には三つの学閥がありました。わたしが所属していた学閥は「瓊池会^{けいちかい}」と言いました。旧制池田師範学校系の学閥です。学閥は同窓会なんです。会合で管理職の昇任試験の研修や飲食を共にするうちに、しだいに学閥内での教頭、指導主事などの昇任の推薦がささやかれるようになって、そういう噂が聞こえるようになりました。天王寺師範系の「友松会」や、師範系ではなく、一般の大学系の学閥である「同志会」なども、大なり小なり似たような活動を続けていました。学閥は教師としての資質を育てることを建前としていましたが、教育委員会は校長・教頭や、指導主事の昇任や異動の際に、教委事務局の運営、学校の管理を円滑にすすめるため、昇任人事に学閥を利用していたように思います。つまり、学閥間の勢力争いであり、主導権争いであつたのです。当時の難波中学校の安橋貞雄校長は瓊池会の幹部であり大阪市教育局の管轄する教科・領域の研究をすすめる専門研究機関

の一つ、道徳部」の部長を勤めていました。そんな関係もあつて、私は部長を支え、研究の中心となる立場の副部長に就いていたのです。大阪府・市教委から道徳教育の全体計画」策定の委員への委嘱はおそらく学閥の推薦があつたからでしょう。策定委員として委嘱されたということは教委の信頼を得ていることを意味し、私は内心、自負していたように思います。管理職への道にもつながることに違ひなかつたんですから。瓊池会では将来を嘱望される存在として「期待の星」との声が私にも聞こえてきました。

一九六四年わたしは「道徳教育の研究」をテーマとして、京都大学での一年間の長期研修を命じられました。学校を離れて研修に専念できるのです。経歴に箔が付くのですから。京大で内地留学を終えて一九六五（昭和四〇）年二校目の市立城陽中学校に現場復帰しました。現場を離れての内地留学という、長期研修も学閥の後押しがあつて実現したものでしょう。

「道徳教育の全体計画」策定への参加、道徳教育研究の推進などの軌跡は結果的には教育内容の国家管理に協力した

ことになります。当時はそんな意識もなく、ノンポリ教師だったのです。教職員組合がなぜそこまで反対するのか、そんな疑問すら感じていました。むしろ、反対ばかり唱えて理屈をこねるが、子どものためには何ひとつしない組合活動家の言うことなんか聞きたくもない——そういう不信に満ちた気持ちで日教組や大阪市教組の反対闘争に冷やかな態度をとっていました。

・組合活動に冷ややかだった私

「労働組合・労働運動」の権利や大切さは理解していたが、新任教師として赴任した大阪市立難波中学校は私が胸おどらし、意気軒昂に思い描いていた学校とは遥かにかけ離れた職場でした。

「文部省(現文科省)」と「日教組」の対立が「勤務評定」制度導入をめぐるピークに達していた一九五六年にわたしは教師になったのです。

強い衝撃を受けたのは職員会議や教職員組合の難波中分会(教職員組合の職場単位の組織)の雰囲気でした。職員会

議はいつも学校長と分会役員との対立の構図がありました。職員間にも学校が一体になって教育活動に取り組んでいるとの雰囲気はなく、むしろとげとげしい空気すら感じられました。例えば、こんなふうです。

教科指導について研修を深めることが大切だ、と職員会議では共通理解ができたのに教務係から具体的に研修計画——研究授業の実施計画とか、他校の研究授業への参加とか、教科カリキュラムの共同研究とかです。提案されるとそのあと、分会の責任者や、いわゆる活動家と呼ばれていた人たちが、〈学校長に確認しておきたい〉として切り出す意見は決まって次のようなことでした。

「教育はもともと、創造的なものであり、自由が保障されることが大切だ。だから、授業の研究は教員それぞれの主体的な考え方にそってすすめることが大事である。授業研究も教員一人ひとりの自主性が尊重されなければならない。定期的に研究授業の予定を組み込んだり、だれが担当するかなどを職員会議で決めるのはおかしい。本人の自主的な申し出がある場合に実施すればよい。この計画には反対す

る」

「教科のカリキュラムについては教員一人ひとりの授業計画に基づいて自主的に立案するものであって、だれもその権利を侵すことはできない。教科内容の進度の調整はこれまでもやっているのだし、それ以外に教科担当者会議でやることはない」

「研究会、研究授業については、自主・公開・自由の原則にもとづいて行われなければならない」

決まってこのような趣旨の反対意見がだされるのです。それに賛成する意見が大勢を占める。意見はといえば、その多くが分会役員で占められているのです。他の教職員は管理職と分会役員のやり取りを傍観しているだけで会議は白けていました。このような形で教育活動の重要な提案はことごとくつぶされるのです。当時の私は、「何でも反対」の姿勢を貫き職員会議をリードする分会役員たちの態度に嫌気がさしていたのです。

「教員個々の主体的なとりくみと自主性が尊重されなければならない」

理屈はそのとおりです。けれども、授業をどうすすめるか、どんな内容（教材）をどんな方法で授業に組み立てていくのか。学級集団からはみ出ている生徒をどのように集団にひきもどしていくのか。学習についていけない子どもに対してどんな手だてを考えていけばよいのか。新任のわたしには尽きることのない悩みでした。校務運営の効率化、授業や生徒指導の課題に議論を交わすのではなく、「自主・公開・自由」をかざして反対し、新任の私に手を差し伸べたり、ともに考えるような雰囲気は全くありませんでした。まわりの先輩たちにたずねたり、研究会に出かけたり、実践記録を読みあさったり、ただがむしやらに生徒にぶつかる毎日でした。手探りの全く恣意の教育を余議なくされていたんです。「だれでも一度はくぐる体験だよ。そのうちに答えは出てくる。あせりなさんな」これが先輩教員の答えで、だれひとり私の疑問や悩みを受けとめてくれる先輩と出会いがなく不幸な新任時代を送りました。

当時、わたしにはこのような分会役員の考え方や、ことごとく提案に反対する言動に強い違和感を感じ、しだいに

組合活動には距離をおくようになりました。それからおよそ一〇年間、「道徳教育の研究」「社会科の授業研究」に精魂を傾けるようになりました。明治圖書の月刊雑誌「道徳の時間」に、論稿を掲載していたのはこのころでした。

戦時から敗戦後にかけて生活苦にあえいだ体験と、学校教育のなかで得た断片的な知識が重なりあつて、漠然と「労働運動は大事なものの」程度の意識はもっていました。集会への参加、分会の会議にも欠かさず出席する組合員でした。けれど、一方で、それらの活動になじめない自分があつたことも事実なんです。

当時、同じ職場にいたいわゆる組合活動家と、それを支持する教員の、職場における日常活動との間に、「教師としてのありよう」「教育についての認識」「生徒へのかかわり方」の違いが生じ、しだいにかけ離れていくのでした。職員会議のなかでも、〈ズレ〉、〈相容れない考え〉はますます広がっていったように思います。こんな先輩教師たちに不満をもちながら、ただ思いつくままに、熱意だけで生徒にぶつかる日々でした。他の教師には悩みはないのか、そんな

思いがありました。

城陽中学の組合分会は大阪市教組八支部の一つ、城北支部（現北部支部）に属していました。支部の集まりなどで、他の学校の分会教員から直接名指しで糾弾されたこともありました。道徳教育の全体計画の作成や、教育研究会の「道徳部専門委員会」での研究活動に協力しているわたしは、教職員組合の立場からは許せなかったのでしょうか——「当面の敵」などと名指しで非難されたこともありました。教師としての私の歩みだしは「組合嫌い」という歪な意識を内心に蓄えることになりました。

出会った民族的マイノリティの子どもの人権保障の教育運動に傾斜していくにつれ、教組の存在の意味を自覚的に受けとめ、連携を強めることで組合活動に対する歪な考えもなくなつたように思います。現在も、当時のわたしと現在のがどう結びつくか、説明するのに困惑するのです。強いて「理屈」をつけるなら、授業や生徒指導など教育技術の習得には努めるが政治・社会等の動向に無関心な、思想をもたない、いわゆるノンポリ教師だった——そう「説

明」する以外に説明のしようがない。「教師としての生き方」の触れたくない部分なのです。

やがて、社会科の授業や道徳教育の分野では注目を浴び、「出張授業」だとか「指導授業」などといった、授業研究の講師として現場から迎えられるようになっていきました。大阪府・市の道徳教育全体計画、指導資料集の作成のほとんどに加わったと思います。私は大阪市の現場教員が組織する専門委員会「道徳部」の副部長としてその中心的な役割を担っていたんです。今考えれば、教育内容についての確かな理念もなく、単に教育技術に眼をうばわれていた教師に過ぎなかったんですね。今だからこそ、わたし自身を、突き放して見る事が出来るようになったからこのように言えるのですが、当時はむしろ、そのことを誇りにしていたように思います。大阪の道徳教育は俺が担っているんだ、といった傲慢さも頭をもたげていたように思います。

3 島人の父・母のことそして私

鹿児島県大島郡徳之島手々。南島、奄美の離島徳之島が

父・母のふるさとです。奄美・徳之島につながる島人の父・母は新天地を求めて大阪に生活の基盤を築いたのです。私は大阪育ちのシマンチュ二世ということになります。ですが、島人の父・母、「島の生活・文化」に生きたシマンチュに色濃く影響を受けた、シマンチュ二世です。生い立ちのなかで私の内面に醸成されたシマンチュ意識もまた、教師としての生き方に少なからず影響があったように思います。

「ウイとワキヤや
シマンチュド！」
(あんたとわたし
は同じ島人どうし
だ！) わたしたち奄
美・徳之島出身者は

折にふれて、親しみをこめて、お互いをこう呼び合います。

島人なら通じあう堅い絆を確かめ合うのです。島で生まれ育った父や母のような島人と同じ意識をもっているわけではないけれども、やはりわたしの内面には島人の意識がは



つきりと息づいていると感じます。

何をもってシマンチュ意識というのか、自分でも簡単に説明できません。「ウイとワキヤやシマンチュド！」（あなたと私はシマンチュどうしだ！——この短いフレーズにこめられた一体感がこの意識の象徴だと思っています。

私自身を語るとき、島の歴史や、そこに生きてきた人々の生活に触れないわけにはいきません。私に刻まれた島の景観は中央部を貫いて山地が走り、海岸線にわずかに開ける平地。とりわけ、「手々」地区は狭い平地が海岸線に沿って広がり、わずかに開けた土地を隅々まで耕作していました。父母が育った手々（テテ）集落は海岸線にほんのわずかに開けた平地が農耕のできる土地で、猫の額ほどの土地も大事に耕作していたようにおもいます。農耕に適した平地が少ないんです。その上、冬場、東シナ海から吹き付ける北風が塩分を運び、作物にとって決してよい環境ではなかったのです。年に何度かの台風に見舞われることはごく普通で、台風銀座でもあるんです。周りはエメラルドグリーン

の海。だが、手々の海岸は海から深く切れ込んだサンゴ礁の海岸線で小さな入り江があるだけで港がありません。海に恵まれても漁業はできない。狭い田畑にしがみつくと外に生活のすべがないような環境なのです。真夏の三十数度の酷暑のなかでの農作業はたいへんで、異様に日焼けした肌が労働のきびしさを物語っています。穏やかな気候に恵まれたときはまだしも、米の収穫期に台風がぶつかったときは生活は悲惨でした。一年中、米のない生活がつづいたと聞かされました。痩せたサツマイモとソテツの実からとったでんぶんが人々の常食だったそうです。ひどい干ばつや、台風の被害が大きくて、蘇鉄の実さえ足りなくて、茎を川の水でさらして澱粉を採ることさえあったとも聞きました。いきおい、島で生活できるのは家の跡とりだけということになります。多くが新天地を内地に求めることになったのでしょう。親類・縁者・知人のシマンチュの先達が切り拓いた地を頼って内地に生活の基盤を求めるわけです。

わたしの父、母の場合はそこが港に近い港区南八幡屋でした。母方の伯父にあたる一家がすでに生活の基盤を築い

ていたのです。そこを頼ったんでしよう。聞くとところによると伯父は大阪市の交通局の市電の運転手・車掌を養成する講習所のようなところに入って生活基盤を固めたようです。当時は内地の南島に対する排外意識は露骨で「沖繩人、奄美人お断り」の求人案内の広告や、張り紙が普通に見られた時代でしたから、内地に生活の根を下ろすことは大変な苦勞があったようです。教員や、公務員になったり、あとは自営業に就くことを選んだようです。伯父の家がやたら人の出入りが多いと子ども心に思っていました。ヤマト(内地)に新天地を求めてやってくるシマンチュの一時寄留地だったのです。いつだったか、仲の良かった従兄の昭一が「母はシマンチュが奏でる三線、太鼓などの音曲が近所に聞こえるのを気にしていた…」と語ったことがあります。ヤマトンチュ(内地人)の視線をいつも気にしていたことがうかがわれます。

沖繩の人たちの集住地は大阪市の大正区の小林町だとよく知られていますが、わたしたち手々のシマンチュは城東区の今福、府内では泉南の機業地域の泉大津、忠岡に多く

集住している。島の先達が切り拓いた地に頼って集まった人々が生活基盤を固めていったものと考えられます。相互扶助のなかで生まれた固い絆で結ばれる。従兄の住む今福などはプラスチックの成型加工の家内工業から生活の基盤をつくった人たちが多いのです。島でのユイワク(農作業や、家の普請のときの人手の貸し借り)、頼母子講(註1)など、生活の知恵を活かして、内地でも支えあっていたのです。敗戦後の生活の困苦はみな同じですが、内地が占領から解放されてからも沖繩、奄美は返還されず、シマンチュは想像に絶する惨めさを味わいました。食糧を求めて「密航」を余儀なくされた人もいます。当時の地元紙「南海日日新聞」や、「南日本新聞大島版」には「黒糖の闇商人検査さる」「密航船(?)沈没」「闇船八隻 大島署摘発」「三栄丸は無罪釈放 闇船七隻に軍政裁判判決」などの記事が踊っています。「密航者」が後を絶たなかった状況が映し出されているように思います。奄美女性史サークル編・発行『さねん花』三・四号に次のような記録が当時の様子を伝えています。

「閉ざされた島の情念は、あふれる水がこぼれるように外に向かった。北緯三十度線(軍政と日本領土との境界：筆者註)という見えない国境線に向かって人々は船をこぎだす。たとえそれが法を犯した『密航』であつたとしても何びとも止めることはできない」と。「海賊船のような闇船に乗って身ぐるみはがれるような被害にあつたシマンチュもおつたんですよ」と語った人もいました。なぜ、身の危険を冒してまでも密航者が絶えなかつたのか。多くのシマンチュが阪神間に在住しているが、多くが神戸製鋼所、川崎造船所、ダンロップといった大手企業の労働に従事して産業発展を支えたのです。産業を支えたと言えば聞こえはいいのですが、過重な労働を強いられる仕事に就くことを余儀なくされたというのが実情だつたのです。

今でこそ何年に一回かは帰省もできるが、戦前は二十年前、三十年ぶりの帰省ということもあつたのです。このような島での生活、内地での相互扶助で支えあつた生活体験、南島人として受けた排除の悔しさの思いがシマンチュ意識の醸成をもたらしたと思われまふ。シマンチュの故郷

思いは並みではありません。島ごとの、また部落ごとの集まりがあります。手々の人びとは「手々郷友会」という集まりをつくっています。時折集まつて絆を深めるのです。年に一度の運動会、浜寺公園の青空の下で一日を楽しむのは郷友会の恒例の行事になっています。競技あり、三線に合わせたの島唄あり、六調子の踊りがあつて島に思いを馳せるのです。この感覚が共有されるのがシマンチュの意識でしょう。シマンチュ二世のわたしには同じ感覚はないけれど、それでもその一体感はあるのです。父は「忙しいだろうが『手々郷友会』には顔を出しておいてや、手々あつてのお前なんだから」——いつもこう言っていました。

奄美は薩摩と琉球の狭間はざまで翻弄された歴史をもっています。学生時代、『大奄美史』を読んで、米や黒糖を搾取する薩摩藩の圧政と、それにあえぐ島の人々の苦渋に触れ齒軋りしたことを思い出します。その歴史と人々の生活のなかで育まれた奄美特有の文化に惹かれ、民俗学が好きだつたこともあつて卒業論文は徳之島の「葬制」を手がけました。当時、『大奄美史』を読んで、シマンチュ意識は、この歴史

と、苦渋に満ちた生活の中で醸し出された、南島の人びと特有の意識だろうと私は思っています。お互いがシマンチュとしての一体感を求めあい、扶助し合う特有の意識を宿しているのです。

古くは古老が語る、ナハンユ（沖縄世）の時代（十四〜十五世紀ごろ）、琉球王朝の支配下におかれていました。その後は薩摩藩の支配のもと、その圧政に苦しめられ、経済的に搾取され続けた島民の暮らしがあつたのです。米も砂糖もそのほとんどが吸い上げられるきびしいものであつたようです。帰省の折、おばが口ずさんでいた田植え唄などの島唄や、伝承にも色濃く残っています。奄美特有の家人やんぢやのシステムが根付いたのもこのような歴史の背景がありました。家人ヤンヂユというのは奄美が薩摩藩に支配されていた当時、借財を肩代わりした豪農等に抱えられた奉公人のことです。奉公人というよりは奴隸的な存在だったようです。端的に言えば身売りでなんです。幕末期には島人の二〇〜三〇%を占めていたとの指摘もあるんです。

「琉球処分」といわれる施策がすすめられました。琉球王

国を廃止して琉球藩とし、その後、廃藩置県で鹿児島県に編入し、さらに沖縄県としたんです。奄美諸島は、沖縄県ではなく、鹿児島県に属した近代以降に「奄美処分」と言われるヤマト（本土・内地）とは異なる収奪と切り捨ての差別政策がすすめられました。琉球王国以降の一連の琉球・奄美に対する日本内地の差別・排外の政策や、日本内地に新天地を求めてやってきたウチナンチュ・シマンチュへの偏見や、差別的仕打ちを見なければ沖縄・奄美等のシマンチュの心は理解できないと思っています。

戦後もまた、一九四六年二月二日GHQによって沖縄、奄美諸島を含む南西諸島が日本の領土から除外され連合軍の軍政が敷かれ、講和条約締結後も日本に返還されず、奄美は一九五三年、沖縄は一九七二年まで、軍政が続いたんです。このような理不尽な抑圧・差別の歴史と生活史の中で島人意識は醸成されたものでしょう。一九五三年、日本政府に返還され、本土復帰の長年のねがいようやく実現しました。その後、「奄美振興法」の制定もあって、道路整備や田畑の区画整理、キビ畑の耕地整備がすすみ、島の景

観は様変わりしました。全島の集落をつなぎ海岸線に沿って走る道路は目を見張るばかりになりました。わたしになじみ、焼きついた島の景観とはまるで違う、一見、島のくらしは豊かになったようだが私にはそうは思えないのです。田畑の農作物の実りが豊かではない。今もって生きるのにきびしい環境なのです。そんな集落のなかにあって、父も母も少しは土地持ちの経済的には恵まれた方の家庭に育ちました。台風に見舞われることもしばしばではあったが米の作柄が悪くとも、なんとかしのげる家庭だったようです。父は奄美本島にある、当時の県立大島中学（現大島高校）を卒業しました。当時、手々から大島中学に入学するのは学力的にも経済的にもたいへんなことだったようです。大事にしまっていた通知表を見たことがありますが、成績のいい父に感心したことを覚えています。父母は「子育て」に期待を込め、「故郷に錦を飾る」夢を追い、大阪に出たのでしょうか。しかし、内地はそんな父の夢をすんなりとは受け入れなかったようです。父も母も、大阪での生活の苦労を語ったことはありません。わたしの肌で感じたこと、頭

をかすめる刷り込まれた言葉でその苦労をしのぶだけなのです。

そのころの日本社会は今では考えられないほど、外国人や離島、僻地に対する「偏見」が強く「排除」のシステムが根づき、またそれを支えている人々の意識が露骨に強かったのです。「沖縄人・奄美人お断り」というような就職の「排除」がまかりとおっていた時代です。父は、後に内勤の社員に登用されたのですが、はじめは勤務の条件のきびしい外国航路の船員から身をたてたんです。島人^{シマヂュ}が口にする教訓に「手々正直、親が教えた塩の味」というのがあります。手々の村の人々は正直者、こつこつ働いてこそ幸せがつかめる、という意味です。耳にたこができるほど聞かされた言葉です。帰省した時、手々集落の学校周辺や道路沿いに、この教訓の立て看板が目につくんです。手々の人々はこの教訓を子どもたちに引き継ぐことを自負していました。父は、この教訓に輪をかけたように、こつこつと働く人でした。しかし、必ずしも「幸せ」をつかめたとは言えない戦後の生活がありました。戦地からの復員後、父は会

社を辞めました。どうして会社をやめたのか、語ったことはありません。その後、慣れない商売に手を出したのが裏目に出て、転げるようにその「夢」はくずれていったようです。売掛金の踏み倒し、箆脱け詐欺、商品をこっそり盗まれてしまうなど、やること、なすことが思惑外れ、一時は立ち直れないのではと思うほど失意のどん底を味わった人でした。母は結婚する前は島の教員をしていました。教員といっても代用教員だったようです。

「郷友会には顔を出してや」との父の言葉もあつて私はこの集まりにときど顔を出しました。

「進君、立派になったなあ、マサあか（マサ姉さん―島ことば）の長男だつてな。あんたのお母さんに教えてもらたんやで。ずいぶん世話になった。厳しい先生だったよ、お母さんは。節子なんかいつも怒られとつたよ」と話す縁者。どの子にも厳しい先生として評判だったようです。節子というのは姪で、身内にはとりわけ厳しい先生だったようです。和裁が得意だったようで、物差しでよくたたかれたと話していました。わたしたち兄弟にもしつけは厳しかった

のです。生家は特定郵便局で、代々局長を務めた村の名士でした。母の祖父は東天城村の村長を勤めたというのでした。貧しい村であつたにしろ、父母はまだ恵まれていたんですね。それでも大阪に新天地を求めたのです。シマンチュの多くが親戚、縁者、知人を頼って内地にやってくるのです。厳しい母ではあつたが、面倒見のいい人だったようです。島から次々とやってくる人々のために骨身を惜しまず面倒を見ていたように思います。

当時、従兄弟が就職活動で、市立の学校の事務職員に応募したことがあつた。母は甥の一大事と考えたのか、その学校へ出向いて校長とわたりあつて採用をたのんだという話を当の従兄弟が語つたことがありました。頼りがいのある人だったようです。

こんな思い出も蘇ります。父が出征していた戦時中、母が姉とわたしを連れ、父の会社の友人の家を訪ねたことがあります。衣類を疎開させるためです。衣類を背負つて、天王寺駅当時、国鉄城東線、（現ＪＲ環状線）のホームへと階段を上るその姿。三〇数段あるが、心臓性喘息の持病の

ある母は、数段上がった足は止めて一息いれ、またのぼってはまた休んで、ホームにたどり着くのでした。やっとの思いで先方の家を探し当てました。

「遠いところを大変でしたね」と、「銀しやり」（白米ご飯）と「天ぷら」をごちそうしてくれました。こんなおいしいものがあつたのかと、おながははちきれるほど食べました。そのおいしかったことといたら、生涯忘れるものはありません。私自身が階段を避け、無意識にエスカレーターに足が向く歳になって、当時の母を思い出します。「母は強し」というが、どんなにか辛かったろうと。発作が起きると、今にも死ぬのではと思うような息苦しさが襲う心臓性喘息の持病が戦後に悪化して長患いの身になりました。私は少しでも家計を助けようというろんなアルバイトに励んだ時期でした。母が上本町六丁目にあった日赤病院に長期入院したとき、夜はずっと父が付き添って看病していました。母は五六歳で亡くなりました。

母を看とって、父は島に帰ったんです。戦争を挟んで人生が変わった父。余生を島で生きた父は、野菜の苗づくり

を始めました。大阪の長井種苗店から種をとりよせて育て、みんなにそれを分け与えていました。そのころ、だれも手がけていなかったスイカ栽培などを試みたりしていました。床下に入れておけば保存が効くトウガン（冬瓜）をいっぱい収穫し、床下はトウガンだらけということもありました。野菜のない夏場は、父の作った冬瓜はみんなに喜ばれていたようです。農業の経験がないのいろいろな工夫をして、それが広がることを楽しみにしていました。不言実行、そういう人でした。几帳面で自立心の強い、頑固なまでに自分を貫いた人だったように思います。傍目には、島ではどんなにか生き生きとしていたことか。ゲートボールを島に広げたのも、町の教育委員会が推し進めた「歩け、歩け運動（ウォーキング）」に率先して参加し、歩いた距離は九州一周、さらに日本一周を認定されました。

そんな父の姿を紹介したいと、友人であり、教育運動の同行者でもあった田中國江さんの奔走で、テレビ朝日の三〇分の特別番組が放映されたことがあります。自立して生きる暮らしが紹介され、当時、島中の話題となった

ようです。決まった時間に必ず顔を見せるジョギングじいさんとして知られていたのです。触発され、ジョギングを始めた人も多かったように聞いています。どこからくるのか、あの自立心、意志の強さ、とうていわたしには超えられません。父は島での生活のこと、生活の基盤を大阪に定めたこと、暮らし向きなどを子どもにほとんど語って来ませんでした。島に父が暮らすようになってからは年に二、三度は帰省していたのですから聴きとっておけば……よかったですと悔いています。父の子育てについての印象はあまり残っていません。子どもたちにはしつけない厳しかった母の思い出が私には刻まれています。

父の内心の本当の気持ちに触れることができたのは、父が亡くなった後でした。それは、父の身の回りの遺品を整理していて気づかされたんです。父が居間に置いていた小さな本箱がありました。本箱と言っても雑多なものが入っていました。驚いたのは二〇冊にも満たない本の多くがわたしの書いた一文が入ったものでした。雑誌「道徳の時間」「今、教師に何ができるか?」「続・今教師に何ができるか?」

(扇谷尚・長尾彰夫編)、など。さらに驚いたことは、例年、大阪市教委が十一月三日に行う教職員表彰を報じた新聞記事と、年度末の三月に報じられる管理職任用や異動を報じる新聞記事ができたことです。

「優良教員」として大阪市教委が表彰する恒例の行事があります。永年勤続の教職員や、小・中・高校から一名選ばれて、「優良教員」として表彰されるのです。確か、一九七三年だったか、わたしが受賞したことがありました。私の記憶からは遠くなっていますが、父はそれを報じた新聞記事を後生大事に保管していたことを知りました。ときどき帰省していたのに全く気づきませんでした。どうして手に入れたのだろうか、届けた覚えはないのです。この時思い出したんですが、一九七一年九月二十四日、大阪「考える会」(註2)旗揚げの集会の日、市立東中学校の講堂に父の姿があったことを思い出しました。夕食の時、父が「大事な問題だが、難しいね……」と言ぼつんと言いました。そのあと、しばらくして父は「島」へもどって暮らすことになったのです。かれこれ三〇年、立ち上げた教育運

動のことには父は何も触れたことはありませんでした。きっと、言葉にしては言わなかったけれども、教員として管理職の途を期待し、わたしの歩みを気にかけていたのだでしょう。

父は、私たち兄弟に、島での一人暮らしを元気な心意気で見せてくれましたが、やはり、追いつけた夢が意のままにならず挫折感を抱きながら島で余生を送ったように思えてなりません。

4 私に刻まれた「島」

・消えたアイスキャンデー

両親に連れられて大阪に出たときのこと。いつ頃のことだったか記憶ははっきりしません。台風の接近で海が荒れて、船底にうつ伏せになって、何度も何度も反吐を吐き、死ぬような思いをして天保山の港に着きました。当時は徳之島から大阪まで順調にいても二十八時間の船旅でした。台風シーズンになると、風を避けて島陰で待機する。船で三泊を過ごすこともそう珍しいことではなかったのです。

大阪天保山の板敷きの隙間だらけの桟橋に降り立つと、ゆらゆら揺れるようでした。わたしは麦ワラ帽子にメリスヤの半袖、半ズボンにズック靴の格好で、恐る恐る桟橋を踏み締めていました。港区八幡屋に住む伯母が迎えに出てくれていました。

「進、ようきたな。暑かったやろ」と、わたしのいがくり頭をなでながら、なにやら四角い、かたいものを伯母がくれました。

天保山から千船橋を通って八幡屋までチンチン電車（市電）に乗りました。

市電のなかでなにやら冷たい肌触りが気になってしかたなかった。半ズボンに水気がにじみ出ていたのだろう。

「スーちゃん、どうした。おしっこしたの？」

おばが半ズボンのシミを指さしている。慌てて手をポケットに入れると冷たい水がべつとり。家についてみんなが笑い転げました。はじめてアイスキャンデーをもらった体験です。子ども心にバツの悪い思いをしたことが思い出されず。

・一時の寄留地く先達シマンチュの支え

島で生活できるのはその家の跡継ぎとその家族です。いきおい、その他の子どもは生活の糧を内地に求めたのです。鹿児島、西日本では大阪が多かったようです。島の先達が切り拓いた大阪の地に親戚、縁者を頼って島を離れるんです。大正区の小林町には沖縄出身の人たちが築いた町があります。わたしたち奄美徳之島の出身者は大阪市城東区の今福、府内の泉大津、忠岡あたりに生活の基盤を築いていたのです。「島」から出てきてすぐ、たとえ意欲があっても仕事が見つかるわけはなく、決まるまでのしばらくの間、親戚縁者の家にやっかいになりながら生活するのが普通でした。

わたしたちの家族は伯母の家のある市電の八幡屋停留所の線路を挟んで反対側に住んだのです。従兄の昭一とは同じ年、「昭ちゃん、スーちゃん」と互いに呼びあい、大きくなりました。

どれだけの人たちがこの伯父伯母夫婦の世話になって大阪の地に生活の根を下ろしたのでしょうか。伯父は大坂市の

交通局に入って、車掌を勤め、やがて運転手として勤務し、生活の基盤をつくりました。当時、築港に近い八幡屋は港に近いこともあって、ここに多くの縁者が世話になり、それぞれの生活を築いていったようです。それでも私たちの家族は豊かではないが、父が「商船三井」という大会社に勤めることができて恵まれていました。

・変わりゆく島の姿

生前、「島を離れるのはいやだ」と、大阪に住むわたしたちを困らせていた父が他界してもう二十余年。大阪で三人の子どもを育て、母の最期を看とつて、父は島に帰りました。島にもどった父は、それでも、かれこれ三十余年をふるさと手々で暮らしました。戦後、主権回復のあと、「奄美振興法」の制定もあって、区画整理や、キビ畑の耕地整備がすすみ、島の景観は様変わりしました。なじんだ風景なのですが、帰るたびにわたしの脳裏に刻まれた「島」から遠くなる感じがします。田んぼが消え、いたるところで目にした地豆（落花生）畑がなくなっているんです。群生し

ていた蘇鉄の景観が特徴だったのに、その景観がほとんど見当たらないのです。きちんと造成整備された大きなキビ畑が目を見張らせます。ですが、最近、整地されたキビ畑にキビは植わっていないのです。その風景に違和感を感じるのはです。奄美振興法による折角の耕地整理事業や耕作地の開発の事業も高齢化のすすんだ島では、身体を酷使する農作業を担う人たちがいなくなってしまうのです。ときおり、内地でも限界集落のことが報道されますが過疎の典型が、わたしの「島」にもあります。

・島のくらし

ミナミシマ

島人にとって生活基盤を一から築かなければならない内地の暮らしは決して楽ではありません。しかし、わたしの脳裏に蘇る島の生活は内地の暮らしより、はるかにきびしいものでした。わたしは夏休みを利用して島にたびたび帰省していたのですが、そのわずかな期間でさえも、島の生活の厳しさが肌を通しての身に沁みたまものです。

島の夏は、都会で暮らすわたしにとって快いものではあ

りません。観光案内のパンフレットやポスターなどに描かれた、南の島をとりまくエメラルドグリーンの海、蘇鉄の群落の鮮やかなグリーンと真つ赤なハイビスカスの美しいコントラスト。楽園のイメージありますがしかし、島の生活の実際は、そんなイメージとはかけ離れた世界でした。父が島に生活するようになるまで、私の帰省先は実家の跡とりの伯父夫婦のところでした。わたしの中に刻まれている島の《姿》は、ギラギラ、肌を射る太陽、庭先につくられた豚小屋、食べ物に群がるハエ、オバが納屋に保存する塩詰の樽からとりだしてくる塩豚、それにランプのホヤでなんです。

島の夏はことのほか暑い。夏場の帰省は夏休みの期間でした。落花生は真夏が収穫期です。風があると、しのぎやすいとは言え、真夏の三十数度という酷暑のなかでの農作業は言語に絶するものです。直射日光は人びとの肌を容赦なく、異様に黒く焼きつけるほどなのです。落花生の収穫の手伝いはいやだと断りたいほどのきびしいものです。都会育ちの私にはせいぜい三〇分が辛抱の限界でした。陽の

昇る前に出かけようすると、「朝露の残る畑はハブが出やすい」と、伯母がわたしの背中に声をかけて注意を促してくれるのですが、その言葉をさえぎって、畑に出たものでした。落花生を干す大きな箆ざる。この箆は重宝な道具で、アクもちなども乾燥させるのにも重宝していました。群がるハエを、ウチワで追い払っても、追い払ってもすぐ群がるハエ。庭先に豚小屋があるからでしょう。並ではない。群がるハエ、ハエにうんざりしたものです。

夏場の野菜枯れにも閉口しました。みそ汁の具にもこと欠くほどでした。オバは納屋の塩詰めしほづめの樽から塩豚をとり出し、きざんで具にしてみました。菜はさつまいもの葉っぱです。外米のようなパラパラの米に芋を刻み込んだ主食、それに豚みそがつけば御馳走でした。

問わず語りに語る伯母の話は自分の子どものころの島の生活です。伯母の子どものころは、二期作ではなかったようです。収穫時期が台風の襲来時期とたびたびぶつかるのです。島は「台風銀座」だったのです。海辺へ出て、空を見上げて額をよせあい、村人は稲刈りの日どりを相談して

いたのです。稲刈りやキビ刈りはユイワク（人手の貸し借り）でやるしきたりなので、島の人びとにとって重大な関心事なのです。その年の米の出来不出来は、島の人たちにとってまさに死活問題でした。だから、一日も長く実りを豊かにしたいとの願いがあるのです。額を寄せ合って真剣なまなざしでした。そんな情景が蘇ります。台風の直撃を受けた年は、さつまい芋と蘇鉄のでんぶあぐが島人の常食だったようです。比較的裕福だった父の実家でさえ、芋を刻み込んだ米の主食だったら御馳走で、蘇鉄の実からとった澱粉を混ぜたお粥が珍しくなかったといひます。蘇鉄の実が不足したときには、茎を川でさらして灰汁あぐをぬき、それからでんぶあぐをとって命をつないだそうです。

伯母は自分が聞かされてきたきびしかった昔のことを、こう切り出しました。

「アンかどのトノチなんあたんよ。そこは薩摩の役人のなぐさみどころがあたんよ（あの角にはお屋敷があつて、そこには薩摩藩の役人の接待所があつた）」

くん いにや たがためにうえゆんや

さつまのとのさまぬため うえゆんよ

(この稲はだれのために植えるのか)

薩摩のとのさまのためにうえるのだ)

オバが口ずさんだ田植え歌の一節には、搾取されつづけた人びとの哀しい心が、今に流れています。薩摩藩の役人が米やキビの植え付けや収穫に目を光らせ、年貢の取立てが厳しく、米やキビは島の人びとの口にはほとんどが入らなかったと言います。

伯母の語りは記憶が薄れたところもあったが、苦渋に満ちた島の歴史が何となくもの悲しく身にしみ込んできたことを思い出します。明治政府になってからも鹿児島県議会は大島経済分別政策をすすめ、本土との経済格差は広がるばかりでした。鹿児島商人による黒糖の収奪も続き、「島」への圧政は薩摩藩にとどまらず鹿児島県に属しても続いたのです。

・奄美島唄「かんつめ節」の哀調

後世が道に 御袖振りゆり

(あの世への道に袖を振って行くよ)

かんつめの悲劇を三線さんしんにのせて歌う島唄があります。

切々と胸に迫る「かんつめ節」です。かんつめの悲劇には語り継がれた伝承があるんです。

奄美が薩摩藩の圧政に苦しんでいた江戸時代後期のことです。奄美大島南部の宇検村うけんそんながら名柄の家に「かんつめ」という名のヤンチュやんちゅ(家人——奄美独特の奴隸的な使用人)がいた。唄がうまく、美貌であったと伝えていきます。

ある時、名柄から山一つ隔てた久慈くじ(現在の瀬戸内町)の役所の筆子ひつこ(書記)、岩加那いわかなと出会い、恋仲になるのです。以来、毎晩のように久慈と名柄の間の山中で逢瀬を重ねました。

かんつめに思いを寄せていた豪農の主人は嫉妬し、妻と一緒にになってかんつめをひどく虐待しました。世をはかなんだかんつめはいつものあいびきの場所あひびきのばで首をつって果てたのです。岩加那がその場所に行くと、かんつめが現れ二

人は唄を歌って過ごします。夜明けとともにかんつめの姿が消え、変わり果てたかんつめの姿があった。

かんつめの出身地とされる宇検村の須古集落にはかんつめの「墓跡」と言い伝えられてきた場所があり、親類縁者筋が今も名柄に住んでいるそうです。悲劇の伝承の背景には薩摩藩が奄美にサトウキビの栽培を強いて収奪を強めたことがあるのです。幕末には奄美大島の人口の二、三割がヤンチュだったといわれています。

この伝承には岩加那いわかなとかんつめとの出会いについて、役所の書記であつた岩加那が公用で名柄を訪れたとき、かんつめの主人が接待の酒宴の席を設け、そこで二人は唄を掛け合つて恋に落ちたと伝えています。嫉妬した主人の虐待は半端なものでなく、妻が用意したやけ火箸をかんつめの局所に突き刺したとの伝承があり、言葉に表したくないほどの虐待だったと言ひ伝えられています。

夏休みに帰省した折に、耳をかたむけた島唄・伝承、三線にのせた島唄の哀調に「なぜこんなにも哀しいのか」といつも不思議に思っていました。琉球の支配下にあつた

奄美、薩摩の圧政に苦しんだ歴史は奄美特有の文化・伝承を生み出したんですね。島唄・伝承にその名残りをみるのです。わたしの内面に宿るシマンチュ意識も少なからず父や母の家庭教育、内地に新天地を求めたシマンチュとの交流によって刷り込まれたものだと考えています。

「進、がんばつてえろう（えらく）なれよ。えろうなつたらヤマトンチュにバカにされん」「手々正直、親が教えた塩の味」「島口は使うな、共通語を使うように」——耳にたこができるぐらい聞かされたこんな言葉に子どもにかける親の期待・シマンチュの思いが凝集されていたのでしよう。それを自覚的に捉えられたのはずっとずっと後のことでした。

・「迎え」の宴、旅立ちの「杯」

大阪育ちといっても、わたしは島には折につけて帰省していました。島には「迎え」という慣わしがあります。内地から帰省した親族を迎えたその夜、一献をかたむけ絆を確かめ合うのです。

「進さん、おかえりなさい。きばったわやー（よくがん

ばったねー。やーや（お前は、おやこうこうむんだねー

（親孝行者だねー）

しまぐち

共通語混じりの島口（島の方言）で、おおかたこんな挨拶から宴がはじまるんです。宴といってもそれぞれが持ち寄った、一汁一菜のありあわせの酒と肴を持ち寄るだけです。当時、酒をたしなまなかったこともあって、わたしにはこの夜が苦痛でした。なぜ帰省するたびに「迎え」があるのか、そんな疑問も湧きました。それ上、島口で早口にくくしたてられると、わたしには皆目理解できないのです。それも苦痛の種でした。

父が再び島で暮らすようになってからは、わたしも再三帰省するようになりました。伯父や伯母、従兄弟らと顔を合わせ、ちよつと話し込むと、「やつぱりあんたとうちは親戚筋だ」と、そういう話になります。宴が盛り上がり、たけなわになると、三線と太鼓の出番だ。三線にのせて太鼓が響き島唄が出る、踊りが出てよりあがるんです。

父が島に住みついてから、島とわたしの「距離」がずいぶん近くなりました。島口にも慣れ、話すことは片言だが、

聞き取ることができるようになると、酒の口も付き合えるようになり、島の文化になじんでいく自分を感じました。

おかしなもので「苦痛の種」であった「迎え」のしきたりが、しだいに楽しみになっていくのです。大阪に住む島の親戚のようす、知人・縁者の消息、今年のキビ（サトウキビ）の生育状況、内地鹿児島から赴任した学校の先生の噂話などなど、よもやま話に花が咲き、夜中の一時、二時になることも珍しいことはありません。楽しいはずの「迎え」の酒宴で、座がしらけるほどわたしに絡んで毒舌をあびせられ、ひどく傷ついたことがありました。絡んでくる内容はわたしには何のことか理解できなかったけれども、どうやら、母の実家から代々借りていた小作地をめぐる恨みつらみが潜在していたようです。薩摩藩に支配されていたころは手々にもヤンチュの仕組みが根づいていたのだらうと想像しました。「迎え」の行事は島の人々の楽しみごとであったにちがいない。「迎え」の習わしは、新天地を求めて内地に旅立った人が再び島を訪れるのが二十年、三十年後というのが普通だった戦前、彼らを迎え入れた島

の人たちの習いを今に残したものと考えられます。

今でこそ、飛行機でひとつ飛びで帰れますが、戦前、島を離れた人々が帰省することは簡単なことではありませんでした。最近でこそ、そんな習わしはなくなりましたが、戦後もある時期まではずっと、内地への旅立ちには親戚が寄って車座になって、長老が杯にお水を注ぎ、一同で旅の無事を祈る儀式を行っていた。シマンチュは内地への移住を「旅立つ」という言葉でお互いの心を通わせるんです。旅の無事を祈りながら再会を誓いあうのです。

私が帰省し、大阪へ戻るとき、決まって母の実家から伯母がやってきて、親族を車座にして旅立ちの儀式をしてくれました。わずか十分ほどの儀式なのですが、再び会えないかも知れぬ別れを思わせる厳肅な雰囲気が漂うのでした。みんなで戸口まで見送ってくれるのですが、熱いものがきゅつとこみあげてくるのです。去来する島の残像として、ギユナグサン（魚慰み）とハマウリ（浜下り）の習いがあります。娯楽のない、離島の人々にとっての楽しみは、村人が集まって酒を酌み、語らうことなのです。集まると世間

話、内地に出た身内の消息、村の行事のんだりなど、にぎやかに盛り上がります。久しぶりに帰省した親戚を囲むときにはいつそう盛り上がるのです。締めは決まって蛇三線^{せん}、太鼓に合わせた六調子という賑やかな踊り。最高潮になったところで老若男女入り乱れての総踊りで幕となります。この踊りのウズに入ると、わたしも昂揚した一体感に包まれて島人^{しまんちや}を実感するのです。

ギユナグサン（魚慰み）は夏の楽しみです。入りくんだサンゴ礁の浜の地形を利用した追い込み漁です。満潮時に入江に魚が入ってきます。頃合いを見計らってサンゴ礁の湾の細くなつた潮の入り口に網を張るのです。七く八人の男が泳ぎ回って魚を網に追い込みます。カワハギや、クロダイ、ボラ、内地ではお目にかからない色鮮やかな熱帯系の魚も網にかかります。酔みそで食べる刺身や、魚汁、この日ばかりは魚をたらふく食べます。テントで日ざしを避け、浜風に吹かれながら宴会が始まります。ここでも蛇三線、太鼓そして島唄。そしてお決まりのテンポの速い六調子の踊りが時を忘れて繰り広げられます。このような宴会は村

の行事の後の楽しみなのです。みんなそれぞれ持ち寄った焼酎と酒の肴をつつきあう満月の月明かりのもとにおこなわれる、浜下りハマウの行事も風情があります。広々とした草原でくさばら村中総出で月見の宴が夜更けまで続きます。

教育運動をともにしていた「考える会」のなかまたち十余名がわたしの帰省にあわせて「島」にやってきたことがあります。「迎え」「全島一周」（島の景観や名所をガイドする）「魚釣り」「地豆（落花生）堀り」「ギユナグサン」と島の夏を体感したんです。「迎え」「ギユナグサン」などの異なる文化に目を丸くし、また、「地豆堀り」や「船釣り」では暑気あたり、肌の炎症で病院に運び込まれる者も出て酷暑を実感したように思います。

民俗学に興味を持ち、琉球の文化と大和の文化を併せ持つ南島文化にひかれ、卒業論文は鳥越憲三郎教授（大阪教育大学）の指導で「徳之島の葬制」を手がけました。将来はこの道を極めたいと考えたこともありました。島人シマジンの父母が大阪で生活基盤をなし、わたしがある。なぜだかわからないけれど、南島文化への憧憬はかなりのものだと思う

ています。

いま、島のゆく末に、言葉には出さないが不安が募るんです。島人シマジンのだれもが愛着を残しながらも消えて行く島の文化。過疎の現実、不安がよぎり、いらだちを感じ、嘆いてみてもどうにもならないもどかしさ。本土復帰後、「奄美振興法」によって、島には目を見張るほど立派な道路ができています。耕地整理、造成によって広大なギビ畑が「手々」にもできました。しかしシマンチュはほとんどが高齢者で、子どもたちの姿は稀にしかみられません。島の学校は、山村留学制度を採り入れて、何とか維持されているような状況です。ギビの植わっていないギビ畑に立つて、父母がわたしにかけた思いに、来し方を重ねている自分を見出すのです。

5 私の戦時体験

私たち世代は自分の生き方を振り返るときに欠くことができない体験は太平洋戦争の体験です。戦争の体験や、その影響を抜きにしてわが人生・家族の歴史を語ることはで

きません。戦中、戦後にぐぐった体験は私はもちろん多くの国民が脳裏に刻みつけたことです。学校で「天皇のため、国のために死ぬ少年」になるように育てられたのです。「チヤンコロ（註3）をやつつける」「鬼畜米英をうちのめせ」と棒を振りかざして叫んだものです。軍国主義教育で「皇国少年」に仕立てられたと思います。

・大阪大空襲と卒業式

一九四四（昭和十九）年に入ると、戦争はいよいよきびしく、警戒警報、空襲警報のサイレンがあらこちらで鳴り響くようになり、学童疎開が始まりました。小学校五年のとき、わたしはそれまで通っていた南八幡屋錦小学校から中河内郡矢田村（現東住吉区）の村立矢田小学校に転校しました。そのころは今と違って、矢田村は田畑が広がる郊外でした。一家をあげて疎開したのです。小学校の教育にも戦時体制は色濃く出ていました。

手旗信号の訓練が授業にくみこまれ、課外にはラッパ隊が組織され、わたしはその練習に喜々としていたんです。

わたしは、朝礼台のすぐ横で「国旗掲揚」のラッパを高らかに吹く。農作業の手伝いに隊列を組んで行進する。学校長の横で「作業はじめ！」「作業やめ！」の合図のラッパを誇らしげに吹いていました。手旗信号で連絡することに得意満面の軍国少年でした。

私たちは一家をあげて矢田村に疎開したので学童疎開の体験はありません。六軒長屋で、すぐ隣は矢田無線学校、その前はかなり広い畑でした。家庭菜園として耕作され、さつまいも、カボチャなど、手間がかからず、腹のたしになるものが栽培されていました。

家から二、三十メートル離れた道路わきに、長屋の人が総出で掘った防空壕がありました。夜中に何度もたたき起こされるけたましいサイレン。芋づるを混ぜ合わせた団子が常食で、いつも空きっ腹。一晩に何回か、けたたしいサイレンの音のたびに防空壕へ走るんです。「眠い……このまま寝とく……」と、母を困らせたこともありました。

一九四五年（昭和二十年）年、卒業式を翌日に控えた三月十四日の夜、大阪は未曾有の空襲に見舞われました。語り継

がれた大阪大空襲です。その夜、サイレンの音にたたき起こされ、いつものように防空壕へと走りました。北の方の空一面に焼夷弾の曳痕が、しだれ花火が舞い落ちるように見えました。カラカラという焼夷弾の落下する不気味な音が迫ってきます。暗やみの防空壕に身を潜めていると、一瞬、轟音とともに身体全身にズシンと衝撃が走りました。長い沈黙の後、「近くに落ちたな…」と、だれからとなく、ひそひそと声が交わされ互いの無事を確認しあいました。防空壕を出て見ると、私たちの壕からさほど離れていないところに、直径十メートルぐらいの穴が口を開けていた。「もう少し近かったら…」と想像すると、改めて恐怖が湧いてきました。

卒業式は三月十四日に行なわれることになっていました。わたしは卒業生総代として答辞を読むことになっていたのですが、わが家は卒業式の前の何日かは、「ああでもない、こうでもない」と家族総がかりで答辞の文章づくりにとりかかっていました。郷里徳之島で小学校教員だったせいだろう、母の入れ込みようはたいへんなものでした。灯火管制のも

と、黒い布をかけ、手もただけ明るくした電燈の下で、顔を突き合わせて親子のやりとりが続いたのです。担任の大饗先生もわたしの家にやって来られて、励ましてくれた。答辞を読むことは、母にとっても、姉や弟にとっても、名誉だったんです。戦地の父（一兵卒として召集される。）も喜んでくれるだろうと思いました。そして誰より、わたし自身、晴れがましい気持ちでした。

卒業式ができなかった学校もありましたが、矢田小の卒業式は予定通り行われました。講堂壇上の「奉安殿」の礼拝、ゲートルを巻き国防服のいでたちの学校長が「朕思うに我が皇祖皇祚……」と荘重な声で教育勅語を読み上げました。連日の避難の疲れも感じない緊張の中に式は進みましました。親子して何度も何度も練習した甲斐あって、わたしの答辞も、落ち着いた声で朗々と講堂に響きわたりました。大饗先生も「大変よかった！中学校でも頑張れよ」と肩を抱いて喜んでくれました。「進、ようがんばったな」と、きびしかった母がほめてくれたのがうれしかったのを覚えていいます。

大空襲のあと何日かたって、市内の西成区の西浜に住む親戚の安否をたずねました。矢田く北田辺あたりは住宅が目に入ったが、天王寺から大国町、芦原橋から西成方面はずっと遠くまで見通せる瓦礫の焼け野原が続いていました。異様な光景が目に入ってきます。途中、被災者の遺骸も目にしました。一帯に立ちこめる焦げ臭い、その上生臭い異臭。目をおおう惨状に呆然と立ちつくしたのを記憶しています。大空襲を体験しながらも、卒業の日を迎え、答辞を読むことができたのが、わたしにとってせめてもの救いでした。その後、ますます空襲は激しさを増したように思います。八月六日の広島、同九日の長崎への「新型爆弾」（原爆）が投下されたという話は、わたしたち子どもにもすぐに伝わってきました。八月十五日、わたしは母と一緒にラジオの天皇の「玉音放送」を聞いていました。遠い、苦い、だが忘れてはならない思い出です。

6 戦後の体験

・経済の混乱 ― 餓えしのぐ ― 島は遠い

敗戦後、都会に住む人が例外なく体験したことなのだが、食べものをどのように確保するか――が多くの家庭の最重要の問題でした。着物や洋服など疎開で焼失を免れた衣類を闇市や近郊の農家に担ぎ込んで物々交換を頼んだものでした。ほとんどの人が、故郷の親類縁者のつてを頼って食糧を手に入れ、飢えをしのいでいたのです。ふるさと徳之島はあまりにも遠く、故郷を頼って「食料」を確保することができませんでした。講和条約によって日本本土は返還されたが、GHQによる奄美諸島の軍政は、ひきつづいて一九五三年まで続いたのです。内地との自由な往来は許されなかったのです。島に帰ろうにも帰れません。父は戦地から帰還していません。母は戦時中の無理がたたり、心臓性喘息の持病が悪化して働けなかったのです。一つ上の姉が家計を支え、私もアルバイトに精を出すという状態でした。姉は自らの進路に思いはあっただろうが家族の生活のため、思いを遂げられなかった。姉の支えで私の今日は築かれたと私は思っています。

わたしたち一家は、飢餓の苦しみに追い込まれていまし

た。工夫に工夫を重ね、米ぬかを固めた、パンでもない、煎餅でもない食べ物でをつくり飢えをしのぐことがありました。米ぬかは厄介でした。水だけでは団子に練ることができないのです。どうすればわずかなメリケン粉で練り固めることができるか进行たいへん苦心したものです。今では笑い話なんですが、当時は真顔そのものだったのです。こんなこともありました。近郊の農家をたずね、土間の片隅に山積みされたジャガ芋を、「屑芋でいいからわけてほしい」と懇願しても、分けてもらえない惨めさ、悔しさは今も忘れられません。「食い物の恨み」という言葉がありますが今もって忘れることができません。

切羽詰まって闇市で物も売りました。危ない橋も渡りました。統制経済で食料は配給制度でした。闇市で売るために熊本の伯父を頼って海苔を仕入れたり、鹿児島からタバコの葉を仕入れ、刻んで巻いて売ったものです。仕入れた物資を運ぶ帰りの列車で時々警察の臨検がありました。闇物資の摘発です。「臨検だ！」との声を聞くと、荷物を列車の窓から放り出すのです。次の駅に着くと、線路づたいに

もどって、放り出した荷物を探す。そんな危ない橋を渡って生きのびたのです。

・屋台を曳いてゝバイトに明け暮れた青春

“精一杯頑張るぞ”わたしは期待に胸を膨らませて中学校（旧制）に入学し、勢い込んでラクビー部に入り、時間の許す限り練習に参加したが、しだいに休みがちになり、半年ぐらいでラクビー部は退部に追い込まれてしまいました。もともと我が家の事情がクラブを続けられる状況ではなかったのですから。中学校に進学してからも、姉とわたしが我が家の生活を支える状況は変わらなかったからです。一九四七（昭和二十二年）、学制改革で六・三・三・四制の学校制度が導入されました。大阪ではそれまでの旧制（五年制中学校）と女学校が合併されて男女共学の新制度がスタートしました。府立天王寺中は府立夕陽が丘女学校と合併された。男女共学のドキドキ感と気恥かしさを覚えながら新制度がスタートした。みんな戸惑っていました。

教室ではこちらに数人、あちらに数人というように、男

女別々のグループがお互いを意識しながらも、素知らぬ顔で休み時間を過ごすことがしばらく続きました。おかしいもので、よそよそしく振る舞っていたのが、いつしか親しくなっていました。珍しさもあつてか、「だれとだれがカッブルだ」とささやいたり、本人をひやかしたり、からかったりするのも楽しそうでした。わたしは、そんな中に入ることもあまりできませんでした。わが家はこのころ経済的にいちばん厳しい時期だったんです。勉強する余裕はなかったのです。

わたしは、休んだり、早退するときがいやでした。友だちにその理由を、「イカ焼きのアルバイトに行く」などと、言えなかったわけです。ウソでとり繕うが、なんとなくうしろめたい思いがありました。

・初恋く住吉さんの祭り

近鉄矢田駅の隣駅の針中野駅の近くに香具師やしの親方がいて、夕方四時半ごろ、その親方のところへ行行って仕込みをするのです。大八車にイカ焼きの鉄板器具、刻んだイカを

長細い、もち箱に入れ、卵、小麦粉、木炭を積んで、肩に引き綱をかけて車を引っ張る。当時、時候がよくなると夜店が出ていました。西成区の梅通りは「五」のつく日、松通りは「八」の日、というように、夜店の露店が並ぶ。一時間から一時間半かけて大八車を引くのです。現場につくと香具師仲間を仕切っている親方がいて、「地割り」をしてくれます。親方が露店を開く場所を指定するのです。決まった場所で日が暮れるまでに火をおこし、イカに小麦粉をまぶし、卵を籠にもり、万端整えて客を待ちます。夕闇迫るところからポツポツと浴衣がけの家族連れ、子ども連れがやってくるのです。カップルもあります。イカ焼きは人気があつてよく売れました。行列ができることも多かったのです。炭火を前にしての、真夏のイカ焼きは汗が噴き出るほどきついものでした。でも、アルバイト料は売上の歩合制だったので、励み甲斐があつたのです。客には、中学校や高校の友だち仲間も結構多く見かけました。今も忘れられない光景が蘇ります。確か八月三十日、住吉大社のお祭りの夜店でした。いつものように塩を舐め舐め、汗にまみれ

てイカを焼いていたことです。十時も過ぎて客足が途切れたころ、通りを向こうから二人連れの浴衣姿が歩いてきます。団扇を片手に、小物入れをぶら下げて、なにやら談笑しながら近づいてきました。艶っぽい容姿に一瞬思わず手を止めました。胸を突かれ、心臓が早鐘のように高鳴りするのです。同級の松林和代と岡崎正恵でした。それでも汗だくの顔が、噴き出る汗でびっしょりとなりました。くるりと後ろを向いて、汗を拭う仕草で切り抜けようしました。「兄ちゃん、はよう焼いて！ あとが少ないよ」と親方の奥さんの声。タオルで顔を覆いながら気のない返事をしました。祈るような気持ちで二人が通り過ぎるの待ちました。二人の後姿がありました。「もうひとふんばりするか」とだれに言うともなく大きな声で機械の柄を握っていました。顔を合わせずにすんで、力が抜け落ちるような思いを仕草でこまかしたのです。

岡崎はバレエ部に所属していました。色白とはいえないが筋肉質で跳びはねていました。試合や練習にも時間をやりくりして応援していました。たった一度きりだが、手紙

を書いて休み時間に手渡したことがありました。バイトに疲れて帰った夜中に何日もかけて書いて……。渡すのにも一苦労でした。周囲を気にしながら、胸が詰まる思いをしながら、だれにも気づかれないで手渡せた時、ホッと大息をついていました。返事は来なかつたが、正月に家に招待してくれました。うれしかったが、返事の来ないのが気になつていました。不安でもありました。母はお呼ばれなんだからきちんとして行かなくては……と、父の和服を仕立て直して用意してくれました。時折、学校の帰りに駅の近くの回転焼きと一緒にたべたことはあるが、三年になって、これという理由もなく疎遠になりました。卒業五十周年の同窓会で再会しました。

「手紙は書かなかつたけれど、あのときはうれしかったんよ」の言葉に、ふだんはすっかり記憶の外にあつたものが蘇って、なにやら今の出会いのように新鮮な気持ちになった。五十年の歳月を経ての再会だったが、彼女にわたしはどう映つたのだろうか……。

・引きこもりに悩んだ

挫けるな、頑張るんだー自分をふるいたたせながら学業と屋台のイカ焼きのアルバイトをなんとかこなし、大阪学芸大学（現大阪教育大）に入学しました。教師になるにはこの大学が元師範学校で、この選択が最も良いと考えたからです。私の進路選択は高校時代の恩師土師先生との退学届をめぐるのいきさつが深くかかわっています。（五十二ページ参照）

入学はしたものの、間もなく「自律神経失調症」という精神的な病いが引き金となって「引きこもり」の日々に悩むことになりました。内科では特に異常はないとの診断。けれども家を出て駅に向かう途中、動悸が激しくなり動けない、手足がこわばり起きられない、人と顔を合わせて話したくないお風呂に入るのが怖いなど私にははっきり自覚できる症状があるのに……。どの医師もどこにも異常は認められないと診断したんです。私は必死に自覚症状を訴えるのでした。症状はあるのに治らない。悩みました。

中学時代に友人だった星島君を頼ることにしました。星

島君のお父さんは当時、大阪鉄道病院の副院長を勤める医師だったのです。星島君に頼んで診察してもらいました。やっぱりその診断もおなじでした。発作のたびに呼吸困難に陥る母の様子におろおろしながら看病した長年の体験や、そうした精神的ストレスが蓄積し、ちよつとした運動でも発作が起きるのではと不安感が頭をよぎるなど、さまざまに訴えたが、「何度診察してもおなじだよ、健康です」と診断が変わることはありません。「しばらく私が見てあげるから家に来なさい」とのお言葉に藁をもつかむ思いでご厚意に甘えることになりました。名古屋のご自宅で先生ご夫妻に面倒を見て頂くことになったのです。星島君は東京の大学でしたが、励ましてくれました。ご自宅に泊まり込んで、先生は名古屋の鉄道病院の病院長でした。先生の出勤に伴い、病院で清掃などの手伝いをしたり、家では体操やランニングなどと目前で見ていただきました。「私が看ている。何の心配もない。頑張れ！大丈夫、私が看ているんだ……」こんな生活がひと月余り続いたでしょうか。おかげでようやく立ち直りのきっかけをつかんだのです。今考えるとず

いぶん迷惑をかけました。今はそのご厚情にただ頭を垂れるのみです。

・戦後七十一年 — いま思うこと

— 戦後民主教育の変質

まず第一に蘇るのは、一九四五年八月十五日正午。「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び……」——戦争終結（敗戦）を告げる天皇の言葉です。玉音放送（当時はそう呼ばれた）を母と姉とわたしは、ラジオの前に座って神妙に聴いていたことです。ラジオは古いもので、故障なのか、声が途切れ、よく聞きとれない。父は戦地。戦後はGHQの占領政策のもと戦後民主主義・民主教育が始まったのです。戦争を体験した私たちは自分の人生を考えると、欠かせないのが戦争です。戦争の体験・その影響を抜きにしてはわが人生も家族の歴史も語ることができません。私は一九三二年生まれですから子ども時代を十五年もの間日中・太平洋戦争のなかで過ごすことになるのです。

すでに触れましたが「チャンコロをやつつけろ」とか、「鬼

畜米英を打ちのめせと棒を振り回し、叫んだりしました。「天皇のために死ぬ少年」、いわゆる「皇国少年」に育てられたのです。「私を私たらしめたもの」に色濃く影響されたのだと思います。

いま、ボランティア講師として参加している、識字・日本語教室——「よみかき茶屋」の教材としても自分自身の体験を書きました。いや、書かずにはおれない、書いておきたい——そんな思いがありました。「よみかき茶屋」で学習している人たちのなかには私と同じ世代の日本人も来日（滞日）外国人もいますし、戦争を知らない若い世代の人たちもいますので戦争体験を共有できるよい機会だと考えたのです。文集にも掲載していただきました。

戦後七〇年に思う
（よみかき茶屋教材）

国会は安倍政権が提出した「安全保障法案」を巡って与野党が激しくぶつかり合っている。戦後、国民が守り続けた「憲法第九條」の理念を踏みにじるものであり、憲法違反だとする考えが、憲法学者の見解や世論調査でも今も多く

の国民にうかがわれる。けれども安倍政権はなにがなんでも国会会中に成立させようとの強硬姿勢を変えようとはしていない。

平和憲法のもと、「教え子を再び戦場に送らない」のスローガンを旗印に歩んだ志がいまにもくずされそうだとわたしをわたしならしめた、教師としての歩みの根底には、自らが手旗信号の練習に嬉々とし、また国旗掲揚のラッパ吹奏に胸張った「皇国少年」の姿であり、それを称えた圧倒的な国民の意識、況への痛烈な反省がある。

戦後七〇年、私たち戦中・戦後世代は年を追って少なくなり戦争体験を伝えて行く手だても少なくなっている。戦争体験の風化が今日の「安全保障法案」提出に色濃く映し出されている。新聞、テレビ等に連日報道される国会審議の様子、政党や世論の動向に一喜一憂している。これからますます戦争体験者が少なくなり、戦争体験の風化が進むであろう。内心、忸怩たる思いがこみあげる。

二〇一五年六月一九日 いなとみすすむ

・戦後民主教育の歩みだし

私の戦後教育の体験は大阪府立天王寺中学校（旧制―現天王寺高校）への入学からスタートしました。入学し、初めて受けた数学の授業は度胆を抜かれました。普通は、先生の自己紹介やら授業計画や心構えなんかの話があるものですがね、初対面なのに自己紹介もあいさつもありません。驚きでした。おもむろに口を開いた第一声が

「同符号のよせ算は絶対値の和に元の符号をつける」

「異符号のよせ算は絶対値の差に絶対値の大なる方の符号をつける」――こう言って、いくつかの計算式を書くだけで何の説明もない。座席順に答えを求められる。答えられないと皮肉っぽく罵声を浴びせられるのです。いきなり、黒板いっぱいにとこせましと計算式が書かれ、懸命に、ただひたすらにそれを解くのです。そのくりかえしが終りの鐘近くまで続くのです。終業の時刻が迫る頃、満田先生は書き写されないほどの計算問題を書いて黙って教室を出て行くんです。生徒は休憩の時間にひたすらそれを写すのです。それが宿題なんです。数学の時間はいつもそうで

した。赤い表紙の本を手にしていたからでしょう、「赤本」とか「赤鬼」とかあだ名で呼ばれていました。「怖い先生」というイメージが焼きつけられ、数学の時間はいつも緊張していました。私の受けた戦後教育はこうして始まったんです。でも、戦後のそのころは、経済の混乱が容赦なくわが家を襲い、当時、私は新聞配達を初めいろんなアルバイトをしていました。失業対策事業だった長居競輪場建設のトロツコを押しましたんですよ。年齢をごまかしてね…。闇市での煙草売り、夜店の屋台を曳いてのイカ焼きなどなど、バイトバイトに明け暮れる日々で、勉強どころではないというのが実情だったのです。

私は戦時の軍国主義教育と戦後民主教育を体験して育ちましたが、人生のこの時期は学習に打ち込むことからは縁遠く、生きるのが精いっぱいというのが実情でした。

この頃、印象深く記憶にあるのは修身や、教練の時間がなくなつてホツとしたこと、教科書が国定ではなくなつたこと、男女共学の体験です…。やつぱり一番印象深く覚えているのは新制高校での男女共学です…。六・三・三・四

制の新しい学制なのですから。旧制府立天王寺中学校と府立夕陽が丘女学校がもともとは五年制の中・女学校だったのですが一九四七年の学制改革で三年制の高校として出発することになりました。天王寺中の半数の男子が府立夕陽が丘高校に、夕陽が丘女学校の女子の半数が天王寺高校に入学して男女共学になったわけです。府下全域の公立中学校・女学校の組み合わせが行われました。入学式の日、校門前の道路沿いに、校門から運動場にかけて私たち男子生徒を拍手して迎えてくれました。なんとも照れくさいやら、恥ずかしいやらでうつむき加減で、だけどチラツチラと目をやって歩いたことを覚えています。

・教育の国家管理の動き

戦後七〇年の教育界の姿は教職員にとつてずいぶん窮屈なものになったとわたしには映ります。スタートした当時の戦後民主教育は、教職員にとって教材の選択や、カリキュラムの編成などはかなり自由裁量が認められ、教員一人ひとりの個性が発揮できていたように思います。最近の学

校現場は教科書の選択、学習指導要領の遵守、教育委員会や校長、教頭等の管理職の校務運営・教職員管理のきびしさ、保護者と教員との間にいじめ、荒れを巡る生徒指導等について軋轢があるように感じます。信頼関係の醸成が疑われるような情況が時折伝わってきますね。どうして戦後民主教育がこのように変質したのか、その軌跡を追ってみたいのです。その歴史を総括的に言うと、「独立国家にふさわしい教育を」の謳い文句に強硬に推しすすめた国の政策と戦後民主教育を守ろうとする市民との激しいせめぎ合いだったと思います。

GHQ（連合国軍総司令部）のマッカーサー最高司令官は日本のこれまでの軍国主義教育を払拭し、民主教育の導入にむけて一九四五年、敗戦直後の十月にはすでに「日本教育制度ニ関スル管理政策」を打ち出しているんですね。軍国主義的教科と教練を禁止し、また更に、十二月には修身、日本歴史、地理の授業の停止を命じています。日本に民主主義を導入しようとした強い意志の表れだったのです。戦後民主教育の本格的な制度や、内容はアメリカの教育視

察団の報告書が影響を与えたのです。一九四六年三月に教育使節団が来日し、日本各地の学校を視察し、日本の教育者たちと意見交換を行っています。そして一ヶ月後にその報告書が明らかにされました。報告書の骨子はおよそ次のようなことでした。

まず、日本の国家主導の軍国主義教育を批判し、これからの教育として、何よりも「個人の尊厳と自由」を重んじ、個人のもつ能力を最大限に伸ばすこと」を基本原理としました。およそ次のような項目をとりあげています。

- ① 民主社会の一員としての「主権者市民」の育成
 - ② 国定教科書の廃止
 - ③ 教職員のカリキュラム編成、教材選択の自主性の保障
 - ④ 文部省の中央集権的な教育行政の改革
 - ⑤ 地方自治のための公選制の教育委員会の創設
 - ⑥ 教育の機会均等の実現のため六・三・三・四の学生の導入
 - ⑦ 九年間の義務教育を無償とする
 - ⑧ 教員養成を開放制にし、大学レベルで行う
- GHQのこのような占領政策が命令されているのに対して

日本政府にも民主教育にむけての動きがなかったわけでは
ありません。敗戦直後就任した前田多門文部大臣は省内の
リベラル派や学識経験者で「公民教育刷新委員会」を立ち
上げ、教育の民主化を図っています。教科書の軍国主義的
な個所を削除するよう学校に指示しています。教職員たち
はその個所を子どもたちに墨で塗りつぶさせたのです。い
わゆる「墨塗り教科書」です。これは広く知られています。

当時の日本政府にも軍国主義教育から民主教育へ転換する
主体的な動きがあったわけです。このような占領政策と日
本の民主主義教育への動きがあつて戦後民主教育は誕生し
たのです。この使節団の報告書が本格的な戦後民主教育の
下敷きになったことは否めなく、色濃く影響を受けたこと
でしょう。

ところが、一九五二年に国家主権を回復して間もなく、日
本政府は、「独立国家にふさわしい教育体制」という謳い文
句で戦後民主教育の改革に手をつけ始めたんです。当時の日
本政府の主張は、端的に言うくと、現在の日本国憲法や、教育
基本法は日本人自身の手で主体的に作ったものではなく、G

HQに押しつけられたものだ。国家主権を取り戻した今、独
立国家にふさわしい憲法、教育基本法に日本人自身の手によ
って作りかえることが必要―およそこんな主張です。

・新たな国家主義の台頭

戦前の軍国主義教育を推進したことに対する深い反省に
立って日教組は平和運動を活動の中心的な柱に据え、平和
運動をすすめました。教研全国集会(教育研究全国集会)に
も「平和教育」分科会をおき、実践交流を深めるようにな
りました。一九五一年に、「教え子を再び戦場に送るな」を
スローガンに掲げ、平和教育への誓いを鮮明にしたのです。
一九五〇年代後半のストライキなど、勤務評定反対闘争後
の荒廃した教育現場の情況、組合の活動家の言動に私は嫌
気がさして組合活動に歪な感情をとりこんでいったのです
が、平和教育運動には積極的に参加していたように思いま
す。とりわけ、十月二十一日の国際反戦デーの集会・デモ
行進、八月六日の平和登校日の学校行事などには多彩なと
りくみをすすめたことを昨日のことに覚えています。

政府が教育の中央統制に乗り出したのはサンフランシスコ講和条約が結ばれ、国家主権を回復した一九五二年以後間もないころでした。日本政府はまず教育内容の統制に着目したのです。それまで「試案」とされ、法的拘束力を持たなかった学習指導要領に拘束力を持たせ、学校現場に遵守させることにしたのです。つまり、政府の息のかかった教育内容を学習指導要領に込めて締めつけたんです。「道徳の時間」の特設、「日の丸」掲揚、「君が代」斉唱が望ましいとされるなど、教育の中央統制はかなり強硬にすすめられたように思います。近年、「国歌・国旗法」を根拠に卒業式

等学校行事で「君が代」を謳わなかったり、起立しなかったりした教職員を処分するなどの強硬姿勢が大々的に報じられています。新しい国家主義の台頭だと思わずにはいられません。また、これだけで終わらなくて、教科書の検定基準も、教育基本法の「平和の精神、真理と正義の尊重、自主的精神の要請」などの大切な文言が削除され、教育現場は重苦しい空気に包まれていったように思います。

私が教師として難波中学に赴任したころは、教職員の管

理のための「勤務評定」制度（一九五六年）が導入され、また、「中央教育審議会」（中教審）の学習指導要領の改訂があったころにあたります。

国家主義の台頭を懸念する日教組を中心とする反対闘争は本当に熾烈なものでした。勤務評定による教職員管理反対、「日の丸」掲揚、「君が代」斉唱反対、核廃絶を目指す平和運動などが一体となって政府の強権的な動きに抵抗したのです。初めて教職員のストライキも経験しました。多くの学校現場で非行、荒れなど荒廃した状況が生まれました。私が勤務した難波中学では学級崩壊とまで批判された状況がありました。民主教育を守る抵抗闘争であつたにしろ日教組のストライキでの抵抗闘争は教職員にとどまらず、多くの市民からも批判の声が湧き上がりました。新任教師時代の体験です。今、戦後教育の軌跡をたどってみてあらためて思うのは、戦後民主教育を守ろうとする市民と、国家主義の教育を推し進めようとする国家権力とが、激しくぶつかり合ったそんな歴史のなかに私自身が生きたということです。

・教え子を再び戦場に送らない

―反戦・平和への思い

戦死せる教え兒よ

逝いて還らぬ教え兒よ

私の手は血まみれだ！

君を縊^い死^しったその綱の

端を私も持っていた

しかも人の子の師の名において

嗚呼！

「お互いにだまされていた」の

言訳けがなんでできよう

慙愧 悔恨 懺悔

それがなんの償いになろう

逝った君はもう還らない

今ぞ私は汚濁の手をすすぎ

涙をはらって君の墓標に誓う

「繰り返さぬぞ絶対に！」

（一九五二年高知県教組機関紙「日教組六〇年史」より）

この詩は高知県教組が平和教育に取り組む教職員の立ち位置として、機関紙で発信したものです。わたしは新任教師の頃にこの詩を読んで、いたく感銘を受けたことを思い出します。

戦前の軍国主義教育を推進したことに対する深い反省に立って日教組は平和運動を運動の柱に据え、平和運動をすすめました。教研全国集会（教育研究全国集会）にも「平和教育」分科会をおき、実践交流を深めるようになりました。一九五一年に、「教え子を再び戦場に送るな」をスローガンに掲げ、平和教育への誓いを鮮明にしたのです。一九五〇年代後半のストライキなど、勤務評定反対闘争後の荒廃した教育現場の情況、組合の活動家の言動に私は嫌気がさして組合活動に歪な感情をとりこんでいったのですが、平和教育運動には積極的に参加していたように思います。とりわけ、十月二十一日の国際反戦デーの集会・デモ行進、八月六日の平和登校日の学校行事などには多彩なとりくみをすすめたことを昨日のことのように覚えています。しばらく距離を置いていた教職員組合との関係は一九七〇年代になって人権保障の胎動と

ともに深くつながっていったと思います。

・歴史教科書検定にみる史実の歪曲

主権を回復した日本政府は教育の内容、とりわけ歴史教育の内容に強く干渉するようになりました。それは教科書検定の流れを見ると歴然としています。

敗戦後、戦前の国定教科書に対する反省に立つて新しい教科書が史実にもとづく自由な記述が各教科書会社ですすんだように思います。けれども、主権を回復した日本政府は、教科書検定制度を設けて記述の制約を次第に強めていくんです。どのような制約がかけられたか、検定基準の変遷を見るとかなり明確に見えてきます。

一九六〇年以降、検定の強化によって、歴史の教科書から植民地支配の実態について記述した箇所がかなり希薄になるか、あるいは歪められて記述されることになったように思われます。記述すらされなくなった史実もあります。例えば、苛酷な植民地支配政策に抗して、独立を求めて朝鮮全土で起きた朝鮮民衆の抵抗運動（三一独立運動）を「暴

動」だと記述したり、関東大震災時の朝鮮人虐殺の犠牲者数や、一五年（日中）戦争期（一九三〇年代～四五年＝敗戦）に炭坑や鉱山、土木工事現場に強制連行された朝鮮人の人数についても、「不確実な数字を断定的に書くことは避けるよう」との教科書検定の指示で削除されたり、あいまいに「多数」といった表現で記述するようにとの指示が出されました。記憶に新しい「従軍慰安婦問題」や、「土地調査事業」という名の土地収奪政策などの皇民化政策も、「法的な手続きを踏んでいた」という理屈で削除されたり、書き替えるを求められました。強制連行は「連行ではなく法令に基づく徴用であった」との理由で、「強制」を「奨励」に変更するように指示され、それを受け入れなければその記述箇所は削除されるのです。歴史の事実を支配者の側から伝える、あるいは史実そのものを隠してしまうということを教科書検定は行ってきたのです。戦後の日本の歴史教育は教科書検定政策によって大きく歪められたと言えるのではないのでしょうか。

「民族的マイノリティの人権保障」を目指した運動をす

めているわたしたちも教科書検定への動きには強い憤りを感じました。

「全朝教」・「考える会大阪」では活動をすすめるほど近代での日朝関係の確かな歴史認識を子どもたちに育てることの大切なことに気づきました。数えきれないほど多くの実践交流会、シンポジウム、講演会の積み重ねがいろんな事を教えてくれたように思います。活動が始まった一九七〇年代は民族差別事件が頻発していました。一九六〇年代の末ごろから高まった被差別部落や、在日朝鮮人、障害者に対する差別、人権の侵害が社会の課題として、ようやく市民に認識され始めるようになりました。

「考える会大阪」結成のきっかけになった大阪市立中学校長会民族差別文書事件（一九七一年）や、「大阪市外教」（註4）の学習会での大阪市立深江小学校長の〈当時の国際情勢では朝鮮植民地支配はやむを得なかった〉と日本の朝鮮植民地支配を正当化した民族差別発言事件（一九七四年）が大きな問題になりました。また、奨学金受給申請をめぐる朝鮮人排除の事件などの追及にとりくんだのが昨日のことの

ように蘇ります。事件追及の過程で在日朝鮮人の民族教育など民族的な権利を侵害している日本社会の不条理に気づいていくわけです。それらに共通しているのは近現代の日本の近隣アジアに対しての侵略・植民地支配についての加害の史実なのです。こういう歴史の史実を確かな認識で受けとめることが未来の近隣諸国家との友好・親善に欠かせないと思うんです。ところが、日本政府の考えは私たちとは異なるようです。

一九八二年当時、「日本の教科書記述は史実を覆い隠したり、歪曲している」との非難と抗議が外交問題に発展しました。その結果、「近隣諸国条項」（註5）を設けることになったのです。そんないきさつをみないで教科書検定を所管する文科大臣、政務官がそろって「近隣諸国条項」を否定するような発言を繰り返すところに現在の日本のいびつさがあるように思います。中国侵略や朝鮮統治の史実が教科書であいまいにされたことで中国や、韓国が激しく反発・抗議し外交問題に発展したことは記憶に新しいことです。「近隣諸国条項」が検定項目に加えられて教科書に当時

の加害の史実がかなり多く記載されるようになりました。検定によって当時のこのような背景や、経緯を知ってか知らずか当時の中山大臣や下村政務官が発言しているわけです。戦後の民主教育はこのようにそのときどきの政権の教科書検定政策によって大きく歪められたように思います。戦前戦中の教育で育った私たちにとどまらず、戦後の民主教育を受けて育った人びともまた、近・現代の日本とアジアの関係の確かな歴史認識を培ったとは決して言えないのではないのでしょうか。そんな不確かな歴史教育を受けてきた日本人の多くが朝鮮、中国を初めアジアに対する歪な認識を潜在させることになったと私は考えています。教科書検定がおこなわれるたびに日本と近隣アジアの国々、とりわけ韓国、中国との間で歴史教科書の記述をめぐる「史実の歪曲」として非難と抗議がなされ、外交問題に発展することが繰り返されているのです。確かな歴史認識を育むとりくみがいつそう求められているように思います。「未来志向の日韓関係」をめざすため、日韓の民間レベルで歴史教育を検討する潮流が生まれているのはたいへん有意義なことだと思います。このよう

な潮流に力を合わせたいと思います。

7 出会いと学び

・教師としての生き方の葛藤

一九九三年、大阪市教育センターで定年となりその後、十余年を講師として大学の教壇に立ちました。現場一筋四十数年、多くの生徒、学生との出会いがあり、交流があり、教師冥利に尽きる生活でした。

教師は様々な教育環境で通学する生徒さんと出会います。家庭的にも、経済的にも恵まれた子どももいれば、母や、父のいない子ども、経済的に恵まれない家庭の子ども、身体に障害をもつ子ども、実に様々なのです。

そういう子ども一人ひとりを取りまく環境の異なりが教育にも格差を生みだし、様々な課題を社会に投げかけています。

新任のころの私は生徒一人ひとりを取りまく環境の異なりや、社会的立場の違いを受けとめ、寄り添うことのできる教師ではなかったのです。今思えば、授業など教育活動にた

だがむしやらにぶつかっていく教師だったように思います。

難波中学校では杉本一郎など被差別部落の子どもに出会いながら彼が背負っている家庭の貧困の問題を、その背景にある被差別部落の「差別の現実」に無自覚だった私。杉本君の姿が長欠になったときも、これ以上なすべがないと座視してそのまま放置していたのです。転勤した二校目の城陽中学校では校下に朝鮮人の多住する地域がありながら金信子キム・シンジヤの私立高校の入試差別の訴えを受けるまでは、自らすすんで在籍する朝鮮人の子どもが日常的に受けている、差別や抑圧など人権の問題に無関心というか、無意識でいたというのが事実でした。京大での内地留学を終え、現場復帰したのが一九六五年でした。

大阪市内城東区の城陽中学校です。校長室に赴任のあいさつに訪れた時のこと。初対面の尾林宗雄校長（故人）は城陽中の現況や取り組み、運営方針について考えを話されました。「……ところで、この学校には朝鮮人の生徒がかなり在籍している、心得てとりくんでもらいたい」と最後にわざわざ付け加えたのです。校長の意図はなんだろうと一瞬、怪訝に思

ったが聞き流していました。『ふーん、そうか』と気にも留めなかったのです。シンジャの訴えから取り組みが始まって、尾林校長がそのとき付け加えた意味がようやく理解できました。こんな経緯があつて一九七四年、わたしは一般的な普通の中学から夜間中学に転進することにしたんです。当時すでに、天王寺夜間中学に在日朝鮮人のハルモニ・オモニが在籍していることを報道記事を読んで知っていたからです。城陽中学でシンジャの訴えによつて教師としての資質を足もとからくずされる不甲斐なさを体験した私は、在日朝鮮人が多く学ぶ夜間中学に転勤し、自らを見つめ直すことを希望したのです。

・オモニ・ハルモニに向き合った夜間中学十五年

歴史認識の覚醒

一九六〇年代半ば〜一九七〇年代は教師としてのわたしの生き方の変わり目であり、模索の時期でもあったのです。履歴・出来事をふり返ってみると、わたしの教師としての生き方の変わり目が見えてくるように思います。シンジャの訴

え以降、「考える会」代表に就いた後は、教育運動の活動に次第に傾いていきました。

しかし、校長、指導主事など管理職への道筋もひた走りに走っていたんです。教師としての生き方を模索し、葛藤していた時期でした。

私立高校入試差別事件の「シンジヤの訴え」は大阪の教育界を揺るがす差別事件へと広がりました。その告発は人権問題学習時の中で、私に向けられたものでしたが、大阪府教委・市教委、大阪府教職員組合（府教組）、教育現場すべてに向けられたものでもあったのです。この差別問題を解決する教育運動は私を在日朝鮮人教育運動に立ち向かわせるきっかけになりました。さらに「民族的マイノリティの人権保障」のための運動組織の立ち上げ、運営・活動へと生き方の転換につながるのです。

「私の生き方」の転換を促したのはマイノリティの生徒さんとの出会いとその現実の姿に驚愕と、課題解決への意欲がありました。しだいに日本の学校を覆うマイノリティの子どもに対する問題に気づき、課題が見えるようになりました。



中学校教員時代の歩み

年	履歴・できごと	教育運動・研究
1956 1964～	大阪市立難波中学校新任 京都大学内地留学（長期研修）	社会科授業研究、 道徳教育研究
1965	市立城陽中学校転勤（現場復帰）	
1966	大阪市教委優良教員表彰受賞	
1966・67	「促進学級」担任	学級集団づくりに励む
1968	キムシンジャの告発	私立高校入試差別追及
1971	市立中学校校長会民族差別 文書事件	大阪「考える会」 立ち上げ代表就任
1972	市立長橋小「民族学級」開設	民族講師保障の対市交渉
1974	市立天王寺夜間中学に転勤	大手前女子短大入試差別追及 中川幼稚園入園差別事件追及 深江小民族差別文書事件追及 日本育英会奨学金受給資格の 「国籍条項」追及

・夜間中学に学ぶオモニたちとの出会いと学び

一九七四年四月八日、天王寺夜間中学校での教師生活がスタートしました。それから一九八九年三月までの十五年間、オモニ・ハルモニとの学びの生活が続きました。私は在日のオモニたちが多数学ぶクラスを担任することを申し出でました。私自身ここで在日のオモニ・ハルモニと向き合い、教師として自らを鍛え直したいとの思いが強かったのです。私が担当することになった学級は「基礎組」と呼ばれていました。三十八名の在籍者のうち三名の日本人を除いては圧倒的多数がオモニたちでした。平均年齢が五十六歳。その現実にまず驚きました。



・衝撃の連続くオモニたちと私

夜間中学？―中学校に夜間の学校などあるの？…多くの人がそう考えます。そんな中学校が現にあるのです。しかも公立の学校です。一九四七年、敗戦後まもないころ、今の学制、六・三・三・四制の新学制が始まりました。新学制がスタートしたものの、経済の混乱で義務教育と定めた小・中学校にさえ通えない子どもたちが大勢いたのです。このような状況に対応する現場教師たちの努力で大阪市生野区の生野第二(現勝山)中学校に夕間学級(註6)が開設されました。敗戦後の混乱の中と現場教師のこのような努力が今の夜間中学に引き継がれています。そんな歴史のある夜間中学を教師ですら知らない人が多いのが現実です。そんな学校に勤めたのです。教員生活四十余年のなかで一九七四年～一九八九年の十五年間をそこで過ごしました。衝撃的な出来事や出会いにとまどい、とまどいしながら歩んだことだと思います。戸惑いとまどいしたのはなぜでしょう。いま考えると、夜間中学に学びを求める生徒の生活の実態・生きざまをあまりにも知らなすぎたからで

すね。今でこそ、入学式、卒業式の折りに触れて夜間中学に学ぶ生徒さんの思いを伝える報道が増えて、記事を通して夜間中学の存在を知った市民が増えていると思います。が、それでも知られていない世界です。私が夜間中学で生徒さんに向き合っていた現役時代からもうすでに二十有余年たっています。いま、わたしは大阪駅前第二ビルの一室で行われている、総合生涯学習センターの「よみかき茶屋」と呼ばれている多様な在日(滞日)外国人の日本語学習や、交流をすすめている「識字・日本語教室」にボランティアとして参加しています。ボランティア講師には多くの日本人市民、資格をとった外国人、元学習者が参加し、指導・交流にあたっています。和気あいあいの雰囲気があつて喜ばれています。こんな様子をみると「日本社会・日本人」の外国人に対する意識も変わってきているとは思うのです。しかし、マスコミに報じられる犯罪報道や、外国人労働者に対する企業の仕打ち、出入国管理行政の報道などを読むと、在日(滞日)外国人にとって日本はまだまだ住みよい国ではないようです。高齢化社会を映し出して最近、

介護分野への外国人の受け入れを進めようとの動きがさかんに報じられています。けれども三年間の研修期間で介護士の資格を取得できなければ以後、在日(滞日)が認められないと言います。この人たちにとって介護の専門用語を含む日本語の習得は容易ではありません。そのことへの配慮がほとんどなされていないのです。二の足を踏む業界関係者も多く、この制度も必ずしもうまくいっているようには見えません。名目は「技術研修」で、実際は労働者として就労する外国人労働者への処遇の問題や近年のリーマンショックといわれる金融恐慌による世界同時不況のあおりで企業の労働者解雇があいついたことがあります。このときの報道にも突然解雇されたブラジル人が、国に帰る旅費すらなく、途方に暮れている姿が映し出されていました。外国人労働者をひとりの「ひと」として処遇するのでなく、単に「労働力」としか考えない様子が映し出されていたように思いました。

超高齢社会に向かう日本は「労働力」問題をどう解決するのか。多くの自治体、が「多文化共生社会」の実現をめざし

て、「多文化共生教育」を唱えているにもかかわらず日本社会はまだ多文化共生社会には程遠い状況です。夜間中学の世界に足を踏み入れた私は在日朝鮮人をはじめとする在日（滞日）する民族的マイノリティから多くのことを学びました。

天王寺夜間中学に赴任した当時、在籍するオモニたちの在籍は一世がほとんどで二世がわずか。学齢期に就学の体験を持っていないのです。天王寺夜間中学は正式には大阪市立天王寺中学校夜間学級と呼ばれています。在日朝鮮人の数は開設された一九六九年にはわずか九名だったが一九七二年ごろから年々増え、一九七六年には在籍の八〇%がオモニたちになったんです。天王寺夜間中学は大阪の在日朝鮮人最多住地域である生野区、東成区に隣接しており、交通の便も良いということもあって年々その比率が高くなったのです。大阪市の文の里中、菅南中学校、東大阪市の長栄中学校でも同様の傾向がみられました。またたく間にロコミで広がったのです。

・高仁道(コ・イント)さんのこと

古びたノートをたどって夜間中学に学ぶオモニたちの状況を記録しておきます。コ・イント(仮名)さんはこのように語りました。

「わたしはチェジュド(済州島)で生まれました。日本の国になってから、土地もなく貧乏でした。『女に学問はいらん』そう言われて学校に行かしてもらえませんでした。小さいころから海にもぐって貝や、のりをとって家の手助けしました。十九歳の時、稼ぐために日本へきました。

夫がいつの間にか家を抵当にお金を借りました。ある日、借金とりが大勢押しかけて家を追い出されました。字が読めないためにそんなことになったのです。子ども八人をかかえて、なりふりかまわんと今日まで働いて来ました。今も、朝鮮市場でシジミを売っています。行商していて日本人のお客さんに『受けとり書いてくれ』言われてドギマギしていると『あんた朝鮮人やろ、字知らんねやろ。ハンコ出し!』と、無理やりハンコ押さされました。腹わたが煮えくりかえるほど腹が立ちました。字を知らんつらさがこた

えました。苦しい目に会うのも、誰のせいでもない。自分が悪いんだ。死ぬまでにきつと字覚えたる。そう思うて生きてきました。近所の人に要らなくなった日本の国語の教科書を借りてきてシジミを売りながら教科書の字なぞつて練習しました。何度も何度も。ある時、友だちから字知らん私らも字教えてくれる学校が天王寺にあるということを知りました。三日間眠れませんでした。どうしても行きたかったのです。主人にはアルバイトだと言って、内緒で通い始めました。四十年間思いつづけてきた夢がかなえられたんです。エンピツ握ったら、手が震えて書けないんです。涙も出てくるんです。いつまでも隠してられないので、とうとう家族に打ち明けました。打ち明けて、やめさせられたらどうしよう。―そのことばかり考えてました。子どもが最初に賛成してくれました。応援したる、言うてくれました。―私には理解の及ばない話でした。

このオモニの日々の生活はつぎのようです。朝四時に起きる。夫と一緒に鶴橋に仕入れに出かける。六時ごろから朝御飯の支度。八時には子どもを送り出す。夫も行商に出

て、自分は御幸森通りの朝鮮市場の一角でシジミを売る。夕方四時ごろ、夫に代わってもらつて家へ帰り、晩ご飯の支度をして学校へ。一時間目に少し遅れてすべりこむのがやつと。九時に終わつて家に帰るのが十時前。ご飯を食べ、片付けをすませると十二時近くになります。疲れはてて眠りこむ。授業中、ときどき眠気とたたかっている姿を見かけたものです。

オモニたちのほとんどが大なり小なりこのような日々の生活の様子です。そんな日々の生活を送りながらそれでいて学級の中に暗いかげはみじんも見られないのです。むしろ明るさと若々しさと爆発的なエネルギーが満ちています。この姿を見て私は圧倒されました。以前、勤めていた城陽中学にはおよそ一〇%の朝鮮人の生徒が在籍していたのですがそのほとんどが日本名を名のり、日本人と同様に学んでいる。当時の私にはそのことの意味がわからなかったし、疑問にも思わなかったのです。シンジャやオモニ・ハルモニとの出会いの中でしだいに日本社会に息づく民族差別や、権利の抑圧を捉えていく眼が育ってきたように思

うのです。

オモニ・ハルモニとの夜間中学の生活が始まりました。私が担任した「基礎組」は日本語が九時間、算数が八時間を中心その他の教科七時間、計二十四時間が一週間の授業です。担当して一年間ぐらひは、私は私なりに、また、オモニ・ハルモニたちも緊張感がほぐれず、授業は計画通りには進まず、頓挫することがしばしばでした。エンピツの握り方、ノートの使い方、書き方を教えることから始まったのです。私自身の意識をオモニ・ハルモニたちの実態になじませることにずいぶん時間がかかりました。今も蘇る強烈な思い出があります。

・ “と” で “、” “ち” と “じ” “

—日本語はややこしい基礎組の授業

ともかくにも驚きの連続だった入学式が、あわただしく終わりました。「雨の “あ、” 甘い “あ、” 赤いの “あ、” は、こんな字ですよ」

ひらがなの五十音の指導から授業は始まりました。

「何べん習うてもすぐ忘れてしまう。もうあかん。もう学校やめようか思います。どないしたらええと思えますか、先生！」

「そんなこと気にせんと。忘れたらまた覚えてたらいい。間違ったらまた教えてもらたらいい。 “て” と “で” “、” “ち” と “じ” “、” “け” と “げ” の発音の区別がでけへんのは、あたりまえや。オモニたちの国の言葉と日本の言葉とは違うんやから…。気にしたらあかん」

「先生。きのう、きつぷ買う時に見たのですけど、この間習った『自動車』いう字あるでしょう。あれと同じ字書いてありましたけど、どういう意味やろ…」

「うんうん。切符買う機械のことでしょう、それはね。『切符の自動売場』のことや。お金入れたら、ひとりでに切符が出て、買えるでしょ。「自動」というのはね、人の手を使わないで、機械でひとりでに動くという意味ですね。最近、いろいろ町に見かけるでしょ。たばこやジュースやいろいろなものを売る機械があるでしょ。あれみんな、自動販売機” っていうでしょ。こんど買うとき、みなさん見ておい

てくださいよ」

「ああそうか。自動車はひとりでに動く車やな。うまいこと考えて使うてゐるな。漢字は」

「先生、学校へ行つてゐる子どものこと、〃じどう〃つていうでしょ。あれも、この字書くのですか」

「ああそれは、全然違うんですよ。日本の言葉には、発音が同じでも意味の違う言葉が沢山あるのです。今、キムさんがいったのは『児童』という、小学校に通つてゐる子どもという意味の言葉です。だから『自動』とは全然違う字なんですよ」

「ややこしいな。いろいろあつて」

「仕方ないやん。そのややこしいのを覚えんと読まれへんのやから」

「そそそや。次、いこう、先生」教室いっぱいになぎる熱気。一人が発言し出すと、あちらからも、こちらからも言葉が飛び出す。疑問に思つたこと、わからないこと、町で見かけたこと、一人の生徒の出した疑問に答える声。それこそ、ハチの巣をつついたような状態がひとしきり続

く。私はそれを收拾するのにひと苦労して、再び授業を軌道に乗せるのです。

在籍三十八名のうちごく少数の日本人を除いては、圧倒的多数が在日朝鮮人のオモニたちだ。当時、平均年齢が五〇歳を超えていた。一世がほとんどで二世がわずか。もちろん、学齢期に就学した経験をもつていません。

・座席をめぐつての争い

蘇るその一つは学習の内容ではなく、教室の一つの座席をめぐつてのオモニたちの激しい争いでした。学習が始まつて一カ月ほどたったある日の出来事です。

しばらく家庭の事情で休んでいたオモニが登校してみるとその座席に他のオモニが座つていてその席を巡つて二人の口論がはじまつたのです。休んでいた生徒は「この席は入学式の時に先生が決めた自分の席だからあけてほしい。」と主張する。休んでいる間にその席に座つた生徒は「あいっている席に座つてもいいと先生が言つたから座つてゐるんだ」と主張して譲らないのです。この両者の争いに周りの

生徒が組して喧々ごうごうの争いが起きているのです。話をよく聞いてみてやつと争いの原因がやつと理解できました。

オモニたちのほとんどが高齢で視力が衰えており黒板の見やすい座席に座れるかどうかは大げさだがオモニたちの学習にとって死活の問題であつたのです。そんな初歩的なことに気づかず「お互いに譲り合えば済む」と片付けようとした教師に不信を抱くのは自然のことでした。オモニたちにとって教室で学習するのはおそらく集団生活の初めての経験だつたのでしょう。学習はオモニたちにとっては自分のものでしかなく、みんなのものなどという意識は持ちようがなかつたのです。「生徒の目線に立つて生徒に寄り添う教師」の姿勢の大切さがよく語られます。「生徒に寄り添う教師」—そのこの意味を問い続けることにしました。そういうオモニたちにの姿にどう向き合えばいいのか私はとまどいの連続でした。個別指導のため、机間を回つているときも、あつちからもこつちからも「先生、見て！」と声がかかる。「ちょっと待って！」と応じても通用しない。こ

こでも先生争奪の争いが起きますのです。ほんとと困り果てました。しかし今思えば、私との緊張関係が学級内の信頼関係をつくつてきたことをオモニたちが一番よく知っていました。ようやく学校生活に落ち着きを取り戻してきたオモニたちにどのように日本語を教えるか。私たち教師に突きつけられた課題でした。しかし、当時の天王寺夜間中学はオモニ・ハルモニの在籍が年々増大する状況を歴史認識を踏まえて捉えようとする雰囲気はほとんどなかつたのです。

・卒業したくないもつともつと勉強したい

教職員との激しいぶつかり

「基礎組」で勉強を始めたオモニたちが、ようやく日本語の簡単な文章の読み書きができるようになるまでに、三年ぐらいの年数がすぐに過ぎてしまします。漢字が読め、簡単な文章も書けるようになったころ、中学校としての修業年数が終わることになる。本当に理屈に合わないのだが、卒業学年になるのです。「中学校の修業年限は三か年」—法

の建前に沿うなら、これでもう卒業ということになるわけ
です。

夜間中学校での、教師と生徒とのぶつかりはいろいろあ
るけれど、この修業年限をめぐるぶつかりほど激しいもの
はありません。

「先生！私たちはまだ卒業したくありません。まだ新聞
もろくに読めないのにどうして卒業ですか。卒業証書なん
かいりません。もっと納得するまで勉強させてください」
「今卒業させられたら、何のためにこれまで苦しい勉強を
してきたか、無駄になってしまいました。教育委員会に言う
て、卒業しないでもいいようにお願いしてください」生徒
会の代表を交えて三年の生徒たちが私たち教師に訴えます。
思い返してみると、大阪の夜間中学校の再生を訴え、証
言映画「夜間中学生」をひっさげて、夜間中学校廃止反対
の証言行脚に全国を走りまわった、高野雅夫さんの思いに
オモニたちの思いはつながっています。学びの中で自らの
立場や権利に目覚めていく生徒たちに、私はたじたと
なのです。生徒たちの怒りに私もいらだちが高まります。

オモニたちの訴えは当然である。五十歳、六十歳になっ
てなぜ学ぶのか。そもそも、オモニたちが不就学のまま、
日本の社会に生きること余儀なくされたのは、その原
因、背景を考えてみれば、当然すぎるほど当然ではないか
。私は基礎組の状況から見て「修業年限のことを見直し
て改善することが必要ではないか」と何度も職員会議で訴
えました。

転勤し、六年経って私は夜間中学の公選で主事（註 9）
の立場に選ばれました。

夜間中学には教頭制はなく、管理職ではないのですが天王
寺夜間中学校の窓口責任者―主事という校務分掌がありま
した。ようやく職員会議で私の発言に耳を傾ける雰囲気
が醸成されてきたのです。議論は交わされるがやはり修業年
限についての「法の壁」厚く、オモニたちに「寄り添う」
打開策は見いだせなかったのです。

・立ちはだかる「法」の壁

「稲富さんの提起は問題にならない。」「中学校の修業年限

は三年」―これは法律に決まっている。そんなことを議論してもどうしようもない。時間の無駄である」。

「植民地支配という歴史的背景があって、ほとんどの朝鮮人が未就学生徒という実態になった。このことを考えない、また、無関心では大変無責任ではないか」

「そういう背景を考慮に入れても法律で決まったことに反することはできない。学校現場ではどうにもならないし、わたしたち教員の立場ではどうすることもできない。」

「大きな矛盾が明らかだ。現場として声をあげることが大切だ」。

「法律の運用の中で実態に応じた何か手立てがないか、考えてはどうか。現在は夜間小学校の制度はないのだから「義務教育は九カ年」が保障されていない。論議もしないのは無責任だ」

こんな議論に終始する会議が続きしました。日・朝の近現代の歴史に踏みこんでの論議になると、発言は少なくほとんどが押し黙ったまま。その先が続かない。消化不良の雰囲気が続きました。結論が得られないまま先送りされるの

です。年度末に近づくとも決まって「卒業認定」の会議が開かれます。担任から「卒業予定者」のリストが示されます。

私の担当の「基礎組」でも入学後三カ年を経た者はリストに入るのです。家庭の事情で卒業を希望する者もたまにいますがほとんどが留年を希望します。出席情況、学力、本人の意思、担任の意見など生徒との懇談の様子などを学級担任から説明し、卒業予定者の認定作業がすすめられるのです。この時期になると「卒業認定」にかかわつてのオモニたちとのぶつかりが激しくなるのです。

・何を学ぶか何を教えるか

↳ 「読本日本語」の作成へ

もうひとつ難しい課題がありました。入学式を終え、授業が始まってひと月ぐらいたったころ日本語の授業をめぐつてオモニたちとぶつかりました。日本語の授業の最中です。「先生、プリントばかりで勉強せんと、教科書で教えてください」。他のクラスと同じように私らも教科書がほしい」オモニたちの内面にたぎっている勉強への思いは、時と

して、担任にさまざまな形でぶつけられるのです。教材のこと、授業の進め方のこと、勉強したい科目の時間数のこと、クラス替えのこと。実にいっぱいあります。教師が工夫すれば解決のこともありますが、中学校教育という法やシステムにかかわるたいへん解決のむずかしい要求も出てくるのです。

オモニの大半がこれまでに学校で学んだ体験がない、いわゆる不就学の人たちである。夜間中学校とはいっても、夜間小学校と言ったほうがまだ実態に近いような実情なのです。

教科書がほしいというオモニたちの声に対して、私には私なりの、教科書を使わない理由がありました。オモニたちが、就学体験を持つておらず、「ひらがな」の学習から勉強を始めるといっても、小学校の教科書に盛り込まれた内容は当然、小学校の学齢に合わせて編集されたものです。何十年と生活をくぐったオモニたちに合うはずがありません。そういうわけで私は、オモニたちの生活に深く結びついた、そしてそれが現在の日常生活に役立つ内容でありた

いと考えました。また、オモニたちに、どうして今、夜間中学で学ぶのか、学齢のところにどうして学ぶことができなかったのか―など自らの置かれている社会的立場を学びを通して考えてほしいと願ったからです。

「オモニたちの勉強の力や、生活をしてきたいろいろな体験を考えながら、教える中身を考えてプリントにしてるのですよ」

「：私ら、小さいころから学校は教科書教えてくれるところや思ってたし、いつかそれで勉強したいと夢みてたんだよ。やっぱり教科書で教えてほしい」

「オモニたちがそう思う気持ちはわかるけど…。小学校の教科書では中に書いてあることがオモニたちに合わないのです」

「それは先生の勝手な理屈でしょう。他の先生は小学校の教科書使って教えてはる。そのほうが漢字も順番に覚えられるし、どれだけ進んだかもようわかる…」

こういうオモニたちの声をどのように生かして授業の内容を工夫するか、私の課題はつきることがありませんでした。

オモニたちの言い分は理解できることもあるし、平行線で折り合いのつかないまま時間が過ぎることもあります。

こんなやりとりもありました。

「先生、文章を読んでどう考えたとか、感想を言うてごらんとか、短い文を書いてくださいとか、そんな勉強よりな、私ら、むずかしい漢字読んだり、書いたりする時間をいっぱいってほしい。字を覚えるために勉強しているのやから…。もっともっと漢字の読み書きの時間をようけとってほしい」

「オモニたちの気持ちはよくわかってるけどな。漢字の読み方を覚えたり、書き方を覚えたりする時間も大切やけど、その文章を書いた人がどんな気持ちでそれを書いたのか、それをわかることも大事な勉強ですよ。一つひとつの字の読み書きができて、それだけでは力にならないし、覚えることもむずかしいんですよ。自分の思ったことを文に書く時、どんな漢字を使えばいいのか、短い文を書くことで練習しないと力にならん。だから、いろいろな勉強が必要なんや」

「それでも…。肝心の『字』を覚えへんかったら読まれへんでしよう。書く練習をもっともっとしてくれんと覚えられへんから…」

「では、もう少しだけ漢字の読み書き練習の時間を多くするようにしましょう。それでいいですね」

このようなオモニ・ハルモニたちの思いに応えるために私は近畿夜間中学連絡協議会(近夜中協)(註7)の教師たちと力を合わせ、夜間中学の生徒さん向けの「日本語」の読本作成を思い立ちました。この思いを自らの学校で提案したんですが、多くの教師たちの反対にあって実現をみるのに時間がかかりました。

「夜間中学生のための教科書をつくるなんて！読本の作成なんか、そんな無理や。予算も、私たちの力量も。それに行政がそんなん認めるわけないよ」。

夜間中学は法の上では「中学校の二部」(夜間学級)として認められているにすぎない。夜間中学生の、〈実態に合った教育の内容を！〉との稲富さんの主張も分かるけれど、限界がある。教委に指摘されるのは明らかだ。「近夜中協」

でも合意されるわけがない」。こんな反対意見の壁に阻まれました。

私は〈夜間中学の生徒には義務教育さえ受けることができなかった背景がある。この歴史的背景を踏まえて生徒さんのニーズや、思いに応えることが夜間中学の使命ではないか。〉—このような趣旨の考えを披歴して夜間中学生の「読本」の必要性を訴えました。紆余曲折を経て「近夜中協」に設けた教材作成委員会の自主的な活動として、自主教材の作成をすすめるということになって決着しました。何冊かの「読本日本語」が誕生しました。このように、中学校に関する法制、夜間中学教職員としての勤務態様、労働条件等の視点からの反対意見の壁に阻まれて生徒のニーズ、思いに寄り添う活動は教師集団の共通理解に深まらなかったのが当時の夜間中学の様子です。

ようやく「生徒さんたちのニーズ、思いに寄り添う」実践とは何か—論議する雰囲気醸成されてきました。オモ二たちの「教科書で教えてほしい」と迫る思い、訴えの背景には渡日後の、言葉では言い尽くせない生活があったの

です。朝鮮人社会にも「女に学問はいらん」との封建社会にみられた考えが根強くあったようです。植民地支配後渡日した多くの朝鮮人は、建前としては日本の学校に就学することになっていたが生活に追われ、義務教育すら受けられない人々が多かったのです。

8 人権教育運動の胎動と私

(1) 差別越境にほおかぶりして

…それが民主教育か？解放運動の問いかけ

一九六〇年代から現在にかけて、日本社会、とりわけ、関西地方を中心に人権保障の考え方が浸透していききました。先鞭をつけたのは部落解放運動でした。

一九六五年の同和对策特別措置法の成立以降全国に、とりわけ、関西地方に同和对策事業や同和教育がひろがっていききました。「先生たちは、口を開けば民主教育というけれど、差別越境問題にほおかぶりをしているような教育が果たして民主教育と言えますか？」大阪市内の有名進学校は、府下周辺の地域から越境入学した生徒であふれている。それ

にひきかえ、地域の学校はどうですか。被差別部落のある地域の学校の進学率は平均よりはるかに低く、学校の設備もたいへん悪い。そういう状況の中で真に民主的な教育が保障されるだろうか。部落差別をこのような形で温存している先生たちの言う民主教育は問題である」——このような趣旨の部落解放同盟からの告発からはじまりました。この告発は教育界を揺るがせました。

教育界への追及は、教師の仕事の質、自らの労働のなかみを見直すことを迫り、目の前の子どものおかれている状況を歴史的・社会的背景を視野に入れて取り組む運動と実践をつくりだすきっかけとなりました。教育委員会も、教職員組合も、そして教育現場も一様に緊張したのです。越境問題は、その実態は知られていたし、座視していたのも事実でした。

城陽中学校でも、それまですすめてきた、一人ひとりの生徒の潜在的な能力を最大限に伸ばすことを目指した「促進学級」を軸とした教育実践をこの時点で同和教育の視点から検証することになりました。城陽中学校校下でも差別

越境の実態はありました。

「本校の校下の子どもたちの越境問題」に教師集団として何か行動を起こしたか、「部落問題をどういうふうに教えてきたか」——それまでの城陽中学校のとりくみを検証していく作業が始まりました。これまでの実践の検証から「人権問題」をどの学級も共通の課題とする学年の実践が始まったのです。それまでの城陽中学校では、部落問題をはじめ、差別問題について目的意識的な人権教育に取り組んでいなかったことが明らかになりました。

書物や映画、観劇を通しての部落差別や障害者差別などの学校全体の学習が続きました。学習によって差別問題は観念的には理解ができました。さて、どう教えるか、実践的課題としてとりくむにはどうすればよいか、実践の内容・方法が分からなく、手探りでとりくむしかなく、とまどいを感じていました。「生徒とともに考えながら歩もう」——こんな合意のもとに、社会科学を中心とした教科学習、学級・学年集団づくりの核として「人権問題学習」を位置づけ、一歩を踏み出したのです。このころになってようやく私

は前任校、難波中学校で長欠のまま放置した杉本一郎を初め被差別部落の子どもたちが学習や進路の妨げになっている部落差別の問題に向き合うようになったのでした。

(2) 実践が運動へ、運動がさらなる実践へ

・教室実践が進路保障の教育運動へ

四十余年の長い教員生活で、いくつかの職場を体験しました。それぞれの職場で、今でも鮮明に蘇る出来事がありました。また、それぞれの職場の実践や、運動を共に進める中で作られた深い絆を紡いだ友人も、志を共有できる教育運動の同行者もできました。東大阪市の林さんは教職員組合運動に人権教育運動の重要さを、岡野さんは考える会大阪」の中心的存在として現在も教育運動の広がり力を尽くしています。西尾さんは東大阪市の長栄中学夜間中学でオモニ・ハルモニの学びを自らの手で作りあげる運動へ発展させました。吹田市や摂津市でも足立さん山本さん、摂津市では石村さん石川さん藤田さんたちの活躍がいまに引き継がれています。人権教育、とりわけ在日朝鮮人の子

どもの民族的自立のための教育に腐心したのです。民族学級、夏期学校、集いなどのとりくみです。

差別越境を放置し、温存する教育が民主教育か？——こう部落解放運動が教育界を告発した一九六〇年代、人権教育運動は大阪府内の多くの地域に民主教育の内実を告発したのです。学校や地域、教職員組合、府市教育委員会のすべてがそれまでの教育の問い直す取り組み——同和教育、在日朝鮮人教育、障害者教育等の実践がが大阪府の多くの地域で始まりました。

その頃私は城陽中学校で、「選択コース別学級（促進学級）」（註8）——促進学級の学級担任として全力を傾けていました。この実践の成果は実践を支えた学校長の識見とリーダーシップ、何よりも教職員たちの集団としての実践に臨む姿勢が醸成できたことでした。この体験が教育実践であれ、教育運動であれ、私の教師としての生き方につながったと思います。

・学校長のリーダーシップ

赴任した一九六五年当時、城陽中の生徒の「荒れ」はかなりのものでした。それでも以前にくらべれば落ち着いてきたところだということだったのです。長年、城陽中に勤めていた教師は、「校内は荒廃しきっている」と言い、教室は授業についていけない子どもたちが、怠学、授業妨害、暴力にあけくれ、生活指導担当の教師はほとんど毎日のように警察通いをするような状況だったのです。

このような生徒たちの荒れた状態に対して、教師たちはそのときそのときの、生活指導「対策」に追われ、授業のなかみや学級集団づくりの内容（方法）を見直すような雰囲気はなかったそうです。ここでも「教師の権利」がなによりも優先されていたと言います。

この荒れた学校に、一九六〇（昭和三十五）年、尾林宗雄（故人）さんが学校長として高槻市教委から赴任して来たのです。尾林校長との出会いも「学校長の職務」、「教師集団づくり」を考える大きな示唆を与えられました。彼は校長として、教育的識見を遺憾なく発揮したように思います。

荒れに荒れている城陽中の教師たちに「促進学級」のとりくみを提案し、その実践を教師集団が支えるという、教師の集団づくりの先頭に立った。城陽中の「促進学級」のとりくみは、学校長尾林宗雄の、教師たちを引きつける強力なリーダーシップによって成果をあげることができたと言っても過言ではありません。

城陽中学校では一九五八（昭和三十三年）、一九六二（昭和三十一年）年に改訂された学習指導要領に沿って、「促進学級」の実践に歩みだしたのです。「選択コース別学級」（註8）という呼び方をした教育体制です。簡潔に言うと、第三学年の学級編成で、選択教科を軸としながら必修教科も含めて「促進学級」を編成するということかなり思いきった教育のシステムを採り入れたのです。簡単に言うと第三学年は、促進学級二学級と、他の十学級は普通（自然）学級として編成し、カリキュラムや学習内容を、子どもの実態に対応した授業や活動をすすめる取り組みを始めたのでした。当時の城陽中学校は、荒れに荒れた生徒たちにどう対応するか困難な課題を突き付けていたのです。教師たちは

日々の授業をどのように成立させるか、荒れた学校の、せつぱつまった情況に迫られていたようです。こんな情況のなかからの出発だったのです。尾林という校長のかなり強力なリーダーシップによる実験的な試行錯誤の実践であったと言えるでしょう。選択教科を軸として区分した学級編成であったが結果的には俗に言う「進学組」・「就職組」の実態をもった取り組みでした。（当時、城陽中の高校進学率は七十五％程度）取りくみの出発当初は促進学級四学級を編成して取り組んでみたのですが、校長や教師たちの思考は見事にうちくだかれ、荒れがいつそう強まり学級崩壊に近い状態になったということでした。促進学級に集まった生徒たちは、小学校時代からずっと学業不振に対してなんのてだでもなく放置されていたのです。たとえ、個人的な教師の特別な取り組みがあつたとしても、組織的な取り組みではなく、すでにどうにもならないほどの劣等感にあって、人間性そのものに歪みをきたしている兆しが見えていたのです。

当時は学級定員が四十五人の編成だったし、学級経営も

授業も、教師個々の力量にまつところが多かったのです。

生徒の実態に合わせた教育内容を編成して授業をすすめるといううたい文句も、かけ声だけのものに終わっていました。建前は「促進学級」の子どもたちにより行き届いた配慮のある授業や教育活動をすすめることと謳いながら、学級定員等、教育条件に何の配慮もなく進める実践は崩壊するのは当然の結果です。学習についていけない子たちが促進学級に入つたからといって、問題が即座に解決するはずもなかったのです。当時の担任の述懐によれば、促進学級の生徒たちは、教師のねがいとはうらはらに、学習への意欲はおろか、学校生活そのものに不適応の姿を強め、学級担任の懸命の努力にも心を開かず、学級は崩壊していったようです。教職員の間には、無力感が漂い促進学級の取り組みは差別教育ではないか？—この実践を取りやめるべきだとの声が高まっていたそうです。

・興味深い職員会議録

〈促進学級の試みは学習意欲を高めるどころか、劣等感を

より強め、人間性をより歪めることにつながっている。促進学級の試みはやめるべきだ、という意見が職員会議の大勢を占めていました。促進学級の設置を提案し、先頭に立った校長は四面楚歌の観があつたのです。このような教職員員の雰囲気の中でも尾林校長はこのように切り返しているんです。

「今、まさに、われわれは教師集団としての実践力を問われている。なぜ、促進学級の実践を始めたのか？ 岐路に立った今こそ、原則に立ち戻ることが大切だ。学業不振の子どもが、勉強がわかるようになりたい。」とねがつている。そのねがいに応えるための実践だったのではないか。廃止することは簡単だ。そのまゑに、この実践がなぜ成果をあげられないのか。そのことを検証することが、この後の城陽中の教育につながるのではないか。教える内容・方法がどうだったのか、自主教材で分かりやすくというのが実際はどうだったのか、その検証をみんなに求めたい」

尾林校長の言葉は、教師たちを逃げるのが許されないところへ追いこんでいくものでした。何度も何度も討議さ

れ、結局、促進学級の実践は引き続いてすすめることになりました。これまでの促進学級のとりくみの徹底した検証がすすめられました。促進学級の授業と学級集団づくりという視点だけでなく、促進学級の集団づくりはもろろんのこと、普通学級の学級集団づくりや、授業研究にも眼を向けることの大切さに気づいていったようです。やがて、第三学年の学級編成の問題にとどまらず、「促進学級」の考え方と、その取り組み方を学校全体にどう位置づけるかが課題となりました。私は一九六五（昭和四十）年、このような実践を始めた城陽中学に、教師集団の一員として現場復帰したのです。

・一人ひとりの潜在能力をどうひきだすか

学級崩壊という荒れた状況になった「促進学級」のとりくみは、私が赴任した一九六五年も、さまざまな改善を加えて継続されていました。

学級定員を大幅に減らし、三十余人に抑え、入級を希望する子どもやその保護者と、促進学級のとりくみの考え方や

入級後の教育の内容や進め方について徹底して話し合いを持ちました。また、入級についての話し合いは学年末に限らないで随時行うことにしました。PTAの会合や、地域の様々な団体との協議の場でも学校長が「促進学級」の意義や、とりくみの内容(方法)についての啓発活動を積極的にすすめました。促進学級の編成について、校長は自ら先頭にたち、全校の生徒集会で機会あるたびに語り、「促進学級」の理念や取り組みについて理解を求め、その浸透を図った。教職員が一体になって生徒会や学級活動の場をとおして、学校体制づくりに努めたのです。

校長という存在は学校管理、とりわけ当時は教職員の管理強化のための存在とみなされがちでしたが、尾林校長はひと味もふた味も違っていた。四十年の教師生活のなかで、いろんな意味で触発された管理職でした。

「あなたがたは教師として、教育内容・方法に最大限努力してほしい。そのための教育条件の整備は、まさにわたしの仕事である。任せてほしい」

彼は機会あるごとに、このように教員に迫った。そして

当時、大阪市の他の中学校では例をみない、一学級三十名の促進学級のとりくみができたのはこの学校長の存在があったればこそである。尾林校長の考え方はこのような発言にも現れていました。

「一人ひとりの子どもの潜在的な可能性を伸ばすことが教育だ」とわたしたちは促進学級の理念をこのように親や子どもに説いてきた。具体的な教育活動として何をどのように展開しているのか、教科指導ではどうなのか、学級活動ではどうなのか、クラブ活動ではどうなのか。実践活動の課題が具体的に明らかにするような討論をすすめるべきではないか」

「促進学級に入級した生徒たちは、わたしを含む教師集団に信頼を寄せて入級してきた。この生徒たちは、自らの能力を精いっぱい伸ばそうと期待をもっている。この期待に応えるのは教師の責務だ。どうすればこの期待に応えられるのか、わたしたちが問われているのだ」

職員会議での彼の発言は的確で、教師たちを逃げさせない、気迫に満ちたものでした。その迫り方は教師たちを圧

倒しました。逃げようのない迫り方に、反発し、学校を去って行った教師もいました。彼はよくこう言いました。

「意見がかみ合わなくて結論が出ないときは『原則にたしかえれ』今、すすめようとしていることは原則に照らしてどうなのか、考えてみよう。教育実践上の討議は『子どもにとってどうなのか』を軸に討議をすすめてほしい」

このような迫り方は教師一人ひとりの内面に反発や反抗、服従という葛藤を生み出しながら、教師である以上だれもが本来向きあっていたいかなければならない「授業」や「学級集団づくり」などの教師の仕事に真っ向から向き合う教師を育てたのです。促進学級のとりくみの理念を共有し、支えあう「教師集団」に向かわせる転機となりました。校長の教育的識見やリーダーシップの重要さを印象深く学んだように思います。尾林校長は促進学級の実践を教師一人ひとりの取り組みにとどまるのではなく、「教師集団」としての取り組みの視点から見直すことを求めたのです。「将来、校長になった時は積み重ねた教育実践に裏打ちされた識見をもち、尾林校長のようにリーダーシップを発揮して学校運営

をしよう」と思いました。

9 脳裏に刻まれた子どもたちとの出会い

(1) 難波中学で―自分に重ねた杉本一郎への向き合い

一九五六年、難波中学へ新任教師として赴任した私は、負いたって授業に、クラブ活動にまた、担当した校務に全力をぶつけていました。担任となったクラスに 杉本一郎という、学校を休みがちな生徒がいました。たまに顔を見せても口数も少なく、友だちや教師に声をかけられたときだけ、つくろい笑いを浮かべる気力のない生徒でした。気がかりな生徒のひとりでした。登校したおりをつかまえて、あれこれと話しかけてみました。休む理由、家族のこと、友人のことなど、とりとめのない話でしたが、ともかく杉本の心を開かせたい：そんな思いでした。近づこうとどんなに努めても、杉本は決して心を開いていない―なぜこうなのか、気がかりで気がかりで仕方がない、そんな思いでした。昼食はたいてい教室で子どもたちといっしょにとっていたが、ある日ふと、杉本がいないことに気がつきました。それから注意して見て

いると、昼食時にはたいい教室にいない。たまに教室にいてもまわりの友だちの談笑のなかにいることはなく、校内で販売しているパンをひとり、かじっているのです。

ある日の昼食時、校庭の片隅で何をするでもなくたたずんでいる杉本に声をかけました。

「どうした、食事しないのか?……」

こんなことから話しかけたが、いつものようになかなか口を開かないのです。

やがて、ポツリと、「弁当忘れたんや」と言いました。思っていたとおりでした。

きつとパンを買わないで昼食をしんぼうしたのにちがいない。

その日は、売店からパンを買ってきて、「先生もこれからや、お前もひとつ食べんか」

こんな会話を交わしただけでこの日は何も触れませんでした。それ以上踏み込んで聞けなかったのです。家庭の貧困が彼の生活に暗い陰を落としていることは痛いほど伝わってくるんです。杉本のそんな姿に私自らを重ねていました。

何度かの家庭訪問で彼のおかれている状況はよくわかりました。障害をもった妹と、弟が二人いました。父は数年ほど前から家を出てどこかへ行ってしまったという。俗にいう蒸発です。今は、母が靴の型抜きをする工場に働きに出ていて、子どもたちの面倒は杉本がみているのです。家での杉本は、学校での姿からは想像もできないほど、生き生きと、家事のこと、妹たちの身のまわりのことをときばきやつてのけていました。「たいへんだね」と声をかけると、「しかたないんや、お母ちゃんは朝早ようからおそうまで働いているんやから……」と答える。テキパキと立ち働くその姿にわたしはなにやらほっと救われたような気持ちになつて帰るのです。

そうこうするうちに彼は少し私に打ちとけた様子を見せるようになりました。それでも彼は家を出た父のこと、妹たちのめんどろをみるしんどさ、学校に休まず通えない不満など、愚痴めいたことはひとことも言いませんでした。こんな杉本にわたしはなんとか一日でも多く登校してほしいとねがっていました。そのために学校での勉強のこと、行事の連

絡、学級通信など、友だちを通じてこまめに届いたり、担任としての努力を続けました。二年の夏休みが終わったところから、杉本は学校にばったり姿を見せなくなりました。私が一番恐れていたことです。何度、家庭訪問しても彼はわたしに会おうとしませんでした。母親と話しこんで何とか登校させるように説得しました。母親も、「中学校だけはがんばってほしいと話しているんですが…」と嘆くばかりなのです。

半月ばかり通い続けたでしょうか、ようやく彼はわたしの前に現れました。

・土師先生のことを頭をよぎった

「先生に今の僕の気持ちわかるはずがない。もう二度と家に来ないでくれ。学校なんかぼくに必要ない。ぼくが働いてお母ちゃんが妹のめんどろみれるようにしてやりたいんや。先生、ほっといてくれ。こんな意味の言葉を激しくわたしにぶつけるのです。わたしはむらむらっと腹が立ちました。とっさに杉本のほっぺたに手がでていた。一瞬、彼はたじろいでわたしをじっと見つめていました。

「甘ったれるな。お前が今苦しいのはわかるが、学校やめてどうなるねん、働いてどうなるねん。お母ちゃんだつて家にいて妹のめんどろみりたいと思う気持ちを我慢してがんばってるやないか。勉強せんと、今働いたかて、今はちょっと助かるかもしれないがこの先、どうなるねん…」「貧乏なんかに負けるな、がんばれ、今苦しいところをくぐったら、かならずお前の道は開けるのだから…」

学業に行きづまっていた高校一年のころの自分自身の過去が蘇ったのです。イカ焼きの屋台を引いたアルバイトと学業の両立に精いっぱい努めていましたが、体力、気力も限界でした。学校の帰り、イカ焼きのアルバイト。このしんどさに耐えることができず、担任の土師先生に退学届を届けたことがあります。普段は温厚な先生が私の投げやりな態度に激昂し、ほっぺたをひっぱたかれたのです。忘れもしません。そんなやりとりの後、事情を聞いてくれました。その後何回かの相談で勉学を続けることになりました。自暴自棄になっていた私はなんとか立ち直ることができました。その頃のことを蘇ったのです。

私自身の学業の中で味わった「貧乏の苦しさ、みじめさ」

を杉本の姿に重ねていたんですね。杉本の気持ちが届くほどよくわかりました。彼に負けてほしくなかった。自分がくぐりきることができたのだから、おまえも甘ったれるな。——こんな気もちが彼に接する態度になっていたのです。

精一杯誠実に子どもたちに寄り添っているとの思い込みがありました。

しかし、このころのわたしは杉本やその親があえていえる貧困の背景にある部落差別についての確かな認識はなく、それを踏まえて子どもたちに向き合う教師ではなかったように思います。今にして、しみじみとそう思うのです。

・学校徴集金をめぐって／貧困の背景

新任教師としてはじめて担任したクラスに、四く五人の貧困な家庭の子どもがいました。「荒れ」や「非行」に走る子どもいました。家庭訪問をいやがる子どももありました。いやがるのを押し切って訪問してみると、粗末なバラック建ての部屋におおぜいの家族が住んでいました。子どもの

勉強机とはいえば、ミカンの木箱を横にして使っている様子です。布団を出した押し入れを子どもの寝床にする家庭もあったのです。国民的課題として取りくまれた、「被差別部落」の当時の姿はこんな風でした。

行商や、零細な皮革業の職人や、鉄屑商など、不安定な職業に就く被差別部落の人々の生活は、今では考えられないような悲惨な状況だったんですね。バラック建ての小屋のような住居、住居をぬって細い道が入り組む。共同のトイレ、炊事場。はじめての家庭訪問で思わず息を飲みました。当時、そのような環境におかれた子どもたちがさまざまな問題を教師たちにつきつけていました。その子どもたちが具体的な形でわたしたちにつき出してくる「低学力」や、「非行」の問題が当時、私は、貧困がもたらす生活指導の課題と捉えていたんです。部落差別の結果に深く関わっている問題だと捉える「確かな眼」を持つてはいなかったのです。

「先生、わすれました！」

「また忘れたんか、しゃあないな。（しかたないなあ）今

月はきょうが締切りやから、来月でもええからな。おかあちゃんにそういうとき……」

学校徴集金の納入袋を目の前にして、いつもこういう会話を交わした何人かの生徒がいた。当時は、学校を維持運営する費用の多くが保護者の私費負担でした。学校に納める納入金は学級担任が集めて事務室にもっていくシステムになっていたんです。月末になると、担任がみんなに連絡し、一定期日に持つて来させるのです。持つて来ない生徒はいつも決まっていました。

「忘れしました」の言葉のなかに「納められないのです」という訴えがこめられていることがわかるだけの感性は備わっていたのでしょう、それ以上、わたしは追及することはありませんでした。むしろ、「心配するな、納められるときでいいよ。そうお母さんにいうとき」そう言つて、事務室にはなんとかごまかしていました。しかし、何ヶ月か滞納になると事務室から何度も督促の連絡があるのです。板挟みになって給料袋の一部を割いてつじつまを合わせることもありました。子どもの貧困の背景を捉える確かな眼を持

ちたいと願いました。

・「子どもに寄り添う」ということ

難波中時代の教師としてのわたしの姿勢に一貫していたのは、ただ、まじめに、誠実に、生徒さんの気持ちにそって教育をすすめるということでした。教師として生徒に向き合う姿勢は四十年間変わらなかったけれど、ただ、当時は自覚できなかったのだが、結局のところ、せまい、貧弱な自己の体験を物差しにして生徒指導にあたっていたにすぎなかったのです。当時の教え子たち、とりわけ、被差別部落の生徒たちの背負っていた問題が、このような姿勢では見えるはずがないし、杉本が長欠に追い込まれていった、部落差別のしくみや実態を受けとめることができなかったのです。月給袋の一部をさいて一時しのぎができたとしても、結局のところ自分のひとりよがりにならず、なんの解決にもならないのは明らかでした。そのことに気づいたとしても、これ以上は教師の仕事ではない、どうしようもないんだ、政治の力で解決していく以外にどうしようも

ないんだ、ということ自分を言い聞かせるようにして、

問題の本質から目をそらしてしまふことになっていました。

教師はよく「子どもの立場から」とか「子どもの目線」

からとか、「子どもに寄り添って」とかの言葉を口にする。

けれども、子どもの悩みや、痛み、願いや訴えを受けとめ

ようとすると、「誠実さ」「善意」「同情・共感」だけでは

真にそれを受けとめることはできません。子どもをとりま

く現実―家族関係、貧困など経済的状況、差別・抑圧など

社会的立場―を捉える教師の「確かな眼（認識能力）」や感

性が求められるのだと思います。当時のわたしにはそれが

欠けていたのです。

・現実認識を阻んだわたしの内なるもの

難波中学時代の八年間、なぜ、部落問題を受けとめるこ

とができなかったのか。わたし自身が受けてきた戦中・戦

後の公教育が問われることはいまでもありません。その

こととは別に、わたし自身の生き方に問題の本質があるよ

うに思われます。杉本や、何人かの部落の子どもたちの姿

の中に、かつて貧乏で苦しんだ自分の姿を重ね、月給袋か

ら何のためらいもなく学校徴集金を納めていた自分の行動

は理屈めきのものでした。けれど、「なぜ、貧乏なのか、貧

乏でいなければならないのか」「何が貧乏にさせているのか」

ということに眼を向けていく、社会を確かな目で認識する

能力や、生活態度を自己の内にたくわえていなかったのだ

でしょう。わたし自身が、抑圧や差別される社会のしくみの

なかに生きた、父母や祖父母たちシマンチュにつながるひ

とりであり、そのことを自覚して生きる―差別や抑圧のし

くみやシステムをつくってきたものに眼を向け、それに立

ち向かう―そういう生き方に気づかないまま、教職に就き、

安定した収入を得、人並みの家庭を築いていくうちに、現

実社会を見る眼をくもらせてきた、とも言えるのしょう。

(2) 金信子(キムシンジャ)の訴え

―進路保障をめざした運動へ

一九六八年十月、城陽中学校の三年生の生徒集会のこと

でした。ひとりの女子生徒がまなじりを決して、立ち上が

ったのです。在日韓国人金信子（キムシンジャ）だった。その姿に他の生徒も教師も固唾をのんでみんな聞き入りました。

当時、わたしたちは三年間、生徒集団づくりを中心に据えた実践に取り組んでいました。その学年経営の柱は、自治意識や自治能力を育てようとすることにありました。学級活動を軸として、テーマ討論や実践活動に取りくんだ、生徒集団づくりのとりくみでした。部落問題を学習するための集中授業、観劇を通して部落問題の討論、クラスや学校生活のなかでの差別問題から、社会のなかにみられる「障害」者への差別など、学習は多彩でした。同一テーマを全学級でとりあげ、学級の討論を学年の討論で深めた。学年の討論はテーマ討論のまとめの場でもあったんです。その日は「わたしにとって三年間の人権問題学習はどんな意味を持っているか」をテーマとした人権問題学習のまとめの場でした。

「今日はどうしてもみんなに聞いてもらいたいことがあるねん。学年主任の稲富先生には答えてほしいことがある」。

シンジャはこう切り出しました。

「この三年間、わたしたちは、クラスや学校の中での生活のいろいろな問題や、社会の中の差別の問題などをみんな考えてきました。知らなかったことも勉強できてたいへんよかったです。ただ、どうしても納得いかないことがあるのです。早くから言いたい思っていたけれど、今日になってしもうた」

キムシンジャ
金信子は発言を続けました。

「わたしは朝鮮人です。城陽中学校はわたしと同じ朝鮮人がたくさんいます。日本人の友だちとはふだん仲良く勉強も運動もいっしょにやっています。だけど喧嘩になると日本人はすぐ、『チョーセン』とか、『朝鮮人のくせに』とか、私たちをバカにする。この三年間で何度もあった。『差別』だと問題にしたけど、その時の話し合いに日本人の友達は黙ってしもうた。日本人は黙ってしもうて発言するのは朝鮮人ばかり。だから、話し合いは中途半端で終わりました。だれか言うて！あれ、なんでやったん？他の問題はたいへん活発に討論ができたのに…。みんな黙ってしも

うた…、あれ、なんでやったん？ 誰か答えてほしい。」シンジャは、大きな声ではないがはっきりした口調で淡々と続けました。「主任の稲富先生に聞きたいことがあるんです。先生はいつもわたしたちに差別の問題を知るのは、頭の中で理解するだけではだめです。差別があったら、それに立ち向かう行動ができなければ知ったことにはならない」と、そう教えてきました。わたしはいま、進学のことについていへん悩んでいます。父や母と相談すると、『おまえは公立高校を受験するんや。私立高校は受けたらあかん』というんや。『どうして？』とたずねても何も答えてくれへん。兄ちゃんや姉ちゃんに何べんも聞いてやつとわかった。私立高校は、朝鮮人とわかると受けさせてくれへんらしい。受けられても、合格の点数に差をつける学校があるらしい。また、合格しても入学金を二倍も三倍も出さんと入学させてくれない学校もあるんやて…先生！ それ本当ですか。先生は長い間、中学校の先生してたんやから、知ってるでしょ。」

「……………」

「そういうことって差別とちがうんですか？ これは朝鮮人のわたしにとって一番大きな差別の問題です。どうして、一番大きな差別の問題をわたしたちに教えてくれなかったんですか。どうしてですか？」

わたしをなじるような発言が続きました。集会はそれまでの「活発で積極的な」空気が一転して、重苦しい雰囲気におおわれました。わたしはもちろん、学年教師集団のだけ一人、彼女の追及に答えることはできなかったのです。彼女のひと言ひと言を聞きながら、わたしはただ呆然と立ちつくすだけでした。

当時、進学指導のために、中学三年担当の教師たちは私立高校を訪ねて自校からの受験希望者について相談するのはごくあたりまえのことでした。「事前協議」と称して、これは今でもおこなわれているのではないのでしょうか。前年度の合格者の得点などを参考に話し合いながら、受験者の調整をすすめるわけです。輪切りの進学体制に教師自らが手を貸さないわけにいかない状況がその悲劇をいっそう深刻なものにしていたのです。

「この成績では、受験してもらってもまず無理ですな」、「家庭の経済状況はどうですか」、「いい成績の生徒もたくさん受験させますから、この生徒一人ぐらいはなんとか無理をお願いしますよ」

「ところで、このなかに外国籍の生徒はいませんか。うちは原則として外国籍の生徒は入学を許可しませんので…」

「実は、この生徒は韓国籍の生徒ですが…。家庭は教育熱心だし、学校に非常に協力的ですよ。性格もたいへんよい子だし、ぜひ受験したいと言ってるのですが…。なんとか受験を認めてくださいよ。お願いします。」

「困りましたな。原則としてお断りしてるのですがね…」

「そのところを何とかお願いしますよ。何か条件があれば言っていたければ親に伝えておきますから…」

「そうですね、いい生徒ならね。そのかわりもう一人ぐらい、成績の優秀な日本人の生徒を受験させてください。そうすれば考慮しましょう」

こんな商品取引のようなやりとりが、当時の大阪の教育界で「事前協議」と称しておこなわれ、それが保護者（親）

や、本人への進学指導の資料として使われていました。これは当時、大阪に限ったことではなく、全国的にもこうしたやりとりがおこなわれていたようです。

シンジャの追及はまさにそのような教育界の差別的な体質を告発するものであり、その一つひとつがごく当たり前のこととしてまかり通っていたのです。朝鮮人生徒はこのような差別に憤りながらも、半ば諦めにも似た気持ちで、自らの進学については公立高校か、学力的に無理な場合は定時制高校か、就職を希望してくるのが一般的な姿でした。

この差別に気づかない教師はだれもいない。けれどもこの差別に対する問題提起や差別撤廃への行動は、当時、どこからも起こされたことはありませんでした。シンジャの訴えはわたしを追いつめました。

重苦しい雰囲気の学年集会でした。わたしは、シンジャが告発した事実の存在を認めること、そしてみんなが卒業の日を迎えるまでに、教師集団の問題として取り組むことを約束することで、その場をとりつくろう以外になかったのです。「差別事象や、事件に遭遇したとき、どのように行

動できるか、そのことが重要だ」——こう教えてきたわたしは、具体的な差別事象にどう立ち向かうか、まさに迫られたわけです。学年の教師たちは何時間も、何日間も討議を重ねました。学年から職員会議にシンジャの訴えを議題としました。さらに、教職員組合（教組）の分会でも話し合われました。

「私立高校が朝鮮人生徒を差別的に扱っていることは許されないにしても、いま、われわれが問題提起をおこなってもどうにもならないのではないか」

「生徒と人権問題の学習を続けてきた結果として、いま、私立高校の入試差別の問題が生徒から告発されている。これにどう応えるかが問われているのです。各方面に問題提起しなければならぬ」

「行動を起こさなくては……とは思いますが、不安もある。城陽中だけの取り組みに終わって、私立高校側におかしな感情だけ残したのでは、本校生徒の進学に影響がでるのではないか」

「そんな悠長なことではだめだ。シンジャは現に今、悩ん

で訴えている。何らかの行動をおこなうては……」

「私立高校入試差別撤廃の行動を起こそう」という提案は、城陽中学の分会から大阪市教職員組合（市教組）へ、やがて当時の大阪教職員組合（大教組）の行動へと広がりをみせました。私立学校連盟（私学連盟）と大阪教職員組合との話し合いが数回にわたって重ねられました。私学連盟側は初め、入試に関しては「それぞれの学校の独自の問題であって立ち入れない」、「外国籍の者を日本人と区別して考えてもやむを得ない」などと、朝鮮人差別だとするわたしたちの追及を認めようとしませんでした。

しかし、中学校側から、事前協議の際の高校側の対応の具体的な事実が一つひとつ明らかにされるに及んで、朝鮮人差別であることを認めざるを得なくなったのでした。

一九六九年度の入試から、朝鮮人の受験について門戸を開放するという回答を引き出して、この運動は終息しました。わたしにとって「運動」に加わった最初の体験でした。シンジャの告発は教師集団を動かし、やがて、運動の起爆剤になりました。その結果として私立高校が朝鮮人の進学への

門戸を開放するという一定の成果を引き出しました。けれども、私立高校の入試差別の実態を知っていたのに、シンジャの追及を受けるその瞬間まで差別事象として告発できなかったし、むしろそれに手を貸していたという事実は解決したわけではありません。前任校、難波中学時代、水本を長欠にしながら、手をこまねいていた自分をどのように考えるか。当時私には、教科指導、生徒指導、教育課程のことなど、そのときに提起される教育界の課題に、精いっぱい対応し、人並み以上にがんばってきたという自負がありました。部落解放同盟の差別越境糾弾から始まった「民主教育」への問いかけについても、懸命に学習し、社会科の教師として精いっぱい努力してきたとの思いもありました。シンジャの追及は、そのようなわたしの思いや、自負を足もとから突き崩すものでした。

わたしが「民族的マイノリティ」の人権保障の教育運動にとりくむきっかけとなったのは、「差別と人権」をテーマとした城陽中学での集団づくりの実践の過程でのシンジャの訴えです。告発といえるでしょう。

難波中学校では被差別部落の杉本たち被差別部落の子どもや、城陽中学では金信子（キムシンジャ）たち朝鮮人と出会い、天王寺夜間中学で在日朝鮮人のオモニ、ハルモニに出会って被差別マイノリティの生活の実態を目の当たりにしました。しだいに、親や生徒たちが背負っている差別や貧困の問題に目を向ける教育運動へと生き方の向きに転機が訪れたのです。

教育委員会や学閥の教科研究や研修会、生活指導の研修会などに参加できず、差別事件の追及や、解決、運動の方向を探るシンポジウムや行政折衝が日常となりました。いきおい、学閥や、市教委、研究会から足が遠のき、深まっていた人々との関係は疎遠になりました。教育運動の新たな日常の教師生活が広がってきたのです。

(3) 天王寺夜間中学校で — 私の本名実践

・本名をめぐる金菊子（キムクツジャ）とのバトル
すでに一九八〇年代当時のシンポジウムや書物で何度か語ったことだが、日本社会・学校の朝鮮人の本名をめぐる

日本人の意識情況が映し出されているオモニとの語りが今も鮮明に思い出されます。夜間中学に移ってから既に六年を経た一九八〇年代初め、望んでいた校務分掌（職員の業務分担）の「主事」（註 9）の座に就きました。夜間中学の日常運営の要であり、入学希望者との面接も仕事の一端でした。ようやく私の思いを教師集団にこれまで以上に訴えることが出来ると考えたからです。また、なによりも、オモニたちに直接かわりを深めることが出来る役割と考えたからです。

一九七四年、大阪府教委は大阪「考える会」や、「大阪市外教」との折衝を機に「就学通知書」「指導要録」等公簿の外国人の氏名等の本名記載の原則を打ち出しました。「考える会」では運動の中心軸として「本名を呼び、名のる」運動をすすめていました。「考える会」のシンポジウムでは本名実践を軸に据えながら自らの現場の実態を語りあい、在籍する朝鮮人のこどもにどのように向き合うかを議論しました。私も天王寺夜間中学でのオモニたちに向きあった取り組みを語りました。

日本社会のグローバル化はすでに夜間中学に映し出されていきました。違った国籍、多様な民族の生徒たちが日本の言葉・生活習慣、文化を求めて入学を希望する情況がありました。こんな情況を「本名実践」につなげようと考えたのです。主事の立場を生かそうと思いました。入学希望者との面接時にいつも皆さんに、このように訴えました。

「この学校には一人ひとり事情はちがっていても、勉強しなければならぬ時期に戦争などのために勉強ができず、そのためにこれまでいろんな苦労した人たちが勉強しています。小さいころ勉強できなかった人、中国からの帰国した人、戦争の犠牲で祖国を離れなければならなかった人、植民地時代に日本に渡らなければならなかった人などが勉強しています。だから、民族や国籍の違う人たちの集まりです。そのちがいを尊重し合って仲良く勉強していきましょう。それで、名前もお互いに本名を名のっています。それぞれの民族を尊重し、民族文化を大切にしていきたいと思うからです。皆さんも学校の生活はすべて本名でお願いします」。

オモニたちの中には怪訝な顔つきをしながら聞いている人もいます。中には日本名で通学させてほしいと強く望むオモニもいましたが不満であつてもたいていは学校側の指導に従うことになるのです。

私はまず、座席の机に本名を書いた名札を張り付けることから取り組みを始めました。出席簿も、指導要録の氏名欄も本名で書く。担任になった基礎イ組はこれまで就学体験のない人たちの集まりです。私はもともととは社会科の教員だが結局、授業では「日本語」を担当することになりました。自主教材のプリント学習が中心で授業をすすめていました。金菊子（キムクツジヤ）も担任する生徒の一人です。添削するため書きあげたプリントを持ってくる。金山菊子と書いてある名前欄を金菊子と書きなおしてそれから添削して返すことにしていました。返すとき一瞬、クツジャオモニの顔がこわばっているのが感じられました。言葉にはならないけれど「なんでそんなことするんだ……」と言わんばかりです。次に出してくる一枚も、そして次の一枚も「金山菊子」と書かれている。黙って私はそれを書きなお

す。何度かそれを繰り返すうちにお互いに緊張が高まってきました。

夜間中学では二時間目の授業の後、牛乳とパンと、チーズなどの添加物の簡単な補食の時間があるのです。オモニたちと語り合い、談笑できる貴重な時間でした。この時間が私自身の学習の場でもあったのです。いつものように談笑していたときでした。菊子クツジャが緊張気味で口をきったのです。

「先生！ 聞こうと思うてたことやけど…、プリントに金山菊子って書いて出したら、なんでわざわざ金菊子と書きなおして返してくれるんですか？」 菊子が詰問するようにわたしに言葉を投げかけました。

「きたな…、予期していたことだったのですが一瞬たじろぎました。

「オモニの名前、そのように言うんでしょ。アボジやオモニがつけてくれた大事な名前を名のってほしいと考えて…ね」

「先生！ どこぞの世界に親のつけてくれた名前を忘れる

人がありますか？私が聞いているのはそんなことではないんです。何十年も私が日本で使ってきた名前を先生はなぜ書きなおして返すのか聞いてるんです」

「うんうん…、それはね、日本に住む在日の朝鮮人の多くが日本名を名のっているでしょ。私はそのわけを勉強してきました。戦争の前、オモニたちの国を植民地にしたことがあった。その時代に、名前は日本の名前にしろとか、朝鮮語を使ってはいかん—というように大変ひどいことを押し付けてきた。オモニたちにはオモニたち朝鮮民族の長い歴史と、言葉や生活の文化も発展してきた歴史を力づくで押しつけたのです。日本人にしてやると…。そんな間違ったことを強制したのです。戦争が終わってずいぶん長い年月がたっているのに日本の名前を名のっている人が多いことは、日本の社会が今も間違っているんだと思う。他の民族の人々の名前を日本人と同じようにして当たり前を考えているその間違いにまだ気が付いていない。その日本人の誤った考えを正しくしないといけないと思ってね。夜間中学で勉強している日本人が誤った考えに気づき、外国人

みんなも日本人も対等なお付き合いしていくようにしなければ…と、そんなふうに考えているのです。

「……」

「……」

「やっぱり先生はお坊ちゃんやなあ…」

「なんでや、どこがお坊ちゃんや？」——思わず気負いたって私は菊子クシジャに対していました。

「だってそうやないですか、先生は私たち韓国人がどんな思いで日本で生活してるか全然分かってないと思います。

私はもう息子に代をゆずって商売はしてへんけど…。息子は日本の商店のように看板出してるけど、先生の言うように本名が大事やいうて看板を本名で書いたらどうなります？今は日本人のお客さんも多く取引がありますが、朝鮮人とわかってても商売してくれませんか？先生責任もってくれるんですか」鋭く迫る語氣に一瞬、私はたじろぐ。

「うん、たしかにそうやな。オモニの言うてること先生にも分かる。だけどね、オモニ…」

「いやいや先生、もう少し私に言わして。私日本へ来ても

う五十年近くなるで。でもね、そんなに長いこと日本で生活しているのに、親が付けてくれた名前使わしてもらったことないで。子どもを学校に入れるときもな、区役所行つて手続きとるとき、誓約書書かされて、『日本の名前で書いて判を押せ』つて言われたし、銀行でお金借りる時もそうやった。アパート借りるとき、朝鮮人のわたしの名前言うたらどこも貸してくれへんかった。私らな、親の付けてくれた名前を誰も忘れた人ないで。日本人が朝鮮人の名前使わせへんようにしてるんやんか。先生みたいなこと言う人に出会ったことあらへん。あんまりええかつこなこと言わんといほしい。そやからお坊ちゃんて言うたんや』。激してポンポンと飛び出す言葉に私は耳を傾けるただけでしただ。

「そやなあ、オモニ。オモニの言うとおみや。日本の社会はまだまだ朝鮮人に対して差別してる。誤った考えや蔑視している人が多い。だから本名が名のれんということもそのとおりやな。けどね、私はそんな日本の社会をそのままにしておいていいとは思わない。誤った考えを正して

いくようにしたいと思うのです。だから、名前のことも、朝鮮民族が創りあげたその名前を大事にしていくことが今、必要なことだと思つて言っているんですよ。」

「……」

「……」

「そりやあ先生はそれでええかもしれんけど、私ら朝鮮人はどうなるの？朝鮮人のことなんかこつから先も知らん、考えたこともない日本人がいつばいいて、差別がいつばいいあつてそんな中で本名なんか名のつて生きていけまスカ？そんなことでけへんやないですか」

「うんそれはわかつてる。今すぐ、店の看板を本名で掲げるなんてことやつてほしいなどと私は言えないけれど……。それでも、日本の社会や、日本人の考えがこのままがいいとは決して思わないのです。ひとりでもふたりでも気づいていかなないとあかんと思うのです。それに、オモニたちも本名で生きられる日本の国になってほしいでしょう。オモニたちのこともわかる日本人も増えてきているのですよ。」
せめて、大阪府にある十校の夜間中学のすべてが「本名実

「実践」をすすめることを決意したのです。私はシンポジウム、研究集会などで「私の本名実践」を語りその意義を訴えました。取り組みを始めて半世紀に近い歳月を経た今日も、日本人は外国人の名前を人格の表象として正しく呼称する社会になっていないように思います。

・金稔万キムインマンさんの「本名」裁判／司法の現実

―創氏改名（註 10）は今も生きている

「本名を当たり前に名のれない日本社会。生きるため通名を名のらざるを得ない人もいる。その現実を日本人にも在日同胞にも問いかけたい」

キムインマンさんは提訴した胸の内をこのように明かしました。金さんが本名にこだわるのは、差別を恐れ、日本人を装った生い立ちへの悔悟があった。インマンさんは次のように語ります。

「神戸市長田区でゴム底のプレス工場営む実家での生い立ちの中で体験した被差別体験から『金海』かねうみと言う『通名（日本名）』を使って高校生活を送ってきました。私が生き方の

転機を迎えたのは、大学での韓国文化の研究サークルの活動の影響で、次第に生き方に変化が生まれました。『本名が自分のルーツ』¹⁰ と思い定めるようになりました。映像作家として生きる傍ら、建設業の作業に就いて生計を立てていたのです。二〇〇九年九月、大阪市の建設業者から大阪・梅田のビル建て替え工事の夜勤作業に日雇い契約で誘われました。この業者の日雇いでは、ずっと本名で就労してきたのに『今回は通名で』と、担当者は通名の『金海稔万』かねうみとしかずの使用を求めました今回も本名で働きたいと話すと、担当者は承諾して本名で就労することになりました。けれども、事務所を訪れると、担当者は再び通名使用を要求し、別の従業員が目の前でヘルメットの『キム』の名前のシールをはがし、『かねうみ』に貼り直しました。悔しいけれど、これ以上拒めば仕事ができなくなると追い詰められ、約四カ月間通名で働くことを余儀なくされたのです。」

「本名を当たり前に名乗れない現実を訴えたい」として日雇い先の建設業者や、元請けの大手ゼネコン、国を相手取って慰謝料を求めて訴訟をおこしました。

二〇一三年一月三十日、大阪地裁でこの訴訟の判決がありました。

判決は

・先の業者は以前に雇った際、本名の使用を認めていた。

・業者も在日韓国人で、本名で働く金さんを評価して仕事を優先的に紹介していた。

このような業者側の法廷陳述を採用し、さらに業者側が「書類の準備に三〜四日かかるが、通名ならすぐ働ける」との打診に、金さんが了解したとし、「強制はなかった」と結論付け、「公訴棄却」の判決を言い渡したのです。

この判決は、キムさんが「本名はわがルーツ」と本名使用にいたった生き方の葛藤を一顧だにしていません。「本名を名のる」ことへのこだわりはキム・インマンさんにとって生き方の問題です。「本名こそ自分のルーツ」と思い定め、どんな現場でも本名で働いてきたのです。「通名を余儀なくさせる日本社会に抗うには覚悟がいる。だから本名をないがしろにされることは許せない」と訴えるキム・インマン

さんの訴えの本質に、判決は全く応えていないと私は思います。キム・インマンさんの父は、常々、「日本では通名を名のるのが当たり前じゃ」と言っていました。訴訟にも反対していたのです。けれども、日常は通名を使いながら、墓石には本名を刻んでいたのです。キムインマンさんはそんな父の姿を見て、「想像もできない差別に、父は苦しみがら生きてきたのだと思う。」と語ります。「死んでようやく本名を取り戻すことができる」「通名を余儀なくさせる日本社会に抗うには覚悟がいる。だから、本名をないがしろにされるのは許せないのです」「覚悟」をもって「本名を名のり」、葛藤しながら生きるキムインマンさんや在日朝鮮人の姿を一顧だにしない裁判長はもとより司法の現状に憂い、落胆を通り越して憤りさえ覚えます。

ここにも、日本社会の、通名への誘導、創氏改名が今も生きていく姿が垣間見えるのです。

・日本人教員の立ち位置を明確にしよう！

「考える会大阪」は教育現場の実践を踏まえながら大阪

府・市行政や、地方教育委員会に行政の主体的責任として「本名呼称」、「指導要録等公簿の本名記載」の原則を明確にする施策の樹立を求め続けてきました。

粘り強く継続してこの問題を提起し続けて一九七四年、ようやく行政の「本名使用」の原則が打ち立てられたのです。

大阪市教委は「本名を呼び名のる」教育を教育方針の大きな柱としています。けれども、近年の研究集会等、教育現場のリポートから伺えるのは（親や子どもが「通称名記載」「通称名呼称」を望んでいる）——そうであるならば本名記載、本名呼称が原則であっても、親や子どもの思いやねがいを受けとめることが（親や子どもに寄り添うことだ：通称名記載・呼称もやむを得ない）

と、本名原則をなしくずしにする教育現場の意識情況が大きな壁になっているのです。

「通称名記載」「通称名呼称」が親や子どもの真のねがいのか？ 真に民族の心か？

「本名を呼び名のる」——この当たり前の実践を阻む壁は、意識的であろうとなかろうと結局、様々な形で「通名」を

誘導する日本社会が内包している制度システム、それを支えてきた日本人の意識情況なんだと思います。

「本名実践」を中心軸に据えた在日朝鮮人教育をどのように継承し、多民族・多文化共生教育として発展させるのか、私たちに問われているのです。

・「開かれた」社会・学校の実像はどんなのか？

二〇一五年末の法務省の調査（外国人登録者統計）によると、日本に在住する外国人登録者の数は二百二十一万七千四百二十六人といえます。これは一九九八年当時の登録者数と比較すると、四十七%の増加です。一九七〇年代、外国人登録者数のおよそ九十%は韓国・朝鮮籍の人びとでしたが、九五年には五十%を割り、二〇〇八年末には約二十九%となった。日本社会に、中国、フィリピン、ブラジル、ペルー等、ニューカマーが増加し、日本社会は確実に多民族・多文化の社会になっています。国際社会のグローバル化の潮流は、今後いっそうその傾向が強まることでしょう。このような変化によって日本の社会は「不法」滞在、

「不法」就労などの外国人労働者問題が表面化するようになっています。ヘイトスピーチにみられる排外の動きや文化摩擦など、さまざまな問題が連日のようにマスコミを賑わせています。「不法」滞在・就労の実態、外国人犯罪の報道が増えるにつれて、日本に住む外国人への日本人の意識がかならずしも良い方向にむいているとは言えないように思います。一九三〇年代、在日朝鮮人が、日本人の偏見・排除の意識状況やシステムの中で困窮に追いやられた様子と重なり合っています。夜間中学で出会ったオモニ・ハルモニの語ってくれた生活史をみるようです。教育現場の様子と同じような問題がおきているようです。多様な外国人の子どもに陰を落としています。日教組の「教育総研」(二〇〇三年)の報告によると外国人学校や、日本の学校、塾等の教育機関のいずれにも通っていない不就学の子どもが約十%もいるという調査結果です。

不就学の子どもが十%にのぼるとは驚きです。日本人児童・生徒の不就学や、長欠なら直ちに追跡調査などで対応するのには外国籍の子どもの場合、なんの対応もなされてい

ません。在日外国人の、日本の学校への就学は「恩恵」であって、「義務」ではない、だから追跡の調査はしていないというのが教育委員会の現在の姿勢です。被差別部落の子どもの長欠、不就学が大きな課題とされた一九七〇年代初頭、その多さに衝撃を受けたことを今も覚えています。それでも五%に満たなかったのです。すべての自治体の調査ではないので推定に過ぎませんが、それでも不就学(不登校を含む)十%は衝撃です。この数字の意味を考えると、日本の学校に学ぶ外国人の子どもの姿が見えてくるように思うのです。

「国際人権規約(自由権規約二十七条)」や、「子どもの権利条約」ではその国家・社会に在住する民族的少数者に自己の言語や、文化を引き継ぎ学ぶ権利(民族教育権―註11)を保障しています。けれども、日本の社会では教育現場、地方行政、政府機関いずれもが、固有の権利として批准しているながら自国の民族的マイノリティの民族教育については無関心です。大阪などいくつかの地域での在日朝鮮人教育運動のとりくみで意識化され、「在日外国人基本方針(指

針」に反映されているだけにとどまっています。だから、日本社会に住む多様な外国人の子どもたちはこの国際的人権基準に照らした教育が保障されているとはうてい言えないのです。

現在、日本には韓国・朝鮮の民族学校が約一〇〇校、ブラジル人学校が数十校、その他のナショナル・スクールと数十校のインターナショナル・スクールなど多数の外国人学校・民族学校が存在し、数万人の子どもたちが学んでいます。これら外国人学校は大学入学資格が認められないなど、いろんな面で日本の公・私立の学校とは制度的に差別されています。学校存立の基盤が脅かされているともいわれています。一方、日本の学校に学んでいる外国人の子どももまた、「教育を受ける権利」が保障されているとはいえない状況があります。中国帰国者の子どもたちの中で日本の学校教育になじめず、「暴走族」に加わったり、「非行」に走る事例の多いことや、日本の学校に「居場所」を求めることができないで不登校や、不登校になっていくブラジルの子どもたちの問題が明らかになっています。親や、これら

の子どもをサポートするNPOの切実な訴えとして実態があらかになっているのです。国連の国際権利委員会も日本政府に対して懸念を表明しているのです。

「教育総研年報2003」（日教組）は、新渡日の子どもたちに「不登学・不登校」が多い背景として外国人の子どもを「不登学」に追い込んでいく構造として異文化や異質なものを排除する日本の「学校文化」の存在を指摘している。わたしたちが目指す日本の学校文化の変容と法・制度・システムの変革はますます緊要な課題となっている。民族的マイノリティの教育課題と展望を考えると、多文化共生にかかわる文教政策の抜本的検討が求められていると思います。

10 長橋小民族学級の開設運動とひろがり ・なぜ日本の学校に民族学級か

世界のどの地域、どの国、どの民族の子どもも自らの言葉や伝統・文化の中で育ちます。それは自然の営みです。一九七〇年代に入って日本の学校に学ぶ在日朝鮮人の子ど

もが、自らにつながる民族の歴史や言葉・民族文化を引き継ぐ民族教育の機会と場から切り離された環境におかれている不条理に気づいていったのです。なぜこのような不条理が生まれたのか。そして、どうしてこんな不条理に気づかなかったのか。

西成区の大阪市立長橋小の教師たちは自らの学校に学ぶ被差別部落の子どもたちの人権保障の一環として学力を保障するための補充学級の取り組みをすすめていました。その実践の過程で被差別部落の子どもたちと同じように差別のなかに生きている朝鮮人の子どもの教育課題に気づいていったのです。

「僕たちも勉強がわかりたい、補充学級に入れて」との朝鮮人の子どもの声に長橋小の教師たちは頭を抱え込みました。これをきっかけに在日朝鮮人の子どもたちがなぜ日本の学校に学ぶのか、その歴史と経緯の学習が始まりました。朝鮮植民地支配の歴史、在日朝鮮人をめぐる戦後の歴史をひもといいたのです。

敗戦後の在日朝鮮人がへ金のある者は金で、学力のある者

は学力で、知恵のある者は知恵でわれわれの学校を建てよう！の合言葉としてすすめた、「民族学校」創建の運動、また、東西冷戦のもとでの民族学校へのGHQ、日本政府の弾圧、それへの抵抗闘争などを学ぶにつけてようやく課題が見えてきたのです。

その頃旗揚げされた「考える会」のシンポジウム等の取りくみがあわさって、「ウリマル(われわれの言葉を返せ)」の朝鮮人の親や、子どもの声に応える実践として長橋小の民族学級が開設されたのです。

日本の学校に学ぶ朝鮮人の子どもは「日本人同様の教育」を受けています。朝鮮人の子どもが、日本の言葉で日本の歴史、文化を学ぶわけです。そのことに何の疑問も持たず、すすめてきた同化(日本人化)教育の見直しははじまったのです。朝鮮人としての民族的・文化的アイデンティティを育む教育環境をどのように整えるか。長橋小の「民族学級」の実践は教師たちのこのような模索の中から生まれたのです。しかし、長橋小の実践はその歩みだしときに、民族学級を担当する民族講師を措置することをめぐって大きな

壁にぶつかりました。大阪市教委との間で激しい追及とせめぎ合いが全府内を巻き込んで展開されました。この長橋小民族学級の保障を目指した運動が「考える会」をはじめ大阪府内一円の在日朝鮮人教育の活性化につながったと思っています。

・朴正恵（民族講師会相談役）さんの述懐
パクチョンヘ

私は長橋小学校の民族学級開設に関わるなかで「日本の学校に在籍する朝鮮人児童・生徒の教育を考える会」（大阪考える会―全朝教大阪）と出会いました。

きっかけは長橋小学校の実践をすすめていた教師たちでした。集まりがあるので来ないかとの誘いがあったのです。最初は「民族学級を支えている組織のかな」程度の認識でした。日本人教員の話聞き、資料を読んでいくうちに少しずつ、「考える会」の運動が、日本の学校教育に対する重要な課題意識を持ち、民族教育に欠かせない日本人教員との連帯という点で大きな関心を寄せるようになりました。「なぜ本名を呼び、名の取り組みを」すすめるのか、「な

ぜこんなに多くの朝鮮人が日本に住んでいるのか」「なぜ、日本の学校教育が朝鮮人教育に取り組まなければならないか」等々の問題意識を共有し、実践の方向性を示唆したことは日本の人権教育の進歩的な新しい視座になっていきました。当時の日本の教育運動をリードしていた「日教組」は朝鮮人の子どもを「民族学校の門まで連れていこう」とのスローガンの下に日本の学校に学ぶ朝鮮人の子どもをつなげるこそが、日本人教員の役割だと運動・実践の方向を明言し、民族教育は民族学校が朝鮮人教員の手によってこそ成し得るものだとの教育論に立っていました。全国的なそんな情況に対して、「考える会」の教師たちは民族学校で学ぶよう連れていく事は大事ではあるが、いま目の前に座っている朝鮮人の子どもに對し日本人教師のなすべきことは何かを問い、公立学校の中で朝鮮人の子どもに出来る実践を模索し始めました。「朝鮮学校の先生も不足しているのに、「日本の学校を選択した子どものために必要があるのか？」という同胞の冷たい視線がありました。私は「考える会」の先生たちの考え方に共鳴し日本の学

校の民族講師として関わるようになりました。朝鮮奨学会の理事、李殷直ソンセンニムのほとぼしる熱いお誘いにも心を動かされました。その頃は民族学校の教員をしていましたが、産後の休暇を取っていて四月からの復帰をめざして準備していた時でした。李ソンセンニムの語られた日本の学校で学ぶ朝鮮人のおかれた厳しい状況と、差別・抑圧にあえぐ朝鮮人の子どもの姿に心が痛み、揺れました。朝鮮人のおかれた教育環境の状況はあまりにも理不尽なものでした。ほとんどの子どもが通称名を名のり朝鮮人を隠し、日本人と全く同じ日本人教育を受け、日本人の子どもに埋没している姿、自尊心や民族的自覚や誇りを身につける場のない、そんな日本の教育です。私の脳裏には幼少期の自分がくぐった教育環境が蘇りました。私が横須賀朝鮮初等学院に入学したのは一九四九年四月、七歳の頃でした。お兄さん、お姉さんたちと机を並べソンセンニム（先生）たちから教えを受けたのはわずか七カ月だけでした。朝鮮学校強制閉鎖という、GHQと日本政府による朝鮮人学校への大弾圧でした。横須賀の朝鮮人部落に

も警官が踏み込んできました。部落の一棟にあった朝鮮学校に、真つ黒な警官が津波のように襲いかかり扉や、窓に次々と板を打ち付けていきました。朝鮮人部落の人たちは学校を守ろうと必死で抵抗しました。泣きながら机にしがみついたオモニたち。子どもたちは犬か猫のように襟首をつかまれつまみだされました。学校が奪われていくその現場を目の当たりにしたのです。あの屈辱が蘇りました。学校を奪われた後、私たちは空き地で勉強したり、隣の学校の一室を借りて勉強したりしました。閉鎖された私たちの学校は横須賀市立諏訪小学校の分校として再開しました。わたしは六年間そこで学びました。学校強制閉鎖の後、諏訪小学校で学んだ六年間の体験がわたしの民族教育、子どもに対する向き合い方の原点になっています。とりわけ、ソンセンニムたちが、無報酬のまま、家庭を回りウリナラ（私たちの国）の話をしたり、ウリマル（私たちの言葉）や歴史を学ぶ大切さを熱く語ってくれました。生活は貧しく苦しくて幸せでした。学校は思いきり自分らしさを発揮することのできる場でした。ソンセンニムの献身的に寄り添

ってくれたその姿が子ども心に伝わっていたのです。朝鮮人としての自覚や自尊感情はこの時のソンセンニムとかかわりで身についたと思います。

長橋小民族学級に関わり、民族学級の子どもに接するようになって自分の生い立ちが重なつて、「日本の学校のすべての学校に民族学級の開設を！」——そんな使命感を感じるようになりました。「考える会」の教師たちの考えに共鳴し、民族講師の途を協働して歩み始めました。

「考える会」の運動と実践は七〇年代、八〇年代に急激に拡大しました。大阪の在日朝鮮人教育が起点となつて「全国在日朝鮮人教育研究協議会全朝教」が組織され、大阪「考える会」は「全朝教」組織の中心的な役割を担うようになりました。夏期に開催される全国研究集会は参加者が急速に増加し、人権教育の新しい視座が共有されるようになりました。

私は「民族講師会」として大阪府・市の教育行政に対して「民族学級」の開設、民族学級を担当する「民族講師」の措置、運営等の予算措置を講ずるよう主体的な運動・実

践を進めました。全朝教大阪（考える会）の運動方針に賛同し、よきパートナーとして協働して運動・実践に努めました。九〇年代に入ると、在日朝鮮人の当事者の間にも、全朝教の運営体制にも運動に対するスタンスの違い、「民族学級」の評価が二分し、これまで全朝教を牽引してきた全朝教大阪のメンバーが運動の主流から排除される結果となりました。ここまで運動・実践が大阪にとどまらず、全国に波及し始めたのに……と思うと、残念でなりません。「考える会大阪」は私にとって運動・実践のよきパートナーです。「全朝教大阪」は、日本の学校教育に在日外国人の教育課題を位置づけた点で先駆的な役割を果たしてきたのです。その中で培われた歴史認識、子ども観等、大阪の人権教育のバックボーンとなつていると思います。

朴正恵著「この子らに民族の心を」（新幹社）に詳述

・「行政指導」の名の国の圧力

「日本の大学で日本の教員免許を取得し、教壇に立つことを夢見ていたのに……なぜ受験できないのですか？」――

ひとりの在日韓国人学生の訴えが「考える会大阪」に持ち込まれたことが運動の端緒になりました。

国、地方自治体の公務員、公立小・中・高校の教員採用の応募要件に「日本国籍に限る」の文言があったり、明示してなくても「当然の法理」として応募を認めないのです。いわゆる「国籍条項」の名の制度差別が当然のこととして続いていたのです。この国籍条項撤廃運動は「考える会大阪」が発足以来ずっと追求してきた課題でした。「全朝教」は「考える会大阪」のとりくみの流れを引き継ぎ全国的にとりくみをひろげました。しかしその課題は国の政策と関わって、高い壁として私たちの前に立ちはだかっていたのです。現場教員がこの訴えを受けて、「考える会」は取り組みをすすめました。大阪府教委は「考える会」の追及に、この不条理を認め、一九七四年度から大阪府教委・大阪市教委は国籍条項を適用しないことを決め、この年から外国籍教員の誕生を見ました。文部省の行政指導がありましたが大府府・市教委は「文部省の通知に従うつもりはない。将来にわたって資格要件に国籍条項を加えることはな

い」と明言していました。その後、大阪府・市では約二十名の外国籍教諭の任用がすすんでいました。全国各地教委に弾みがつくと期待されましたが、これ以後、文部省（現文科省）は全国各地教委への「行政指導」の名の圧力をかけるようになりました。「国籍条項撤廃」を求める「考える会」の運動は「全朝教」に引き継がれ、各地の運動を支え、文部省、各地教委との交渉を繰り返して、せめぎ合いが続いたのです。一九九一年日韓外相会談で合意を見た「覚書」（註12）まで続きました。一九八三年、「全朝教」が^{ヤン・ホンジャ}出立して活動を軌道に乗せようと努めていたころ、梁弘子さんの教員採用内定取り消し事件」（一九八四年を巡って文部省と折衝したことがありました）。

長野県教委がなぜ二度にわたって梁さんを不採用にしたのか。そのときの私たちと文部省のやりとりから固い日本政府の姿勢が見えたのです。私たちは「文部省の地教委への行政指導は『地方の行政施策』への介入であり、不当だ」と抗議し、「行政指導」の撤回を求めたのです。そのときの折衝の様子です。

「法に基づく国の基本政策に反する地方の施策を国が指導するのは当然のことである」

「長野県教委が合格者に内定通知を出した後、それを取り消したのは不当だ。そのことをどう考えているか」

「もともと、応募資格の要件を満たしていない人を採用内定したこと自体が誤りだった。それを是正した県教委の措置は当然である。公立学校は日本の国民を育てる学校である。その仕事に携わる教員が日本国籍をもつことは当然の法理である」

「公務員任用に関わる法に外国籍者を任用してはならないとの明文規定はどこにもないではないか！」

「当然の法理である。当たり前のことである」——したり顔してこのようにうそぶいたのです。

明治以降、一貫してすすめられた単一民族国家観に基づく政策がもたらした根強い排外意識を強く感じました。この、公立学校教員・地方公務員任用における「国籍条項」問題は、日韓外相会談（一九九一年）時に交わされた「覚書」で応募資格の国籍条項は適用除外ということに日・韓両政

府が合意したのです。長年、対立が続いていた公立学校教員任用問題はようやく一定の解決を見たわけです。しかし、応募資格の国籍条項は撤廃されたが「教諭」ではなく「常勤講師としての任用とすることになりました。教諭は管理職への途があり、講師にはその途はない……だから「公の意思形成に参画する」「公権力の行使」に携わる職種ではないというのが日本政府の理屈でなのです。このような経緯があつて、現在大阪府では約百余名の在日朝鮮人、在日中国人の教員が「常勤講師」として日本の公立学校の教壇に立っています。このほか、「在日朝鮮人教育基本方針（指針）」の策定を求めて「全朝教」は活動しました。また、地域や、教育現場の取り組みを強めていくために全国集会の開催地を全国各地に広げました。その勢いは年に一度開催される全国集会に参加者が増え一九九一年の奈良大会では二千人が全国から集い、運動・実践の交流を積み上げました。開催地域の実態・実践に学びながら運動の方向性の共有化に努めたのでした。

全国集会は実践をつなぎ、問題意識を共有し、運動の方向

性を確かめ合うよい機会になりました。各地の個別の課題、問題意識の差、実践の深淺の違いが表面化し、組織運営に困難をきたしたこともありましたが、共通の課題を共有できるまでに一定の方向にまとまっていったように思います。

中心軸に〈本名を呼び、名のる〉取り組みを据え、

- ・〈歪な朝鮮認識をただし、確かな歴史認識を育てる〉、
- ・〈民族的素養を培い同胞をつなぐ〈民族学級、民族クラブ等〉〉

・〈進路を保障する〉

・活動をすすめる条件を整える(行政折衝)

—このような実践の方向性や検証軸によって、点としての取り組みが寄り合わり、ひと筋の水脈となりました。

11 半生、こだわった教育運動は

なにをもたらししたか

・在日朝鮮人教育運動がもたらしたもの

く日本社会・学校は変わったか

シンジヤの告発から在日朝鮮人教育運動にこだわって

すでに五十余年の歳月が流れました。教育運動の出立のこ



ろ、私たち「考える会」の問題提起や実践は教育現場の教師にも教育委員会にも市民にもなかなか理解されない教育運動でした。けれども、

〈韓国・朝鮮を初めアジア諸地域の人々に対する偏見や蔑視、排除の意識の克服・転換をめざした取り組みは日本が国際社会で信頼を得るためにくぐらなければならぬ重要な課題である〉との考えは決して揺らぐことはありませんでした。六十七年もの歳月を経て、戦後という言葉すら遠い今、在日する民族的マイノリティにとって日本はどれほど住みよい社会になったでしょうか、子どもにとつてどれほど居心地のよい学校になったでしょうか。

高校入試の不条理に抗った一九七〇年代に比べ、確かに在日朝鮮人に対する露骨な差別事件は表面化しなくなりま

した。およそ四十年に及ぶ在日朝鮮人教育を初めとする民族的マイノリティの人権保障の教育運動は日本の学校・社会にどのように変革をもたらしたか。一年や二年の短いスパンではその変化は見てとれないが、三十〜四十年という長い歳月の経過の中ではやはり見てとれる変化があります。大阪市民族講師会（註 13）相談役の朴正恵（パクチョンヘ）さんはこう語っています。

『パンガプスムニダ〜イロツケマンナニ パンガプスムニダ〜』部屋にいと、外から聞こえてくる歌声に誘われて玄關を開けてみた。すると、四、五人の子どもたちが歩きながら楽しそうに歌っていました。西成の町から聞こえてくる朝鮮の歌に感動しました。

「おはようございいます。アニョンハシムニカ？ マガンダンウマガツポ（タガログ語）」

毎朝、長橋小学校の子どもたちはごく自然にこの挨拶を交わします。西成の町から聞こえてくる歌、毎朝のあいさつを聞いたたびに学校が、そして地域が『変わってきた』ことを実感する。三十年前、『アニョンハシムニカ？』とあい

さつすることに、『英語ならわかるけれど、どうして長橋小ではこんな特別なことをするの？』と苦々しく吐き捨てるように言っていた保護者がいたことが思い起こします。三十有余年のとりくみが教育現場をこのように変えたのだ。」わたし自身の実感はどうか。大阪府立長吉高校で長い実践をバネに朝鮮語教員を常勤教員として採用することを求めた運動がありました。一九八八年度末に大阪府教委が常勤教員として採用するのと公表したことがありました。当時、天王寺夜間中学校に勤めていたわたしはそこで学ぶオモニ・ハルモニたちにその経緯と成果を話しました。

「へえ！先生、ほんとうに朝鮮人が日本の高等学校の先生になったんそれほんとう？信じられへん！日本も変わってきたんやなあ。昔やったらそんなこと考えられへんことや」

「そら、オモニたちの同胞の二世の人、三世の人たちもがんばっているよ。民族差別は絶対許さん、言うて。全国のいろんなところで頑張っているんだよ。」

はじめのうちはオモニたちは私の報告に一樣に半信半疑

で聞いていたようです。それほど根強い民族差別や排除のきびしいくみが存在していたのですね。

オモニ・ハルモニにとつてはとても信じられないと言うのが本音だったんですね。それほど根強い民族差別や排除の仕組のなかで生きてきたんですから…。

私が夜間中学から大阪市教育センターに転勤したのが一九八九年だから、それからでもおよそ二十余年になります。公立小・中・高等学校の任用にあたって「日本国籍を有する者」という、いわゆる国籍条項の撤廃を求めてすすめてきた運動によつて大阪府内ではおよそ百余名の外国籍教員が常勤講師として任用されています。「民族的マイノリティの子どもの人権保障」をめざすとりくみとしてすすめられた民族学級は大阪府・市で全国的に見て画期的な取り組みとして発展しています。在日朝鮮人の最大の集住地「大阪」という特異な実態が背景にあるが、現在、大阪市内で一〇六校、府内全域ではおよそ二七〇余校の学校に民族学級（民族クラブ）が開設され、大阪市内では十七名の民族講師が専任として任用され指導にあたっています。長年、「全朝教・

考える会」が求めていた多民族・多文化共生の視点を明確にした「在日外国人教育基本方針」が二〇〇一年に大阪府で策定されました。大阪、奈良、兵庫、京都、三重、広島、神奈川、福岡の府県教委を初めおよそ六〇を超える地教委が同様の基本方針（指針）策定しました。（二〇〇一年現在）茫漠とした砂漠に水を滴らせるような実践から始まった教育運動でしたが、水滴があわさりはじめたようです。



全朝教広島大会
(1987 年)

12 多様な民族の子どもも輝く学校を

～在日朝鮮人教育の経験と成果の継承を

・ニューカマーの子どもの民族的アイデンティティ

年々、増加の一途をたどる新渡日の子どもたちの教育は、どうあればよいのか。これまでわたしたちが追求してきた在日朝鮮人の子どもたちの教育から何を学べばいいのでしょ

うか。

一九七〇年代に入って、日中国交回復の後、いわゆる残留孤児の家族・親族の子ども、ベトナム難民の子どもが増え始め、国際化が進展する一九八〇年代にはブラジル、ペルー等からの外国人労働者の子ども、日本人との国際結婚のダブルの子どもなど多様な民族の子どもたちの在籍が日本の学校に急増しました。

一九七〇年代には外国籍の子どもといえ多くが在日朝鮮人の子どものだったのとは様変わりしています。このようなグローバル化の進展に伴う教育現場の外国人の在籍実態が対応の困難さと実践の方向を不透明にしています。

すでに一九九〇年代の初めには、新渡日（ニューカマー）の子どもたちにとのように取り組むか、試行錯誤の様子が実践交流されてきました。長年、実践によって積み上げられてきた在日朝鮮人教育の成果を新渡日の子どもたちの教育にどう引き継ぐかが多文化共生の新たな教育課題となりました。実践交流の中で共有されたとりくみの方向性はおよそ次のようなことでした。

「新渡日の子どもにとって日本文化・日本語教育の習得は欠かせない。けれども、日本語指導だけに目を奪われて、その子どもが身につけているそれぞれの固有の民族文化や言語を奪ってしまうような教育は許されない。そのことは在日朝鮮人教育が「同化教育」の不当、不条理を明らかにしてきたことであり、結果的に日本社会への同化を強いるような『適応教育』になっていないかを点検することが大切である。……在日朝鮮人の子どもたちと新渡日の子どもたちとは「在日」する歴史的、社会的背景や経緯が異なるのです。子どもたちに対する教育課題も異なります。今後の実践交流の中で、課題の『ちがひ』と『共通性』を明らかにしなければならぬと思います。

13 忘れ得ぬ架橋のひと

(1) 組織の運営を担った仲間

教師として歩んだ半生の自画像を描きたいと思ったつてペンを執つたもののわたしがこだわった「日本の学校に学ぶ民族的マイノリティの人権保障」の課題はとてつもなく

大きいものでした。壁は厚く、いく重にも立ちはだかっていました。この運動に関わった一九七〇年代からおよそ四十年。あつという間に過ぎたとの思いもあるが、やはり長い。ふり返って見ると、思いを同じくする人との出会い、同行した人の多くの顔が浮かびます。志を同じくする仲間です。そしてこの道は仲間がいなければとうてい拓けなかったでしょう。原稿を書きすすめるにあたっては、いつも傍らに「むくげ復刻版」（考える会機関紙）「全朝教通信合本」（全朝教機関紙）を置いて「大阪考える会」「全朝教」の足跡を辿っていました。「むくげ」は「考える会」の財産だと思えます。なかまの思いの結晶だから。志半ばで逝った人の思いにも応えたいのです。

「考える会」の通信「むくげ」の発行を初めた頃は手書きのガリ版刷りでした。それは田宮美智子（故人 樟蔭東高校Ⅱ当時）さんが毎号毎号、仲間たち（会員）に届けるのが遅れては大変！と頑張つてガリを切つて刷つたものなのです。田宮さんは、松陰東高校で「朝文研（朝鮮文化研究会）」顧問として朝鮮人の子どもに向き合いながら「考え

る会」の運営委員としても力を尽くしていました。計報は突然とびこんできました。彼女の筆跡を見ると、その笑顔が浮かび、「しっかり書いて下さいよ」と背中を押され、励まされたように思うのです。樟蔭東高校で田宮さんとともに朝文研顧問として活躍し、「考える会」運営委員として活動した吉田和子さんの献身的な支えも忘れられません。「考える会」事務所はJR環状線寺田町駅近くにありましたが、整理が行き届かない雑然とした部屋を会議の始まる前に現れて整理・清掃している姿がしばしば見られました。「考える会」が自立した組織として会計の基盤を整えることができたのもこのころの彼女の力に負うところが大きかったのです。「考える会」の運営はいわゆる「手弁当」です。発足当初から今に至るまでいつも財政が逼迫（ひっ迫）しています。途方にくれていた時期、ひそかに資金をつないでくれた遠藤幸子さん（故人）は肝つ玉母さんのような人でした。「集（集会）案内」のチラシ、会報「むくげ」を手にして、顔見知りの参会者に間髪いれずに、「これ、読んでおくとあかんよ！」と、突き出す。「疲れたような顔してるよ、顔色が悪い！稲富さ

ん、これ飲んで一服し……と、家から持参したポットから注いだお茶を差し出す。その気迫に若い人たちはたじろぐ姿がありました。その気迫に圧倒されている様子でしたが、お母さんのように多くの人から慕われていました。

朝鮮植民地支配下で、「皇国臣民化」教育に手を貸していた自らを深く自省し、「考える会」の活動を支え、その活動にとどまらず、さらに「釜が崎」の労働者支援の炊き出しの活動にも加わっていた池田正枝さん。新任教師として長橋小の民族学級に出会い、二十年の歳月をそこでがんばった三宅都子^{さとこ}さん。長橋小の「民族学級」の開設に努め、「考える会」運営委員としても欠くことができなかった菊地鉄亥さん。「考える会」が活動の重要な柱に位置づけた「確かな歴史認識」の確立に大きな支えをいただいた梶村秀樹（元神奈川大学教授）さん、一貫して被差別部落の識字学級の活動にリーダーとしてかわわり、「考える会」運営委員としても、また、「全朝教」の代表として、また、日教組の共同研究者として、また、全朝教代表としても運動をリードしていたいた内山一雄さん（元天理大教授）。集会や、シン

ポジウムのまとめ（総括）を論理的に簡潔に、そして、わかりやすくまとめる力量には右に出る者がいなかったように思います。癌に蝕まれ、闘いながら、わたしたちに寄り添って、教育現場の取材を丹念につづけ、『自立と共存の教育』を著し、わたしたちを押し出してくれた元産経新聞記者の岸野淳子さん―岸野さんも鬼籍に入られてしまいました。それぞれに志と思いがあつたでしょう。運動の理念、目標、実践の方向性を共有できるよう考える会の「むくげ」、「全朝教」機関紙「全朝教通信」はこの教育運動の屋台骨でした。全朝教通信は合本として発刊され、全国の仲間に届けられました。中心として担ったのは大阪府吹田市の足立龍枝さんでした。

私が定年前四年間期勤めた大阪市教育センターで出会った稲垣さんや中村水名子さんもこの運動で記憶にとどめた成果をあげ、運動の発展に尽くしました。稲垣さんは考える会の旗揚げ初期、実践の方法・内容を模索していたころ「なぜ日本に多くの朝鮮人が住んでいるのか」「なぜ朝鮮人の子どもが日本の学校に学ぶのか」などシリーズで冊子

として発刊し、運動の拡大につとめた。運動の深化・拡大にとどまらず「考える会」の財政を支えました。

こうした多くの人びとの思いを紡いで、現在の在日朝鮮人教育の道は拓かれたのです。これらの人々の顔が浮かび、彼らが今も励ましの声を発してくれています。この運動は日本人と在日朝鮮人との「連帯」、「協業」でもたらされたものです。長橋小の「民族学級」を担当する民族講師の配置に「南北朝鮮の自主的・平和的統一」の立場から心を砕いた曹基亨^{チヨギヒョウ}さんや、「民族学級講師」として教壇に立ち、子どもたちに語りかけた金仲培^{キムチュンベ}ソンセンニム。書類を風呂敷に包み、講演会の会場に姿を見せるその印象的な姿がわたしの脳裏に焼きついています。この著作の題名として「思いを紡ぐ」としたのはこの教育運動を長年にわたって民族的マイノリティとの「連帯と協業」を積み上げてきた私の思いなのです。

(2) 各地の仲間をつないだ小沢有作さん

小沢有作さんとの永別は突然やってきました。

「考える会」の運動を立ち上げた一九七〇年代初め、小沢さんが著した「民族教育論―歴史編」は私たちの教育運動の標^{しるし}になる書物でした。日朝の近現代史を踏まえ、在日朝鮮人の民族教育権を解き明かした、まさに標となるバイブル的な著書でした。何度も何度も手にしたものです。

出合いの初めごろ、運動・実践の基軸を「日本の学校」に置くのか、「民族学校」に置くのか、私と小沢さんの考えはちがっていました。一九六〇年代、彼は日教組の教育研究全国集会で、「日本人教師の責務は、朝鮮人の子どもを民族学校の門まで連れて行くこと」を日本の教育現場の課題、運動の方向性として提起していた小沢さんと出会いました。彼はそのことを次のように書き残しています。

へさて、私の場合、在日朝鮮人生徒から直接告発されるといふより、これら阪神の教師群から六〇年代末に批判される形を経て、日本の学校にいる朝鮮人の子らの問題を意識化していった。私は、前記の方針―在校する朝鮮人生徒を民族学校の門まで連れて行く―に責任を有していたから、それが現実にならなくなった現状を見るように迫られていた。

それもあって、大阪、それから兵庫にしばらく通い、その子らを民族学校に連れて行くことの前に、日本の学校ではすべきことがたくさんあることを知ったのであった。このように考えを修正した私は稲富さんとは話が合うようになり、大阪『考える会』や『全朝教』の行事や大会にずっと参加するようになっていた。

いつの間にか、稲富さんのすることに協力を惜しまない私を発見するようになっていった。小沢さんは朝鮮人の子どもの教育はへ朝鮮人自身の手で教育するのは民族固有の権利で誰も侵すことはできないとの原則を主張していたのです。私は日本の学校に学ぶ朝鮮人の子どもの置かれた状況を踏まえて運動・実践をすすめることの必要性を主張し、意見を異にしましたが、小沢さんは何度も兵庫、大阪、広島の実場の実践を学び、お互いのちがいを修正したのでした。

一九七九年〜一九八三年の四年間―「大阪考える会」は全朝教（全国在日朝鮮人教育研究協議会）の結成に向けて準備活動に余念がありませんでした。その頃、私は天王寺夜間中学に勤めていました。土・日を利用して全国各地を飛び回っ

ていたのです。この時期、小沢さんは同道して各地の教職員組合や、同和教育推進組織との話し合いの仲介を積極的に進める役割を引き受けてくれたのです。

わたしと小沢さんはともに一九三二年の生まれでした。昭和でいうと七年ということになります。お互いの語りのセッションが高まると『花の七年生だ』と盛り上がったものです。敗戦を十三の歳に経験しました。二人とも、「少国民」として子ども時代を過ごしました。この、同時代を生きてきたということも、二人にとつては大きな意味をもっていたと思います。

彼は東京都立大の研究者として知られ、研究室で研究し私たちの運動を理論的に整理し、すすむべき方向性を示唆してくれたように思います。かけがえのない友であり、運動の同行者でもあったのです。

(3) 決して旗はおろさない

チヨキヒョン
曹基亨、リウシジク
李殷直さんとの堅い絆

朝鮮奨学会は朝鮮の南北の対立を超え、韓国籍の理事、

朝鮮籍の理事、それに日本人の理事が加わって運営する団体で、「在日」の高校生や大学生に対して民族的自覚や誇りを育てることを目指し、奨学金給付など奨学事業をすすめる団体でした。その関西支部長がチョ・キヒョンさんで、東京本部の理事がリ・ウンジクさんでした。深い付き合いは一九七一年の大阪中学校長会民族差別文書事件（註14）の後ことでした。大阪市立中学校差別文書事件をきっかけに深い絆で結ばれるようになりました。今日は教育委員会、明日は校長会、次の日は研修会と、かけずり廻った日々、また、長橋小民族学級をめぐる運動をともしするなかで固い絆で結ばれるようになりました。

校長会民族差別文書について李殷直（リ・ウンジク）さんはこう語りました。

〈校長会の差別文書に書かれている朝鮮人の家庭や親、子どもの実態はそれとおりにんです。そういう実態に追いついていったのはだれなんですか。それは日本社会・日本の学校・日本人の意識なのではないですか？ わたしたち朝鮮人に差別・抑圧を強いてきた制度・システム・意識を問う

ことが大事なのです。日本の先生方は戦前、朝鮮植民地時代の「皇国臣民化」教育を問題として採りあげることが多いようだが、それも大切なことだが、戦後、今日に至るまでの在日朝鮮人の子どもの教育がどのような歴史を経て現在に至っているか、そのことを認識することが最も大切なんです。…何回となく訪れた教育委員会、校長会での話し合いや、シンポジウムでの李殷直ソンセンニムの熱情のほとばしる。

訴えが激しく私の内心を揺さぶったことが忘れられません。

「考える会」のシンポジウム、集会には毎回と言っているほど顔をのぞかせていた曹基亨ソンセンニム。在日朝鮮人社会でも南北分断の陰が色濃く残っていた当時、韓国籍の自らの立場は明確にしながらも、「南北の自主的・平和統一」の立場ですすめる「考える会」の取り組みに理解を示し、幅広い人脈をつないで、活動の広がりを支えていただいた曹基亨ソンセンニム。その行動の根っこに蓄えられた民族教育にかける熱い熱い思いが伝わって、私の胸に深くしみ

渡ったのでした。

大阪市立中学校校長会民族差別文書事件の後、チョキヒョンさん、リウンジクさんと私は校長会や市教委、学校とともに訪れる機会が多くなりました。話し合い、研修会などが増えたのです。その頃のことでした。市教委と研修計画を話し合ったその帰路のこと。朝鮮奨学会の事務所近くの焼き肉店で夕食を囲んだことがありました。

「よかったよかった、今日の話し合いは大変よかった。市教委が積極的に進める方針のようだね。どの現場でも研修をすすめるという、これは初めてのことではないか？ 期待できそうだ」とチョキヒョンさん。この時続けて「でもね……」と言いかけてなぜか黙り込んだのです。話は他の話題で弾んだんですが……。私はこの時チョキヒョンさんの沈黙が気になっていました。「何かおっしゃりたかったのでしょ」と応じていたのに押し黙ったままだったからです。何年か経ってその時のことを彼はこのようなように話した。「これまでも民族学校の問題や、朝鮮人の進学・就職差別の問題が起きるたびにそれに闘う日本人の先生方の運動が華々しく打ち

上げられましたが、どれもこれもいつの間にかその運動が消滅してきました。今回の「考える会」の活動は期待できそうで……。そのことを先生に伝えたかったのですが先生の取り組みに水を差すようで……。それで話すのをやめたんです。ただ、「先生方がこの運動の旗を降ろすときは日本に再び軍国主義の嵐が吹き荒れているでしょう。この事だけは肝に銘じていただきたい。」

いま日本は「国家・国旗法」成立以降、入学式・卒業式等学校行事での「国旗」の掲揚「君が代」の斉唱が義務づけられ、また、自衛隊法の改正などその活動が拡大され、急速に日本の針路の右傾化が進んでいます。国家主義の台頭が際立っている現実をみるにつけ、「この旗を降ろすときは軍国主義が吹き荒れている」チョキヒョンさんの言葉が鮮明に蘇るのです。現在の日本の針路がいつの間にか、憲法九条の改正へと進むのではないかと懸念が現実にならないことを願うのみです。



出版記念会 曹基亨さん

14 学生に語ったこと

一九九二年から現職と兼務で、大阪教育大学の「特別活動」の講義を担当することになった。一九九三年、大阪市教育センターで定年となり、大阪教育大、近畿大、関西大の講師を勤めました。近畿大学では「人権論」、関西大学では「教育実習」「社会科教育法」「教職概説」の講義を担当したのです。

わたしは、教員として生涯、現場主義にこだわっていたので、担当科目の講義においても、教育学理論にとどまることなく、自らの現場教師としての体験を重ねて講義内容を構成することに努めました。

関西大学の「教育実習」の講義を担当しました。教員免許を取るために必修とされている教育実習で、なにをどのように学ぶかの実習前の指導、実習に備え教科指導や生徒指導にあたる教師のありよう、実習後では実習の体験をとおして、教師の資質・能力について追究する講義を組み立てました。

ここでは、わたしが教職課程に学ぶ学生に伝えたかったこ

とをまとめてみました。

・「教育実習」の講義で語ったこと―私の「教師論」
学生に伝えたかったこと、語りたかったことは端的に言ううと、教員生活四十余年の軌跡の中で、私なりに掴み取った教師論といえるかも知れません。

わたしが難波中学―城陽中学―天王寺夜間中学をくぐって学び取った教育の方法を整理すると、四点に集約できると考えています。

- (1) 親の人生を読みなおす
- (2) 子どもの背後にある親の姿を見る
- (3) 隠すことからの解放
- (4) 子どもの目線から学校を見なおす。

この四つの視点から語りました。

「教育実習」に入るとみなさんは、さまざまなたくさんの生徒に出会う。初めてのことから、生徒への視線はどうしても手をよく挙げる子、活発な子、よく発言する子に偏ります。うつむいている子、おとなしい子どもを見すごし

ちになります。けれども、教師として最も大事なことは後者のような子どもに目を向け、生活や、学習に困難をきたしている子たちに真つすぐ目が届き、その痛みを察することができる感受性を備えた教師になってくれることをわたしは望みます。このような教師の条件、もうすこし丁寧に言うなら、このような教師になるための条件とは何か、ということを考えてみるのが本講義のテーマです。

このような前置きから、「実習前指導2」にかかわる講義をすすめました。

・自分を読む く子どもたちとの出会いを通して

わたしは夜間中学に転勤して十五年間、オモニたちのかかわりで社会科教員として覚醒したように思います。というのは、それまでのわたしの知識は書物を通して得ていたものであり、その知識を子どもに教える方法を授業の基本においてきました。

夜間中学に転勤して、オモニ、ハルモニが夜間中学の日常で語った生活史を通し、わたしが学んだ日朝の歴史は、

活字で学んだ知識とはちがって、わたし自身の生活史と重なりあつて血肉を揺さぶり、読んできた書物とも交差し、わたし自身の覚醒を促したのです。

オモニ・ハルモニの生活史を通し、朝鮮植民地支配の歴史をわが血肉としたその体験は「人間を教材にすることの大切さを教えてくれました。

難波中学校で部落の子どもを長期欠席に追いやりながら「部落問題の本質」に無知でいたわたし、金信子に告発を受けるまで、在日朝鮮人問題に無知でいたわたし。夜間中学は、こうしたわたしを形づくってきた公教育の内容や方法をとらえかえず契機になりました。

「最近の学生諸君は小学校以来ずっと、外から与えられた知識で頭と心がいつぱいになっていて、自分の姿や、価値を見失っているように思えます。けれども、自分の人生を丁寧に読みなおしていけば、これまでの経験や、思いのなかに自分を自分たらしめたきた宝が数々秘められているはずです。それはこれから自分をより豊かな自分にしていく宝になるのだと私は思うのです」

「自分を読む」には、まわりの人びとの人生から学ぶことが大事になります。わたしは夜間中学に学ぶオモニ・ハルモニの人生に学びました。植民地支配のため渡日を余儀なくされ、「在日」の抑圧・差別に向き合いながら生き、働き、子育てをしてきた人生に驚愕し、その生き方に心をゆさぶられました。その出会いのなかで、ラッパを吹き、手旗信号を振って得々としていた少年時代を振りかえり、そのわたしを育てた父や、母の思い、それに連なる父祖の地（徳之島）に生きる人々の思いや、生き方を深く考えることができたように思います。この体験を学生たちに伝えたかったのです。

「本を読むことは学問に欠かすことはできません。その際、『自分を読む』ことと本を読むことが交差することが読書の原点だと思うのです。読書の原点を探しあててほしい」学生諸君にこう求め、授業も「自分を読む」ことを重んじるような組み立てに努めました。

「親の人生を読みなおす」「子どもの背後にある親の姿を見る」を「自分を読む」ための重要な方法に位置付けたのは、

自分を自分たらしめたものをみていくために欠かせないからですが、それは同時に親たちが生きた時代についての確かな歴史認識や現実認識をもつことにつながるからです。

「隠すことからの解放」を挙げたのは、これも夜間中学での体験からです。夜間中学に移った当初、高齢のオモニ・ハルモニたちがどうしていま「学び」を求めるのか、その動機や思いを知りたかった。オモニ・ハルモニたちは「文字が読めなくて自動販売機で切符が買えず、不便だった」こと、「役所で証明書をもらうのに苦労した」ことなど、日常生活の不便を語ることはあったが、なぜ渡日することになったか、渡日してからの悲惨な生活の日々、馬鹿にされ差別され、悔しい思いに耐えながら生きてきた日本社会・日本人への恨みつらみを語り出すのはずっと後のことでした。学びの日常のなかでわたしとオモニたちとの絆もしいに太くなったとは思いました。時には会話が飛びだすようにもなってきましたが、それでもオモニ・ハルモニたちは過去の重い自らの生活を語りはしませんでした。いつだったか、それぞれのふるさとの話題が出たときでし

た。わたしは故郷徳之島を語りました。台風で米がとれず、

さつまいももなくて、蘇鉄の実や茎を食べたと言う叔母の思い出、琉球や薩摩の支配で米や砂糖を搾取された島の歴史、方言で内地の人に馬鹿にされ、親に方言を使うことを禁じられた子どもころの思い出、高校時代に夜店のいか焼きの屋台をひいて苦学したことなど、わたしの生きてきた道について語ったことがありました。これをきっかけにオモニ・ハルモニたちの重い口が開き始めたように思うんです。わたしとオモニ・ハルモニたちとの間に、一筋のつながりができたと思うのはわたしの早合点でしょうか。わたしがわたし自身を、そして徳之島のことを語りはじめて、オモニ・ハルモニたちもはじめて「わたし」を語るようになりました。島に生きる人びとの耐えに耐えて生きた、たくましさを実感的に受けとめる何かがあったからだろうと思っています。

金任生（キムインセン）オモニは、渡日後、最初に覚えた日本語が「バカヤロウ」だった話、夫捜しで日本に来てからの苦渋に満ちた生活の遍歴をポツポツと語り始めたの

です。

教師はよく子どもたちに「他者とつながる」ことの重要性を説きます。一人ひとりが抱えている辛い、触れたくない問題はさまざまに異なっているが、それを隠しあつたまま、分かりあい、手をつなぐことはできないと思うのです。

難波中時代、長欠になってわたしの前から姿を消した杉本一郎君、私立高校の入試差別を告発した金信子さんキムシンジヤとも本当にはつながっていなかったのだと思います。教師が一人の人間としてどのような問題や、痛みをかかえて生きてきたかを明かしたときにはじめて、在日朝鮮人の子どもや部落の子ども、「障害」をもつ子ども、学習の遅れなどさまざまな問題に悩みや痛みを感じている子どもも自らの問題、痛みを明かしてくれるのです。そこではじめて人間的つながりが成立するんです。教師が「教師という面」をかぶったまま生徒に対すれば、生徒もまた生徒の面をかぶって、教師に内面を明かすことは決してありません。「自分を隠すことからの解放」は、人間が人間として「自立し連帯する」基本的条件なんです。

今一つ、「子どもの視線から学校を見なおす」ことを「自分を読む」方法の一つに挙げたのは、四十年の教師生活で出会った被差別の子どもたちの悩みや痛みを察し共感する感受性を育てること、もう一つは被差別の視座から世界を見ていくことの重要性を悟ったからです。学校の問題がいまその改革に向けてさかんに論議されているが、教える側（教師）の視線から見ると、教えられる側（子ども）の視線から学校の現実を見るほうが、学校教育の問題点を浮きあがらせてくるように思う。学校は学力の高い、いわゆる優等生を大事にする所です。勉強ができて、行いのいい生徒が大事にされ喜ばれるところです。そのような優等生の目から見ても、その子なりに不満をもっているから学校や教師の問題点は浮かびあがってくるのです。けれども、それらをより鮮明に浮かびあがらせるには、底辺に押しこめられている生徒、はみだしている生徒—いわば学校に適応できない生徒—の目から見ていくことが必要になってきます。わたしには現在の学校は、勉強のできない子、学校の秩序からはみだす子には冷たい仕打ちをする仕組みがあるよう

に思えてならないのです。教師はどの立場の生徒の声に耳を傾けるか、これが教師に問われる最初の問題だと思えます。城陽中学校の時、「促進学級」を担当した体験を通して語りました。

「自分を読む」ことをテーマとした講義は、その教材は「教師として生きた自分」を語ることで、そのなかで出会った子どもと、わたしのつながりを語り、そして教師集団を語り、現実の学校の仕組みを語り、学生がくぐった学校を検証することにつながり、理解が深まったと思います。

自らが受験教育体制のなかにくみこまれ、くぐった学校の仕組みや、教師の姿が普通と考えてきた学生たちにとって、わたしの講義はある種のカルチャーショックだったようだ。討議のなかでは疑問や反発、葛藤が噴出しました。「教育実習」講義を締めくくりにあたって次のような話をしました。

・教師になるということ — 講義のまとめ

学生たちに「講義を受講しての感想」を書かせ、その感

想を基に講義の総括をすすめました。学生の一人が、

「先生の講義は一貫して学習のできない・わからない子、秩序からはみだす子の側の目線から学校のしくみを考える、教師のありようを考えるとということだったと思うのですが…そのように理解していいのでしょうか？」こう切り出した。

「それで…どうなんだ…？」 「言われることはよく理解できたんですが…、ただ疑問があるんです」

「先生の言われる、学習の遅れている子、わからない子の側に目線がいきすぎると、できる子のことを忘れる結果になるのでは？ 努力してがんばっている子と、そうしないでわからない子を同列に見て好いのか、疑問に思うのです」

「言葉が足りなかったのかもしれないね。わたしが伝えたかったことは、いま、さかんに学校の改革が叫ばれているけれども、「学校」の問題を考えるとときの視点として「生徒の側、それも底辺に押込まれている子どもの側」から学校教育の現状を見ることが重要だということを伝えたかったのです。」

もう少し具体的に話そう。学校の問題を考えると、教える側と、教えられる側に二分されているから、教えられる側から見るという認識方法を活かすことができます。教える側から見ると、教えられる側から学校の現実を見るほうが、問題がよく浮かび上がります。たとえば教える量が多すぎるとか、難しすぎるとか、速すぎるとかいうように学校教育の問題点が次々と浮かび上がってきます。みなさんも実際に教壇にたつてみて子どもたちがどう受け止めたか、考えたのではないでしょうか。長い間生徒の立場にいて、自ずとこのような学校認識の方法をしてきたでしょう！ それを教師になっても忘れないでほしいといったかったのです。

今、実習を終えて教師の道について実習前とは全然違う感懷をもっているだろうと思います。それは紛れもなく、教師が自分と同じ喜怒哀楽を持つ生身の人間と交わることからくる感懷なのです。教師の仕事の忙しき、身をもって体験したことと思います。

実習報告書に『会議が多すぎる、もっと生徒に触れ合う

活動に時間をとるべきではないか』との感想がかなりありました。わたしもそう思います。けれどそうはいかない。教師はたしかに忙しい。そして、商品の製造や流通、サービス業のようにすぐに仕事の結果が出ない。それだけに、職業についての使命感、責任感が要求されます。社会の変化に対応する能力・資質がもとめられます。どんな仕事でもそれは同じです。けれど教師の仕事の結果は見えにくい。今、社会的要請として「教師の実践力」とか、「教師力」とかいふ言葉で語られています。この講義の総括としてわたしの考える「教師像」というか、「教師の身につけたい条件」について語っておきたい。

(1) 教師の人的条件

国際社会は今、歴史的転換期に立っています。地球的・人類的規模のさまざまな問題に直面し、それが深刻化しています。地球温暖化等の環境問題、地域紛争がもたらす難民問題、資源エネルギー問題等々、いずれも国際協力、協調なしに解決できない深刻な課題です。日本社会もまた例外

ではなく、さまざまな矛盾が顕在化しています。戦後、廃墟の中から経済復興にとりくみ、明治以後のいわゆる「追い付き型近代化」の歩みを継続し、今や世界経済のなかで大きな地位を占めることになっています。しかし、科学技術の高度化、社会の発展といった豊かさの一方、環境問題、格差問題など困難な問題が生じ、さまざまな矛盾に直面している。経済的な豊かさを実現したといっても、いつも忙しく時間に追いたてられ、ゆとりのない生活を送り、心の豊かさ、生活にゆとりとるおいを実感できず、「経済大国、生活小国」などといわれる状況があります。このような状況は、教育にも色濃く影響を与えています。「いじめ」「不登校（登校拒否）」「荒れ」「非行」「犯罪の「凶悪化、低年齢化」等の深刻な問題の危機的な状況が全国各地の教育現場から報告されている状況があります。二十一世紀を展望する教育改革が論議される背景として、このような状況があります。今、ようやく、これまでの経済成長の過程で見失っていたものは何か、今後、われわれが実現すべき、「真の豊かさ」「成熟した社会や経済のシステム」とはどの

ようなものを問い直す気運が盛りあがっています。人びとは次第に多様な価値や、個性的な自己実現を求めるようになってきました。今後ますます、グローバル化、高齢化や環境問題などの深刻な問題に直面するでしょう。変化の激しい先行き不透明で、厳しく困難な時代が予想されますね。そういう時代を人間として知的創造力を最大限に発揮しながら真に豊かな暮らしを実現していくために何が求められているのでしょうか。

人間とは何か、自分とは何か、わたしたちの社会は何に よりどこを求めてどこに向おうとしているのか、二十一世紀を展望しながらグローバルな視野と長期的な展望を持つ教育改革をめざしたいものです。

教育現場の現状を見ると、早くから学校教育のあるべき姿を歪めていると批判されながらも過熱している受験教育体制は依然として改善されていないばかりでなく、近年、公教育の場で「できる子どもを伸ばす教育」のシステムが潮流になっています。これまで、過度の競争を防ぎ、教育の機会均等を重視して学区制を見直す教育改革がすすめら

れていますが、わたしはこの潮流に危惧の念をいだいています。テストと受験に追われる教育体制のもとでは、知識詰め込み型教育が優先される。「心の教育」とか「人間教育」は言葉だけに終わっているとも思えるような教育現場の状況がうかがえるのです。

今、教師に求められる人間的条件は何か。私の教育現場体験をふり返るとき、最も求められるのは知識注入型教育から、人間化を励ます教育への転換が必要だと思うのです。一人ひとりの教師がそのような教育体制づくりに参画することがたいせつです。現在の教育体制は、受験教育体制の軌道からはみ出す子どもたちを大事にしていない、結果的には、現在の教育システムに乗っかれない「できない子ども」はその子どもの責任に帰しているのではないのでしょうか。年間、何万人もの不登校生徒がでている現状が端的にそのことを示していると思うのです。(どの子どもにも、個性を発揮し、自己実現の可能性を励ます)と言いながら、有効な教育改革が実現できていません。教育界の潮流が「できる子を伸ばす」施策、制度、システムに偏しているよう

に思えてならないのです。今求められているのは、人間として他者の痛みに共感する人間的な感受性を育てることです。教師自身がそのような感受性を培うことが求められています。知識詰め込み型教育システムは、他者の痛みに共感性が育つどころか、奪っていくことになっています。受験教育体制の「学力」競争のしくみは、人間的な感受性を培うこととは対立します。現状のこのような教育システムの改善こそが最も問われているところでしょう。現在の「できる子どもを伸ばす」教育改革の潮流を危惧するのはこのような理由からです。こうしたシステムのもとも、奪われた感受性をとりもどすことは可能である。そのひとつの道は、自分の痛みや本音を人に隠す生き方をうち破るということことです。

人が人とつながろうとするときの最も基本的な生き方です。まして、痛みを分かりあう人間的なつながりをつくらうとするとき、自分の痛みや本音を隠しておいて「人間はわかりあわねば生きていけない」などと論じる「啓蒙」主義的な態度ではどの人びともつながることはできない

と思います。

「他者の痛みを察し、共感する感受性を育てよう。それが、人間が人間とつながる根本の道である」――教師の人間的条件の基本だと思うのです。

(2) 教師の教育的条件

自らが共感する感受性を育てる人間としての教師であるなら、被差別の側にいる部落や朝鮮人や「障害」を持つ子ども、もう少し一般化するというなら、生活や学習に困っている子どもたちに真っ先に目を届かせるようになります。教師本来の仕事である教育内容と方法を子ども達の人間化を励ます内容と方法につくり変えることが可能になります。その子どもたちが「自分の問題」に向き合うことを励ます質のものに作り変えるのです。それがまたすべての子どもがそうすることを励ます教育の内容と方法につながっていくことになります。

文教政策として文科省が教えることと決めた教育の内容・方法が現在の学校教育であるとするなら、それを人間

化を励ます教育の内容と方法に創りかえることが大切であり、教師の務めであるとおもうのです。現在の学校の問題を考えると、教える側から見ると、教えられる側から学校の現実を見る方が、学校の教育問題を浮き上がらせて来るように思われます。

教師はどの立場の生徒の声に耳をかたむけるか。これが教師に問われる最初の問題であると思います。現在の多くの学校は優等生を大事にするところです。勉強ができて行いのよい生徒が喜ばれ場所です。しかし、学校や、クラスの底辺に押込まれている生徒―いわば学校に適応できない生徒の目から見ることがとりわけ重要だと強調しておきます。このような立場の生徒の声に耳をかたむけることが教師が教師になるための第一歩になると思います。

(3) 「教師」からの解放

人間どうしがつながり、励まし合える関係をつくることが教師の仕事であるなら、つながる側が自らの最も辛いことを明かさなままでは心は通じ合うはずがありません。

教師と生徒の間でもそれは同じです。教師が「教師―生徒」という関係に閉じこもって、その目で生徒を見ている限り、痛みを持つ子どもがその心の内を明かすことはありません。私が、自らの生いたちの中での父や母が受けた沖縄・奄美人に対する差別、イカ焼きの屋台を引っぱった敗戦後の日々、苦痛だった生活などを語るなかで夜間中学のオモニたちも心を開いたように思いました。

教師が一人の人間として、どのような問題や痛みをかかえて生きてきたかを明かしたとき、子どもたちも「自分の問題」に目を向け、考え始め、教師に自分の心の内を明らかにしはじめます。教師の「仮面」をはずさない限り、生徒との人間的なつながりにはできないと私はそう思うのです。

(4) 学びの新しい道へ

教師としての四十年、わたしは書物から知識を学ぶこと以上に人間ひとから学ぶ方法を大切にしてきました。当事者の経験や思いを、その発する肉声を通して聞くという方法です。人間を通してその問題に近づき、その問題を知るとい

う方法ですね。今日の大学生の多くが、また、すでに教壇にたつ青年教師の多くが、受験教育体制のなかで、本から学ぶことは上手だと思います。だが、人間から学ぶのは不慣れで、不得手ではないかと思うから、特に強調しておきたいのです。教師は子どもという人間と直接交わる仕事だから、教科書（本）を教えるだけですすわけにはいきません。子どもと向き合うためには、子どもの生活や気持ちを受けとめることができればならない。それには人間から学ぶ、子どもから学ぶことが得手になることが重要になります。コンピュータが普及し、情報化社会がすすむにつれ、文字と記号と映像で人間や事物が代替されるようになっていきます。そうなればなるほど逆に、いつそう人間から学ぶという直接経験を積むことが人間としての教師にとって不可欠だと私は考えているのです。

15 いま、わたしは ― 様々な支えのなかで ・絶望の崖っぷちに立つ

生きた証をまとめておきたいと思ったのは定年退職の後、

十年ぐらいたったころでした。小沢有作さんの急逝が契機でしたが、私自身の、脳梗塞という思いがけない病いに見舞われたことが直接のきっかけになりました。二〇〇六年のことです。五十日ばかりの入院加療を余儀なくされました。左半身不随というショックと、もどかしい身体機能の様子に、立ち直ることはできないのではないかと焦る日々が続きました。気持ちがあつても思うように動かない体に、打ちひしがれる日もありました。「考える会」や、「全朝教」の四十有余年に及ぶ「民族的マイノリティの人権保障」をめざした教育運動の全体像を明らかにし、また、この教育運動に半生こだわったわたしの思いを引き継ぎたい―それは「担ってきた者の責任」と、かねがね考えてきたわたしは、左半身不随という事態に意気消沈して気力もなく、絶望の崖っぷちに立たされていたように思います。わたしが、立ち直りのきつかけをつかんだのはリハビリでした。発症後一週間経ったところからリハビリが始まりました。理学療法士の皆さんが、機能しない左半身に、慎重に刺激を加えている。嚥下の指導、言語の指導にあたる人、手・腕・指

先の訓練にあたる人、歩行など身体機能のリハビリを担当する人、それぞれの専門の理学療法士さんがチームを組んで指導にあたってくれました。「リハビリ」がそんな容易いものでないとは聞いてはいたが、わが身が直面して、想像をはるかに超える苦痛を実感しました。食べ物がうまく飲み込めず、激しくむせる。ベッドから一歩足を踏み出すことができない苛立ちなどなど、「もうどうでもいい」となげやりになったり、「このまま、ベッド生活はご免だ」と気持ちを奮い立たせたりの繰り返しでした。

へ「マイノリティの人権保障」にこだわって生きた教師としての思いをなんとしても明らかにしたい――そのねがいの潰える――打ちひしがれた氣力を奮い立たせたのはリハビリに曙光が見えたときでした。リハビリを開始して十日ほど経ったころ、ベッドから立ち上がり、一歩を踏み出し、二く三メートルばかり離れた手洗いまで伝い歩きして用を足したその時の安堵と、喜びは言葉にならないほど大きいものでした。言語指導にあたってくれた橘さんに話すと、「よかった、よかった！ リハビリを成功させるには『小さな

目標』を辛抱強く積み重ねることですよ、がんばって！」と励ましてくれました。

発症から四年の歳月を経て、なんとか社会復帰がかなったように思います。医師をはじめ、看護師、理学療法士の皆さん、支えていただいていたありがとうございます。

立ち直ることができたのはやはり、連れ合いをはじめ娘たちの支えでした。長い歳月、ライフワークともいえるこの運動、著作への支えをありがとう。連れ合いにはこんな簡単な言葉では到底言い表すことができないほどの困難と苦勞を強いてきたのです。

・妻のこと

私が二十八歳で結婚しましたから、かれこれ五十余年の結婚生活ということになります。この自分史の原稿が終わりに近づいてから筆が急に遅くなりました。筆が進まなかったわけは私にはよくわかっています。気持ちをどのように言い表せばよいのか、ことばがなかったからです。私は自分自身の「志をめざす生き方」に、ある種の達成感はその

れなりに得たように思いますが、妻にしてみれば身勝手な「男のエゴ」に過ぎないというふうに映っていることでしょう。自身の志をめざして、がむしやらに突っ走った運動への理解を求めることがなかったように思います。それが決定的な間違いだったように思います。やっぱり男のエゴだったのです。

結婚当初のころの母の看病に始まって、二人の子どもの子育て、自宅建築のローンを含めた家計全般のやりくり、パートの勤めなど、二人姉妹の学費などもあつてそのときどきの心労が絶えなかったことと思います。それも並みはずれていたんですよ。私とは十歳離れていますからずいぶん若いころから並ではない苦勞を強いてきたんだと今にして考えるんです。運転免許をとったのも二人姉妹の保育園の送迎のためだったし、パート勤務もそうせざるを得ない家庭の状況がありましたから…。学校や社会では「男女平等」を説きながら、「男は仕事、女は家庭」という引き継がれてきた封建的な考えが私にも身についていたのだと思います。

一九七〇年～一九九〇年代は「考える会大阪」「全朝教」の活動がようやく軌道に乗り始めたころです。とりわけ、一九七九年～一九八三年の四年間は「全朝教」の組織を立ち上げるため全国を東奔西走、わたしは飛び回っていました。そのため土・日の休日は家を留守にすることがほとんどだったように思います。妻や、子どもが「お父さんと公園で乗り物に乗ったり、ボール遊びをした覚えがなんにもない」となじるように言われるのが辛かったことを覚えています。こんなこともありました。十五年もの長い間、夜間中学という変則的な勤めでしたから、夕食をともにすることもほとんどなかったように思います。家族にとつては、母子家庭のようなものでした…。その上、「全朝教」結成準備期間（一九七九～一九八三年）の土・日は家を空けることがほとんどで、それも四年もの間続いたのですから…。妻や子どもがなじるのも無理はないと思っています。今さら何と言っても弁解にしかありません。子どもが家庭を持ち、自立していった今は妻は少しは時間のゆとりもできて、地域の友人たちとウオーキングやグランドゴルフなどを楽し

んでいるようです。もともと自分の世界を楽しんでください。長い間支えてもらってありがとう。感謝しています。弁解に過ぎませんが、なぜそこまで志に突き進むのか、理解を求めることをしなかったのか―それが悔やんでも悔やみきれない思いです。

・「よみかき茶屋」とわたし

よみかき茶屋との出会いはかれこれ二十余年になります。初代代表だった寺北圭作さん（故人）の誘いで参加することになったのです。確か二〇〇三年だったと思います。

教室に参加した最初の日、天王寺夜間中学で勉強した（チヤンヤンスン）さんと再会したことを忘れもしません。

「やあ 先生、この教室で会えるなんて！懐かしい、お元気でしたか？」

「やあびつくりした！お久しぶり… もう何年になるのかなあ…。」

「徳之島のお父さん今も向うですか」

十年は優に超えるだろう、再会は驚きでした。ハルモニの

学びの遍歴を聞くにつれ、学習への執念とも思えるひたむきさに圧倒されました。再会するまでの十余年、亡くした娘の子ども二人を育て、ひざ疾患の病いの苦しみをのりこえ、再び学びの道へ。「ハルモニのいま」を改めて語ってもらいました。学びの成果が言葉の端々から伝わってくるものがありました。

「前みたいに、日本のこと悪う思わんようになった。いいところが分かってきた…とてもいい日本人に出会えたし、いい先生方にも出会って考えも変わってきた…読み書きが少しできるようになって、出会った人と話をするとき、相手の人の話をよく聞くようになった。内容がよく理解できて感動することが多くなった。わからんなりに新聞読めるようになって、読めたうれしさと、紙一枚で自分が世界につながって広くなったうれしさやね！何物にも変えられん…文字ほどありがたいものはない！」

天王寺夜間中学の基礎組で、ひらがなの一字一字を丁寧に書いていねいに書いていたチヨンヤンスンさんの姿を思いだし、感無量でした。改めてボランティア講師の姿勢を問わ

れたように思いました。

よみかき茶屋の現在のコーディネーター柴田亨さんたちがまとめられた、記念誌「なぜ識字・日本語学習なのか―よみかき茶屋二十六年の歩みから―」を読んで感慨深いものがありました。マイノリティの社会的立場を受けとめ、寄り添って運営にあたる―そんな理念が心に届き、そのとりくみに今も参加できていることに嬉しさと、喜びを感じました。よみかき茶屋の二十六年の歩みはこの記念誌に詳しく、あのころはボランティア講師を募るのに苦労されていたようでした。大阪市教委を定年退職（一九九三年）した後、大阪府内の市・町・村全域に「外国人教育研究協議会」を設立する準備を府教委に委嘱されていたころでした。よみかき茶屋の活動のおよそを寺北さんから聞いて、共鳴して参加するようになったのです。学習者の「よみかき」の学びへの熱い思いにどのように応えるか、天王寺夜間中学十五年の経験を生かせる場だと思ったのです。学習者の「居場所」であると同時に私自身の「居場所」にもなりました。生涯現役を貫くことが願いでもあったので…。

教室は水曜日には夜間、木曜日は午前中、金曜日は午後の三日間開かれ、学習者は自分の都合に合わせて学習日を選んでいきます。よみかき茶屋の学習者は年齢、国籍などは関係なく、また、読み書きに不自由している識字学習者、日本語の言語に不自由な生活を余儀なくされている来日（滞日）外国人学習者など、ニーズが多様で、コーディネーターは学習グループの編成に心を砕いています。

現在、教室は、森代表と、山北守さん、柴田亨さん、中西弘子さん3人のコーディネーターが中心になって運営されています。私が参加している金曜日の教室は中西さんが中心になり女性スタッフが日常の教室の運営に、また、行事の企画・実施に積極的に協力し合って学習者の期待に応えています。教室では日本語学習を大切にすすめながらも、そこにとどまらず、ボランティア講師と学習者、また、学習者どうしの交流に努めています。前半の学習の後の全体での活動ではスタッフそれぞれの趣味や特技を活かし、ひな祭り・七夕などの日本の伝統文化を体験しながら理解したり、学習者の身につけているお互いの異文化を大事にしています。遠足、防

災学習、また、府内各地で活動している他の教室との交流など多彩な活動にも努めています。日本のこれまで大切にしてきた「教室文化」にとどまらず、よみかき茶屋の文化をめざしています。「教える」――

「学ぶ」から、学習者、講師、スタッフ全員が参加する教室の活動がよみかき茶屋の明るく楽しい雰囲気を醸成しているのです。まさに学習者や講師の「居場所」づくりであり、私の居場所でもあるのです。



よみかき茶屋 学習のようす

・憩いの場 ― 充電の場

(1) ぬくもりの同窓会 ― 感謝の再会

健康食品の製造販売を手がける会社を経営する石田さんから同窓会の案内が届きました。一九五六年、教師にな

って初めて赴任した難波中学校での教え子です。その間に何回かの再会の機会があつたが今回の同窓会は二十年以上たつての久々の再会の機会でした。心おどる四月六日、会場の道頓堀ホテルを訪れた。「稲富先生を囲む会」の横断幕がかけられた会場に案内されました。何事か、驚きとなんともおもはゆい思ひでした。四十数人の学級でしたが、十七名の顔が見えました。久しぶりの同窓会だったとはいえ、にぎやかな集まりになり盛り上がりました。初めは名前と顔が一致せず、とまどつたが、それぞれの近況報告に耳を傾けていると、タイムスリップして当時の姿が蘇って思い出されるんです。話すしぐさ、ものごし、声の特徴など、それぞれに思い当たる個性があつたんですね。教え子たちはもう六十六歳だという。過ぎ去つた時の流れを感じました。家族の介護にたいへんな人、家業の仕事に多忙な人、孫の面倒に手をとられるとばやく人。おたがいの話とぎれることがなく、予定されていた三時間はあつという間に過ぎました。顔を見せなかつた同級生の話題もあり、消息も知ることができました。「今日顔を合やすこと

ができた幸せに感謝しよう。元気であればまた会える。健康でいよう、こんな締めくくりのあいさつで帰路につきました。

それから二年半、今回は歩行の不自由な私を気づかって会場を私が住む枚方市樟葉の駅前のお店で開いてくれました。「教師冥利」とはこういうことなんでしょうか。しかし、こういう場で耳にする故人となった教え子のこと、病氣療養にがんばっている教え子、消息不明の教え子の近況を耳にすることも増えてきて胸が痛むことも増えました。この学級ではなかったけれど、未だに消息の知れない杉本のことが気になりました。悲喜こもごもの同窓会だけれど、私にとって至福のひとつでした。



同窓会の語らい

(2) 卒業から三十有余年

二〇〇二年十一月当時、城陽中三学年十二学級のうち、五組六組の二学級が「促進学級」だった。私と弘田静憲さんが担任でした。卒業後三十年は優に超えている。この教え子の同窓会がありました。卒業生岡村みさんと谷川志乃さんが連絡を取り合って三十年ぶりの同窓会になりました。促進学級の教育環境と教師集団の意識をまとめるのに苦労しただけに、思い入れのある学級でした。六組の呼びかけで五組も加わって総勢三十名を超える集まりになりました。私と弘田さんの他保健体育の担当の滝本さんの顔もありました。久しぶりの同窓会ということもあって、なかなか顔と名前が一致しません。

「村上だろ、ええおっさんになったな」

「あれから三十年、いや、もっと経っているんですよ、先生！　そう言われてみると、先生とあんまりかわらんなあ……白髪がふえて……」

「それはあんまりやで、七十歳のわたしといっしょでは！」

「有美ちゃんびつくりした！ スマートになって、それにきれいになった」

だれかが用意した卒業記念アルバムをのぞきこんで大はしゃぎ。タイムスリップして、あの木造校舎の教室での、それぞれの姿が断片的だがよみがえりました。それぞれにくぐった人生を語りあいました。男は今も城陽中学の地域にいるものもけっこういて。高層マンションの建ち並ぶ地域の変わりようを話していました。

「城陽中で地域の先生たちに講演する機会があつてな。城陽中学校に勤めていた、その時代の話題になつてね、赤井君が城陽中のPTA会長として尽くしていたのだと校長さんが話していたよ」

「へえっ…赤井ががんばったんやなあ…」

ひとしきり地域の話題に花が咲く。やがてそれぞれの近況。

百貨店調理部に長年勤めた、その仕事を語る者。父親の建築業を継いで兄弟で頑張っていると語る者。夫に先立たれ、子育てに頑張っている者。離婚を乗り越え、幸せをつ

かんだ教え子。この不況のさなか、会話の端々にその苦勞が垣間見える。それでもたくましく生活を切り開いている姿を目のあたりにして、うれしかった。この生徒たちを担任した時代は高度成長期にさしかかっていた時代ですが、中学卒業後、就職する生徒達が結構いたのです。とりわけ、「促進学級」に学んだこの生徒たちは製造業や、流通・サービス業に就職したり、家業の商店、建築業や、クリーニンク店の後継ぎをした者もいました。

中学時代、いつも寡黙でなかなか殻を破らなかつた生徒、目立つような悪はしないがちょっと気がかりだった生徒、朗らかで快活で男勝りだった生徒、さまざま顔がありましたが、クラスのまとまりはたいへんよかったと記憶しています。「促進学級」として、学習活動、学級活動での励まし合い、支え合いはたいへん強かったように思います。

みんなの話題は、やはり当時のいろいろな活動、文化祭での発表、運動会での応援合戦、弁論大会に出場する生徒への励まし、卒業後のそれぞれの進路をみんなの前で報告し励ましあったことなどでした。

同窓会の会場は教え子の一人が夫婦で経営する店を提供してもらって延々五〜六時間続いたのだろうか。正午からはじめたのに、わたしがいとまを告げたのがすでに六時過ぎていた。教え子たちはそれから二次会に繰りだしたようでした。

生徒たちが卒業した一九六七（昭和四十二年）ごろは、日本経済の高度成長期のただなかであったが、まだ進学率は七十〜八十％程度でした。クラスで十名ぐらいが就職を希望していきした。「促進学級」はかならずしも進学、就職という進路選択で入級したわけではありませんが、卒業後は就職した生徒も多くいました。家庭の事情さえ許せば、昼間の高校への進学ができたものを、働きながら学ぶ道を選ぶことを余儀なくされた生徒もいたのです。

「五十歳を越えた今だからこそ、先生方の情熱や、愛情の深さを痛感します。今も変わらず『熱い先生』でうれしく思います。先生には『自信のもてる何かを見つけること。自分の可能性を信じていろんなことに挑戦すること』と励まされました：あのころの体験はわたしの体に染みついて

います。子育てにも生きています」、こんなふうにつづけた谷川。

「そんなに喜んでいただいてわたしもううれしい。よかった！先生の元気な姿を見て、わたしたちも頑張れる！」と、世話役の岡村。教師冥利に尽きる。わたしはしみじみとうれしさと充足感を覚えました。

それから二〇一六年十年ぶりに今年の十一月十三日同窓会で再会できました。前回とほぼ同じ顔がそろいました。今回も岡村夫妻が経営する店が会場で再会を喜び合いました。年齢も六十五歳になると言う。それぞれの十年は自身の病、連れ合いさんの看病、親の看とりなどこの時期で誰もがくぐる人生だったようでした。それでも、近況を語り、御馳走に舌づつみをうち、カラオケに興じ、楽しいひとときに盛り上がりました。充足感に浸りながら帰路に就きました。

(3) 楽しみの場で生まれたつながり

一九七〇年代の頃からの長い付き合いの友人たちがいます。JR環状線の天満駅近くに、時々利用したスナック「V

SO」でつながった人たちです。一期一会の出会いから始まり、現在までおよそ三十余年もの長い歳月にわたってつながってきた友人もいます。それぞれが現役時代は違った仕事を持ち、憩いのひとときを求めているこのスナックで偶然顔を会わした店の客同士です。人生の奇遇とはこんなことをいうのでしょうか。私と、この店のママとの出会いがまさに奇遇だったのです。こんな出会いでした。

一九七〇年代末から一九八〇年代は全朝教を立ち上げ、運動を拡大・深化することに多忙な時期でした。確か、年に一度開催していた全朝教準備会主催の全国集会が大阪で開催されたその集会が終わったうちあげのときでした。奨学会関西支部の近くで食事をとったその夜、チョキヒョンさん（当時、奨学会関西支部長―故人）に二次会だと北新地のクラブに案内されました。わたしには全く縁のない世界で、驚きで目をパチクリといった体験でした。そこで働いていた女性が、後にスナックのママさんになったのです。初対面の私に「学校の先生なんですってね。ちようどよかった、いろいろ教えてほしい」何か意味ありげな口調で話

しかけてきたのです。一冊の本を自分のロッカーから取ってきて、「今日、本屋さんでこんな本買ってきました。ためになると思っています。」と見せてくれました。奇遇というのはこの時彼女が手にしていたのが「いま教師になにができるか」と題した本で、共著者として私も、夜間中学に学ぶオモニ・ハルモニのことをまとめた一文を執筆していたのでした。「先生が書いた本？えッ：今日買ったばかり、まだ読んでないけど：」。こんなやりとりの後、その本を他のホステスに買ってもらうからと十五冊ぐらいを売ってくれたんです。そんなことがきっかけになって、ときどきわが子の教育の相談をかけてくるようになりました。こんな奇遇の出会いでした。

「今の子どもたちは幸せね。だって『にんげん』って本あるでしょ。子どもが学校で使っている本ですが読んでみた：素晴らしい：。私たちの時代にはこんないい本教えてくれなかった！と。子育てにひたむきな人だなんて思いました。また、「昼間は空いているんだから、ここ使ってもらってもいいよ」との言葉に甘え、機関紙の発送に店を使

わしてもらったこともありました。著書も出版のたびに店のお客さんに薦め、また、販売もしてくれたのです。こんなかたちで運動に協力してくれるたいへんユニークな人です。そのうちに「考える会」や、夜間中学のシンポジウムや集会、学習会などの打ち上げの後、二次会でこのスナックに繰り出すようになりました。ここで出会った人たちとも何度か顔を合わせるうちにもやま話に花が咲き、親しくなったわけです。それぞれが異なる職業で互いに触発された。

釣りと言えば、近鉄鳥羽から定期連絡船で答志島に一泊旅行に出かけるのが年に一度の恒例の行事になっていったというわけです。これらの行事で



恒例のバーベキュー（つるみ緑地）

もママは世話役をかってくれました。一期一会の飲み友たちからしだいに深いつながりの友人になっていったように思います。顔を合わせ、グラスを傾け、よもやま話に花を咲かせ、カラオケを楽しむだけのことですが…。あのころはみんな若くて元気だったから…よく飲んだね。支払いで、食事代より飲み代の方が高くびっくりしたよ」とママ。後に店は天六に移り、ママの子ども和代さんが経営に加わり、名前も「マインド」に変わったけれどこの飲み仲間が続いています。

みんなから賢さん、賢さんと親しみをこめて呼ばれている原田賢作さんは、私の運動仲間の吹田市の教職員と結婚し、幸せな家庭を築きました。普段は寡黙で静かに酒を楽しむタイプですが、カラオケの歌唱は抜群で、私のカラオケ歌唱の先生みたいな存在です。弘田静憲さんは城陽中学校で「促進学級」を私と二人で担った相棒です。一九六八年ごろ、「促進学級」の実践を中心に城陽中学の取り組みをまとめた「人間開発の教育経営」という本を出版したことがありました。この頃からすでに文才を発揮していまし

たが、後にサスペンス小説や、雑誌「週刊読売」に連載小説を執筆するなど作家活動へと進んだ友人です。彼とも生涯の友になりました。私の文章の先生でもあるのです。

全朝教の全国集会の「基調報告」原稿について意見を求めたり、著書の内容について忌憚のない感想をおねがひしたこともありました。文章作法を教えてもらった友人です。

茶谷田鶴子さんや柑本進さんとも長い付き合いになりました。柑本さんは大会社の幹部社員だったようです。連れだって一緒に来た仲間との話の端々で感じました。旅行のとき、観光地で出店の店主と商品の売買を巡っての駆け引きの面白さや、突然いなくなり、次の予定場所であわて驚かすなど一風変わった言動のできるまた、場の雰囲気や和やかに明るくできるユニークな性格の持ち主です。皆をひきつける才覚があるのです。私の著作の出版記念や運動仲間が私の定年の際し、「稲富進を囲むお祝いの会」にママや、これらの友人たちもかけつけ、励ましてくれました。

これだけ長いつきあいになるとさすがに、それぞれの事情で最近顔合わせることが少なくなりました。残念だ

けれど、仕方ありません。しかし、厚い友情が変わることはありません。

・リハビリを兼ねた公園の散歩 ―癒しの日課

わが家の周りにはわずかだがかつては農地だった遊閑地があります。その土地へ通じる農道を五分も歩けば「市民の森」と名付けられた公園です。私のホームグラウンドです。

ここは枚方市が管理する公園です。元は「鏡伝池」という祭祀に使う「鏡」が出土した小さな池で、枚方市の史跡に指定されています。その池を囲んで作られた公園です。何人かの市の職員が公園の運営や、花卉や樹木の栽培を手がけ、四季折々の花卉を展示して入園者を楽しませてくれます。池の周りおよそ五百メートルに沿って一角には針葉樹や広葉樹が植えられ、ちょっとした自然の森に育っています。春先には鶯のさえずり、けたたましい野鳥の鳴き声も聞かれます。この地に住むようになってかれこれ四十年、樹木の生長は目を見張らせます。

近ごろの私の毎日は、ややもすると単調な、そして自墮

落な生活のリズムになりがちです。責任を負う仕事から遠ざかったからでしょう。十年前、脳梗塞を発症するまではシンポジウムや講演に招かれ、話したり、日教組の教育研究全国集会の共同研究者として助言したりと、けっこう忙しい日々でした。ところが、脳梗塞発症後は闘病に日々明け暮れる生活を余儀なくされました。今は公園「市民の森」が私の日常の生活の中心舞台になっています。

リハビリ中心の毎日になってしまったのです。左半身不随という重い症状との闘いでした。生涯現役と言い続けてきたのに週一日、「よみかき茶屋」に講師として参加し手伝えることしかできません。悔しいけれどそれが現実です。日々同じような単調な生活ですが、これまでの私の生活では見えなかった人々の多様な顔と出会うようになり、それがまた楽しみになりました。公園を訪れる人々はそれほど多くはなく、イベントが開催されているときは別として平日はそれぞれの目的を楽しんでいるようです。入園者には多様な顔があります。季節折々の花を楽しんでいる人、ベンチに腰掛けて絵筆を走らせている人。たまに見かけるつがい

のカワセミを写真におさめようと準備に余念がない写真愛好家グループ。体操やストレッチを楽しむ一団。同病相哀れむではないけれど、お互いの病や、その後のリハビリの様子などの話を交わす人たちも結構姿を見せます。公園の一角には遊具を備えた子どもたちの広場が設けられています。平日は2、3歳の子どもたちの声が絶えません。近くの保育園から運動に來ている幼児たち、中には保育所に入れない、やむを得ず家庭で幼子の世話をしている若いお母さん、ママ友が弁当を広げ談笑する姿、走り回る幼児が無心に遊ぶ姿があります。池の中央付近の歩道から水面をまたぐように突き出た展望台があります。入園者の休憩のベンチがあつて、いつも談笑する声が絶えません。私は遊歩道を早足の散歩、ストレッチを兼ねた体操など、気ままな散歩のあと、ここでしばらく休むのです。ベンチに腰掛けて静かな池のたたずまいを眺めるともなく眺めているのです。何かを考えるわけでもなくただボーっと座っているのです。カメラを放列に並べ、構えながら談笑するグループ、池の鯉にパンくずを投げながら孫さんとの会話を楽しむ老夫婦、

パン屑に群がるハトを追いかけまわす幼児。それぞれに楽しい、安らぎの情景が目に入ってきて和みのひとときになっ
ています。

公園の散歩は今の私にとって欠かせない癒しのひととき、
健康管理の日課になっていることを実感しています。

・私のこれから

これまで、出会った多くの人に自分を語ること、とりわけ、教職を目指す学生に「自分を語る」ことの大切さを教師としての体験を通して伝えてきました。

講演やシンポジウム、講義の中で自身を語る機会は大にたびありました。けれども、それは断片的でしかありません。仰々しく自分史と名付けて書き始めて気がついたのは自分のことを語るとき、気恥かしさや照れ、格好付けがつきまとうことでした。なんども読み返して、ありのままの自分が映し出しているのか、筆を中断し、前へ書き進めないことがしばしばでした。学生や友人に「そのとき何をどのようにに考え、どう、行動したか」を「素直に」、「肩の力を抜

いて」書けばいいのだと、話してきましたが、実はそのことが大変難しいことだと実感しました。最終の目次までなんとか書きすすめてきましたが、ここへきてまた、頭を抱え込む羽目になりました。「これからの私」という目次の見出しを見て筆が全然進まなくなりました。

八十五歳になる私はいまだ学ならず、狭量で怒りっぽく、外出する時、「決して怒鳴ってはいけない」と妻にいつも言われる始末です。

志としては被差別マイノリティの側に寄り添って沿って生きる—そういう生き方を目指してきました。そういう生き方をこれからも続けたい。思いはそうであっても私がいま置かれている身体的状況では出来ることは限られています。筆が進まないのはその為でしょう。今の私にとって最も気にかけていることは右傾化する日本の国の針路と、私たちが長年目指してきた「平和運動」のこれからです。それから、半生こたわった、「民族的のマイノリティの人権保障」をめざす運動の今後です。社会や教育の課題が気になっても、直接関わるのができないもどかしさ、近年の

国際社会のグローバル化に伴うニューカマーの増大への対応も気になります。直接関わることができない私の置かれた状況の中で葛藤しているこのごろの私です。けれども、加齢に伴う身体の場合はあたりまえのことです。あれこれ考えてみても、結論は同じです。「自然体で生きる」ということです。「よみかき茶屋」での居場所づくりの中でできることに最善を尽くすこと、ホームグラウンド「市民の森」で出会った人との交流を深めることに努めます。ウォーキングとは言えない散歩だけれど、欠かさず続けようと考えています。公園で顔見知りになった人々との交流も、もっと深めたいと思っています。カメラを趣味とするグループ、スケッチを趣味に一心に筆を走らせる人たちがそれぞれに人生模様が違います。「人間から学ぶ」^{ひと}絶好の舞台です。思うことはまだまだありますが、やはり志に沿って、生きていくと願っています。

註 1 頼母子講

互いに掛け金を出して、一定の期日にくじ(入札)により順次にお金を融通する集まり

註 2 大阪「考える会」

正式呼称は「日本の学校に在籍する朝鮮人の教育を考える会」。一九七一年四月大阪市立中学校校長会は「研究部の歩み」と題する小冊子を学校現場に配布した。その中に、現場の実態として調査結果が掲載されていた。「外国人子弟教育の実態と問題点」として朝鮮人の子どもや、家庭の実態と称して言葉を失うほどの罵詈雑言が並んでいた。その追及の過程でそのアンケート調査が学校現場、つまり教職員が答えたものであり、教育界全体の姿が映し出された。校長会だけを追及するだけでは問題の本質が解消出来ない、教職員自らの「自覚と責任を明らかにするため、一九七一年七月三十一日に結成準備会が開催され同年九月二十四日に結成された。

註 3 チャンコロ

軍国主義が吹き荒れていた日中戦争・太平洋時代、中国人を侮蔑・揶揄して日本社会で使われた蔑視の表現

註 4 大阪市外教(大阪市外国人教育研究協議会)

一九六五年、「日韓基本条約」の締結をうけて、外国人教育の在り方を研究協議することを国的として、大阪市教育局の委託事業として生野区、東成区の在日朝鮮人の子どもが多数在籍している小中学校が中心に五十二校が加盟した。一九七一年四月、大阪市中学校長会の民族差別文書事件が明るみにだが、その追及の過程でその文書が「市外協」の現場へのアンケート調査であることが明らかにされ校長会だけにとどまらず市外協も追及された。その後、改革され、「大阪市外教」と改称し、「再生市外教」とも呼ばれた。「読本サラム」をシリーズとして発刊し教育現場の期待に応えた。現在も大阪市立学の外国人教育を研究・実践に努めている。

註 5 近隣諸国条項

一九六〇年代以降教科書検定の強化によってかなり希薄になるか、歪められて記述されるようになった。検定のたびに近隣アジア諸国から史実の歪曲だとの非難と抗議が繰り返された。外交問題に発展するに及んで、一九八二年、日本政府は教科書検定に「近隣国際条項」を加えて植民地支配当時の史実の記述を緩和し近隣アジア諸国に配慮した。

註 6 夕間学級

敗戦後の経済の混乱は国民個人個人の生活の経済格差はひどいものであった。

この時期一九四七年にいわゆる戦後民主主義教育は、六・三・三・四制の制度としてスタートした。しかし、経済の混乱は義務教育とされた小・中学校の不就学の増大をもたらした。この状況を座視できなかった大阪生野区生野第二中学校（現市立勝山中学校）乃毛な場教師たちによって「夕間学級」の取り組みが始まった。

後の夜間中学のはじまりである。

註 7 近夜中協（近畿夜間中学連絡協議会）

大阪府、京都府、兵庫県に設置されている夜間中学が加盟している連絡協議会。学校運営、教育内容、共通する諸課題についての協議をすすめる。自主教材読本「日本語」の作成をすすめた。

註 8 大阪市立城陽中の選択コース別学級（促進学級）

城陽中では一九六二（昭和三十七）年に改定された学習指導要領に沿って「選択コース別学級（促進学級）」の実践をすすめた。必修教科をのぞく第三学年の選択教科の指導にあたって、その教科の組み合わせを二つのコースに分類。

・英語科五時間と数学科二時間を履修するコース（Aコース）

・英語科三時間と数学科二時間を履修するコース（Bコース―促進学級）

上記二コースとし、選択教科の時間ごとに学級を編成するのではなく、コースを希望した生徒で学級を編成し全ての教科の授業を行う。結果として、学習に遅れた子どもが多く入級し、いわゆる「就職組」「進学組」に似た形態になった。

P74

註 9 主事

一九七〇年代公立夜間中学には教頭は置かれていなかった。天王寺夜間中学では教職員の中で公選で選んだ「主事」が夜間中学の日常の運営・渉外の責任者であつた。

P78

註 10 創氏改名

朝鮮植民地政策は「皇国臣民化教育」「創氏改名」政策をおしすすめた。

天皇の臣下として日本人に同化させることを狙いとし、日本名を名のることを強いた。在日朝鮮人の通称名の起因である。

P81

註 11 民族教育権

いかなる民族も自己の歴史・文化を自民族に教育し引き継いでいく権利をもつ。

侵すことの出来ない固有の権利として国際条約で保障している。

・国際人権規約第二十七条

種族的、宗教的又は言語的少数民族が存在する国において、当該少数民族に属する者はその集団の他の構成員とともに自己の文化を享有し、自己の宗教を信仰し且つ実践し、又は自己の言語を使用する権利を否定されない。

・児童の権利に関する条約第三十条

種族、宗教的、宗教的もしくは言語的少数民族又は原住民である児童は、その集団の他の構成員とともに自己の文化を享有し、自己の宗教を信仰しかつ実践し、または自己の言語を使用する権利を否定されない。

註 12 一九九一年 日韓外相会談「覚書」

一九九一年、日本と韓国の外相が在日韓国人の法的地位について会談した。その中で在日韓国人の処遇をめぐっての一定の合意が成立した。公務員、公立小・中・高校の応募資格のいわゆる「国籍条項」をめぐるものである。地方公務員、公立小・中・高校教職員の応募資格の「国籍条項」を廃止し応募を認める合意を見た。合意事項をまとめた「覚書」が交わされた。

註 13 大阪市民族講師会

大阪府・市には百七十余校に朝鮮半島にルーツをもつ子どもたちの民族的素養を培うことを目的とした民族学級・民族クラブがある。主としてこの学級の運営に当たる在日朝鮮人の民族講師が一定の身分保障のもとに雇用されている。これらの講師たちが参加している。カリキュラム、授業の内容・方法、教材研究などをすすめている。

註 14 大阪市中学校長会差別文書事件

一九七一年、大阪市中学校長会の組織の「研究部」が研究内容をまとめた「研究部の歩み」と題した冊子を配布した。その中の「外国人子弟教育の実態と問題点」が民族差別文書として「大阪考える会」「大阪市同教（現大阪市人教）、大阪市教組が追及。その他、大韓民国居留民団（現大韓民国民団）、在日本朝鮮総聯（朝鮮総聯）から抗議され、全教育界を揺るがす事件になった。この追及の結果、現場教師の多くに差別意識が潜在することが明らかになった。教師自らの「自覚と責任」を明確にするために「考える会」立ち上げの機運が高まった。

あとがき

やつのことで最終章までたどり着きました。教師として歩んだ途を冷静にまた、総括的にみてまとめたいとの強い思いがありました。どれだけ叶えられたでしょうか。

民族講師会相談役の朴正恵（パクチョンヘ）ソンセンニムには長橋小学校の民族学級開設をめぐる大阪市教委との折衝、「考える会」の呼びかけに応じて集まった大阪府内一円の支援者、西成地域の市民がこの運動をどのような思いで支援しておられたのか原稿を寄せていただきました。また、識字・日本語教室「よみかき茶屋」のコーディネーター、中西弘子さんにはこの自分史の構成や、内容を一般市民の目線で通読していただき、的確な指摘、感想をいただきました。厚くお礼申しあげます。有難うございました。また、本著書が私自身の教師としての生き方の集大成なので、大阪市立難波中学、城陽中学校、天王寺夜間中学の同窓の皆様に手にしていただきたく、出版・頒布協力に多大の支えをいただきました。おかげでこの著書が陽の目を見ることができました。重ねてお礼申し上げます。有難うございました。

稲富 進(いなとみすすむ) プロフィール

一九三二年生まれ。鹿児島徳之島出身。

大阪教育大学卒業、京都大学教育学部研修課程修了。

大阪市立難波中学(一九五六年)、市立城陽中学校を経て市立天王寺夜間中学校(一九七一年～八九年)に勤務。

大阪市教育センター(一九八九～一九九三年)研究所員

一九九二～一九九八年大阪教育大

一九九二年～二〇〇四年関西大、近畿大講師

大阪市総合生涯学習センター事業「識字・日本語教室よみかき茶屋」ボランティア講師として参加。

多くの民族的マイノリティーと出会い、その教育課題に向き合う。

一九七一年「全朝教大阪(「考える会」大阪)結成」代表

一九七九年 全国在日朝鮮人教育研究協議会(「全朝教」)の結成に参画―代表事務局長を務める

著書

・「ムグンファの香り」一九八八年 耀辞舎刊・「文字は空気だ」一九九〇年 耀辞舎刊

・教育新書3「日本社会の国際化と人権教育」一九九二年大阪市教育センター

・「ちがいを豊かさに―多文化共生教育の明日を拓く」二〇〇八年三一書房刊 他

・「島人二世教師と在日朝鮮人教育」二〇一三年新幹社刊他



思いを紡ぐ

二〇一七年一〇月発行

著者 稲富 進

発行者 稲富 進

発行所 寺田出版印刷株式会社

〒五三四一〇〇〇一

大阪市都島区毛馬町五―九―八

電話 〇六一六九二八―三六〇二

出版・頒布協力金

大阪市立難波中学校

市立城陽中学校同窓生他有志

非売品

思
い
を
紡
ぐ

稲
富
進